

---

# 我が家のお猫様！

銀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

我が家のお猫様！

### 【Nコード】

N0746W

### 【作者名】

銀

### 【あらすじ】

古人、曰く。孫家には守り神がいる…。

えっ？ 守り神って俺、ですか…。

俺って神様じゃなくて…今はねこ、なんだけど…。

とある理由で天界から堕ちてきた少年。彼はこの乱世で時にのんびり、時にハードに生きていく……ねこだけ…。

## ぶろろーぐ。(前書き)

はじめて小説を書いてみます。  
拙い文章ですが、見てもらえたとうれしいです。

ぶろろーぐ。

ここはこの街で一番眺めがいい。  
俺のお気に入り場所だ。

下には賑やかな街の風景が見渡せる。

人々はみんないつもと変わらない笑顔を浮かべ、今日も暮らしているようだ。

それを上から見下ろしながら、欠伸を一つ。

上には燦々と照りつける太陽と白い雲が浮かんでる真っ青な空。  
そよそよと吹く風が涼しくて、ちっとも暑さを感じさせない。

まだお昼寝には早い時間だけど、瞼が重くなって来た……。  
けど、今はまだ寝るわけにはいかない。

その眠気を覚ますように空を目を細めて見つめる。  
いや、正確にはその先にある場所を見つめた。

そう。あの雲の……この空の……ずっと先。  
ずっとずっと先に俺の故郷がある。

『天』

故郷をこの国の人々はそう呼ぶ。  
俺はそこから堕ちてきた。いや、堕とされた。  
持っていた力を全部、封印されて……。

そういえば、みんな元気なのかな……。  
そんな風に故郷の友達のことが頭に浮かぶ。

あつ、あいつらも別のところに堕とされたんだっけ？  
少しはおとなしく……。

……だめだ。あいつらのそんな姿が想像できないぞ……。  
むしろ楽しんでそうな予感がヒシヒシと……。

……。  
ま、まあ、元気なのはいいことだし……。  
……あんまりバカな騒ぎを起こしていないといいなー。  
佐伯先生……また胃薬飲んでるのかな？

少し浮かんだ嫌な考えを振り払うように頭を振っていると、

「蓮<sup>れん</sup>、どこにいるの？」

「れ〜ん〜、ごはんだよー！」

俺のことを呼ぶ二人の声が聞こえてきた。  
真下を見ると、俺を探している桃色の髪の二人の姿が見えた。  
どうやら昼飯のようだ。

俺はすぐに登っていた場所から飛び降り、二人の下へと向かう。

「あつ！　ねえさま、いた！！」

「蓮！！」

俺を見つけた二人はその顔にとびっきりの笑顔を浮かべた。

「もう～蓮？　一体どこに隠れてたの？」

二人の内、背の高い方の活発そうな女の子……雪蓮がそう聞いている。

別に隠れていたわけではないんだけど、結構探させてしまったみたいだしな……。

俺はぺこりと頭を下げる。

「まったく。蓮がいなくなったーって、蓮華が心配して泣きだそうとしてたわよ？」

「ね、ねえさま！」

雪蓮にそう言われて慌てる、人前だと少し大人しくなる女の子……蓮華。

恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして雪蓮に詰め寄っている。

雪蓮はそれを楽しそうに笑いながら小声で何か蓮華に言っているみたいだ。

この二人は、今の俺の家族でこの家の大事なお姫様だ……。いずれは呉の王様にもなるんだろうな。

俺は昔からずっと遊んであげたからか、すごく懐かれてる。  
実は寝ないで我慢していたのも……二人のためだったりする。  
まあ、たぶん昼飯を食べたらすぐに寝ちゃうけどね……。

今日は満月の夜だし、今のうちにたくさん寝溜めしておかないと。

「さてと、母様達も待つてるし……戻るわよ！」

「はい！ れん、いくよ？」

そう言つて俺を両手で抱きかかえる蓮華。

四歳の女の子に軽々と抱きかかえられる俺。  
これにももう慣れたもんですよ、はい。

えっ？　なんで抱きかかえられるのかって？

答えはすつごく簡単。

「蓮？　聞してるの！？」

「にゃんっ！」

「ね、ねえさま！　そんなにつよくひげをひっぱったら……」

だつて今の俺の姿は……。

「「あっ……」」

「にゃー!!」

猫、なんだもん。

## ぶろろーぐ。（後書き）

見ていただいてどうもです。

誤字脱字、間違っている箇所などあれば指摘していただけるとうれ  
しいです。

よろしければ感想などもいただけると作者の励みになります。

## 第一話。　ねこライフ。

俺の朝は早い。

夜が明けて、空が白んでくる頃には起き出し、寝台から出る。  
実はこれがなかなか大変だったりする。

理由は、今も俺を抱き枕かぬいぐるみのように抱きしめていらつしやる、孫家の次女さんだ。

雪蓮ならば身体がもう大きくなったので、隙間から楽々と抜け出せるのだが、蓮華はまだ身体が小さいので、丁度いい感じにロックみたいになつて抜け出すのに大変苦労する。

しかもこの子は俺がいないと感じると、起き出してくるのだ。そして俺を探し始める。

以前にそれを何度かやられたので、母親である孫堅こと…水蓮にぬいぐるみを用意して貰って、それを俺の身代わりにすることで脱出を図っている。

孫家のねこは身代わりの術が使えるのだよ……。  
必須技能ともいえるな。

ささっと城を抜け出し、そのまま港へと急ぐ。  
呉には海がある。

そう、つまり……。

いつでも新鮮なお魚が食べれるということだ!!

「おっ？ 猫神様じゃないか……。ほら、さっき取れたばかりの魚だよ！」

「にゃ」

ここの人たちは俺が来るとこうしてお魚を分けてくれる。  
でも、これはこの人に限ったことではなく……この街の人、みんなが結構くれたりする。  
なんでも俺はこの街のマスコットの存在なんだとか。  
もちろん、ファンサービスは欠かせない！

「おー！！ 今日もいい毛並みしているな！」

そう言つて、俺の頭を撫でてくる漁師さん。  
大きくてごつごつした手だが、この手がたくさんのお魚を取って来るのだ。

少しくらい頭がグラグラするのは耐えようじゃないか。  
これでも前よりはうまくなっただから……。

朝食をこうして済ませた後は、ゆっくり歩きながら城へと戻る。

食後に激しい運動はしちゃダメだよ。

もう多くの人々が活動を始めて、どんどん賑やかになって行く街。今日も頑張ってください。

そんな光景を眺めながら、城内に入る。

そして、あいさつをしてくれる侍女たちに返事を返ししながら、悠々と廊下を歩いていると。

「蓮ー！ おはよー！」

「あら、今日はいつもより早く戻ってきたのね」

「……おはよう」

孫家の親子に遭遇した。

どうやら今から三人で朝食のようだ。

「にゃー」

俺もあいさつを返しておく。

「よつと」

俺を軽々と抱える雪蓮。

そして……。

「ん？　なんか魚のにおいがするわね…。蓮、また外で朝ごはん貰ったの？」

「にゃーん」

まさにその通りなので、返事をする。

お魚、最高！

「魚ってことは、港まで行ったのね……。結構ここから距離があるのに……」

呆れたといった感じで俺を見てくる水蓮。

……わかってないな。

その距離を頑張ればおいしいお魚が食べれるんだぞ！

行くでしょ！ 普通！

猫まっしぐら！！

抗議の目線を水蓮に向けていると、さっきから視線を別のところから感じるのでその方向を見る。

「……………」

そこにはじー、と俺を見つめる蓮華がいた。

う、うん。見るからに不機嫌だ……。

これはひょっとして、いやしいでも……。

「蓮華が蓮がいなくなったーって泣いてたわよ……」

「宥めるの大変だったんだからね……。貸し一つ」

小声で俺にそういつてくる似たもの親子。

貸し一つって汚いな、さすが水蓮、汚い！

てかやっぱし、俺の所為なんですか……。  
はぁ。

「……………」

未だに俺を無言で見つめる蓮華さん。

正直こわいです。

これは将来、病んでしまったりしないよな……。  
俺はそこはかとなく不安になりました。

不機嫌な蓮華ではありましたが……。

そこはこの蓮さん、伊達に何年も飼い猫をやっていますよ。

足にすりすり、お腹を見せて撫でくれポーズ、喉をゴロゴロと鳴らす、など飼い猫に必須の108の技を駆使して、うまいく、じょうずに甘えてみせれば、あら不思議。

いつの間にかすっかり機嫌を直して俺を撫でている蓮華の出来上がり！

ふっ、ちよろいな……。

俺にかかればこんなもんさ。

すみません、うそです。  
結構しんどかったです。

何度もやりたくはないです。

自分調子に乗って、すみませんでしたー！。

そんな感じで少しグツタリと昼飯を食べ終え、ゆっくりとお昼寝で  
しようとするが……。

「蓮！ 遊ぶわよー！」

今度は大変元気な長女に捕まりました。

こうして始まりました。

雪蓮VS俺、蓮華連合とのかくれんぼ対決。

俺はまあ、隠れた雪蓮を探す蓮華のサポートを担当するだけなんだ  
けどね。

この自慢の五感をフルに使って見つけてやるぜ。

では、スタートー！！

「れん！ どっち？」

「にゃっ！（右っ！）」

蓮華の腕に抱かれながら、においのする方を指差す。  
それに蓮華は頷いて進んでいく。

今の気分はオペレーター。

次の通路を右、ここはまっすぐで、もう一度右だ……などなど様々な指示を蓮華に出し、どんどん進んでいく。

そして、部屋の前でにおいが途切れている所を見つけた。  
つまりあの部屋の中に雪蓮はいる！

「にゃ、にゃ！（こじ、こじ！）」

「このへやにいるのね。いくよ、れん」

そして、部屋に突入。  
しかしこの部屋は倉庫だったみたいで……すぐには見つからなかった。

「きっと、ねえさまはどこにかくれてる。さがすよ、れん！」

「にゃー！（ラジャー！）」

こうしてしらみつぶしに探していると、一番大きな木箱からわずかに音が鳴った。

そこかっ！

「にやつ！」

俺の指示で蓮華がすぐさま木箱のフタを開けると……。

「ねえさま、みーつけた！」

「ありやりや、見つかったか〜」

そこには予想通り、雪蓮がいた。

この勝負、俺たちの勝ち！！

さてと、結構頑張ったから疲れたし、お昼寝を……。

「なら次は私が鬼ね。蓮華、隠れていいわよ」

「うん！」

……まだまだ続くみたいです。

ううう。ドナドナ……。

結局、夕飯まで遊びまわることになった。

確かに楽しかったけど、めっちゃ疲れた〜。

そして今はすごくねむい、です。

水蓮の膝の上に座って頭を撫でられていると、だんだんと瞼が落ち

てきた。

「あらら、もう眠いの？」

「にゃー」

うん、もう限界。

「ふふふ。仕方がないわね……おやすみなさい、蓮」

おやすみ……。

## 第一話　ねこライフ。（後書き）

見ていただいてありがとうございます。

まだまだ原作ははじまりません。

スロースタートですけど、お付き合い頂けるとありがたいです。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。あと感想などもお待ちしています！

## 第二話　お風呂でパニック！？

お風呂。

それは、身体の汚れを落とせる素晴らしいもの。

お風呂。

それは、一日の疲れを癒してくれるオアシス。

お風呂。

それは、命の洗濯。

お風呂。

それは、自分だけの至福の時間。

様々な言葉はあるが、結論をいえば……。

お風呂はすごくいいものである！！

かくゆう俺も好きだった。

長い時は一時間とか普通に浸かってたし……。

温泉とかもいいよね。露天とか、景色最高だし。

そう。大好き、だったんだよ？　昔は……。

だけど、今は……。

「蓮華！　そっちにいったわよ！！」

「うん！」

「にゃー！」

お風呂なんか大っ嫌いだー！！

どうも、蓮です。

ただ今、逃走中であります！

「待ちなさいー！」

「れん！」

後ろから追いかけてくる雪蓮から逃げ、前に立ちふさがって、捕まえようとしてくる蓮華の脇を抜け、廊下を俺はひた走る。

ふつ、今の俺は誰にも止められない、止まらない「いたぞー！！」

……ぜ……？

余裕の表情で逃げていた俺の目には、こちらを指差す兵士の皆さま。ここは緊急停止だ。

俺が止まったのを見て、こちらに向かってくる兵士さん。

その数を見て、冷や汗が出た。

いやいや、何人いるんだよ……。

慌てて、逆方向に引き返そうとするが……。

「蓮！ 覚悟しなさい！！」

「もう、にげられないよ」

そっちには二人の姉妹と数人の兵たちで塞がれていた。

「」覚悟ください、蓮様」

いや、あの、兵士みなさんたち？ あんたら他の仕事をしようよ……。

「これも孫堅様の命令ですので……」

あー、さいですか……。

「さいなのです」

てか心読むなし……。

お前はエス……「エスパーではありませんよ？」

……。もはや何も言うまい。

しかし、マズイ。これは非常にマズイですよ！  
今の俺にはオボロガードは使えないというのに……！

そんなことを考えている間にもどんどんと距離がなくなってきた。  
くっ、仕方ない。ここは一か八か、正面突破だ！  
俺がそう考えた、その時。

「みんななして一体、何をやっておるんじゃ？」  
救いの神はやってきた。

おお、祭！ 今、君が輝いて見えるよ！！

「ん？ なんじゃ？ 蓮、また追いかけておったのか……」  
祭は囲まれている俺を見つけると、ひょいと両手で持ち上げてそう

聞いてきた。

「にゃー！」

俺はそれに頷く。

そうなんだよ！ また、なんだよっ！  
ちよつと聞いてよ、祭姐さん！！

「全く……こんな人数で何をしていると思えば……」  
そうだよ！ 三十人はいくらなんでも多すぎるだろ！？  
もつと言つてやってくれ、姐さん！

「孫呉の兵ならばせめて、半分の人数で捕まえて見せんかつ！」

「……すみませんでした」「」  
祭の一喝で一斉に頭を下げる兵士たち。

えっ？ ていうか怒るとこ、そこなの？  
追いかけるなよ、とかじゃなくて……？  
俺の疑問を余所に、祭は話を続けていく。

「まったく、こんなに大騒ぎにしようて。策殿、権殿。少し騒がし  
すぎますぞ？」

「うっ、ごめん」

「ごめんなさい……」

雪蓮と蓮華も祭に謝る。  
うんうん、さすが姐さんだ。

さっきのは気のせい……。

「大体、相手はこの蓮ですぞ？　もっと頭を使えば、捕まえるのは簡単だろうに……」

……じゃない、だと！？

「本当に！？　そんな方法があるの？」

「もちろんじゃ。簡単に捕まえられるわい」

「ふん。じゃあ、祭のお手並み拝見ね！」

あれー？　これって俺、また逃げなきゃいけないパターン？  
マジですか……。

けど……簡単に、ねえ。

言うじゃないか……。

追加ミッション：祭の魔の手から全力で逃れる！　が発生しました。

勝利条件：制限時間内までに捕まらないこと。

敗北条件：祭、雪蓮、蓮華もしくは兵たちに捕まること。

受ける

受けない

祭！　君の挑戦、俺は受けよう！！

ミッションを受諾しました。  
カウントを開始します。

5、4、3、2、1……0！

では、ミッション、スタート！！

さあ、始めようか！

「にゃー！！」

「ほら、逃げようとするないの！」

どうも、蓮です。

負け犬、ならぬ負け猫の蓮です。

もうお分かりかもしれませんが…。ミッションは失敗しました。まさか、あんな手を使ってくるとはあの蛇さんもびっくりだよ……。あれが孔明の罠って奴です。

「何言ってるのよ……。焼き魚のにおいに釣られて、のこのこやってきただけじゃない」

「うん、すごくかんたんだった。こんどからはあのさくせんでいこうね、ねえさま！」

ぬぬぬ。

なんと卑怯な……。

ていうか、心を読むな！

「まあ、いいじゃない。兵士にも読めるんだし、私たちが読めても……」

「れん、わかりやすい」

いや、全然、良くないんだけど……。

そんなこんなで結局、風呂場に連行されました。

「ふふふ、さーで。今日は隅々まで綺麗にしてあげるわよ」

「わたしもがんばる！」

目をキラキラと光らせている雪蓮。

小さく拳を作って、気合いを入れている蓮華。

はぁー、もう諦めよ。

やる気満々な二人を見て俺は深くため息をついた。

くねこ、洗浄中く

「はい、終了く。蓮華、もう蓮を連れて行っていいわよ？」

「うん！」

身体の隅々を洗われ、ぐったりした俺を抱きかかえ湯船へとむかう蓮華。

もうやめて、私のライフはゼロよ……。

ううう。

毛が……。毛が……。ベチョツとして気持ち悪い……。

だから、嫌なんだよな……。

濡れるとすぐ体温下がるし……。すぐに乾かないし……。

「れん？ だいじょうぶ？」

俺の方を心配そうに見てくる蓮華。

「にゃー」

俺はそれに弱々しく返事をする。

全然、大丈夫じゃないです。

けど、逃げる元気もないくらい疲れてます……。

「そっか。あとで、ちゃんとふいてあげるからね」

「にゃー」

ありがとう……。

蓮華……。君、ええ子やな。

……なんて言うと思ったか！

次は！ 次こそは逃げ切つて見せる！！

そう心に誓つ、蓮なのでしたー。



## 第二話　お風呂でパニック!?（後書き）

第二話、終了です！

やっと思さん登場でした。

これからは他の人も出していききたいなと思っています！

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

第三話 見た目はねこ、頭脳は大人…。その名は、蓮！

ねこ、それは仕える者。

ねこ、それは傳く者。

ねこ、それは主の生活すべてをサポートするフォーマルな守護者。  
そう。これは少女たちのため、命を賭けて戦うねこの超コンバット  
バトルストーリーなのである。

中庭にある屋根つきの休憩所。

そこには二人の少女と一匹の猫の姿があった。

白い猫は盤の上を真剣に見詰めた後、自らの主に指示を出す。

「にゃ！」

「わかったわ。ここね！」

「なっ！ 今度はそうくるのか……」

ども、蓮です。

ただいま、雪蓮に駒を動かしてもらって、冥琳と将棋で勝負しております。

これに勝てば今日の夕飯はお魚なのです！！  
俺、張り切っちゃいますよー！

切っ掛けは俺がのんびりと城内を歩いているときのことだった。  
中庭に行くと聞きなれた声が聞こえてくる。

「あゝ、また負けたゝ」

「ふふふ。まだまだだな、雪蓮」

近づいて行ってみると、どうやら雪蓮と冥琳が将棋を打っていたみたいだった。

盤を見てみると…。雪蓮はほとんどの駒が取られてしまっていた。

雪蓮の勘も将棋には効かないんだなー。

てか、将棋なんてもう何年も打ってないな……。

そう思って、自分の手を見てみる。

……………。

ピンクっぽい肉球と出し入れが出来る爪があった。  
これじゃあ駒がもてねーよ。

はあゝ、とため息をついていると……………。

「あら？ 蓮じゃない」

「ん？」

俺の姿に二人とも気がついたようだ。

早速、雪蓮に抱きかかえられる。

そして、俺を見ると何か思いついたような顔をした。

「あつ、そうだ！ 冥琳、もう一度やりましょ」

「ああ、別にかまわんが……」

「あと蓮も一緒にやるけど、いい？」

「蓮が……？ まあ、いいけど……」

冥琳が怪訝そうな顔をしながら俺を見ってくる。

まあ俺、ねこだし。当然かな……。

「蓮……。もし冥琳に勝ったら、今日の夕飯は魚にしてあげるわよ」

そう俺に小声で言ってくる雪蓮。

将棋でねこに頼るとは……。

あー、これが猫の手も借りたいって奴なのかな……？

しかし、お魚のためなら……。

やってみせましょう！ マイロード……！！

「にゃん！」

俺は力強く頷いた。

「よし、ならもう一度勝負よ！ 冥琳！」

と、まあそんなこんなで頑張ってるわけなんですが……。

うん、冥琳強いね。

とても八歳とは思えないよ……。

俺が小さいころとは比べ物にならないくらい冥琳は強かった。  
これなら、雪蓮が苦戦するのも頷ける。

けどな……。

まだ俺の方がもう少しだけ強い！

「にゃっ！」

これで王手だ！！

「さあ、冥琳。貴女の番よ？」

「うぐぐ……」

雪蓮が余裕の表情でそう言う。

対する冥琳は悔しそうな顔をしながら、盤を見つめている。

そして……。

「……参りました」

「やったー！ 冥琳に初めて勝ったわ！！」

冥琳の降参宣言を聞くと、雪蓮は俺を上が高く持ち上げてすごく喜びます。

俺もすごくうれしいです。これでお魚ゲットだぜ！！

ただ……雪蓮……。

勝ったのがうれしいのはわかるけど……あんまり振りまわさないで……目が……目が……回る。

〈SIDE冥琳〉

うれしそうにはしゃいでいる雪蓮に振りまわされ、グッタリとしている蓮を見て私はため息をついた。  
負けた……。猫に負けた……。

そういえば母さんが昔、蓮に将棋で負けたって言ってたわね。  
正直、冗談だと思ってたんだけど……。  
実際に負けたしな。

はあ。

しばらく落ち込みそうだ……。

「冥琳？ 何、ため息をついてるのよ？」

「……いや、猫に負けたのが、少しな……」

「ふふん、すごいでしょ。うちの蓮はすごく賢いのよ」

そう言つて、雪蓮は膝の上に座っている蓮を撫でていた。蓮は大人しくされるがままになっている。

頭を撫でられると目を細めて、首の下を撫でられるとゴロゴロと喉を鳴らす。

その姿はともかわいらしくはあるが……。

やっぱり何度見ても普通の猫にしか見えない。

それが、あんなにこつちの手を先読みしてくるとは……。

とてもじゃないが、猫とは思えん。

まあ、街では猫神様なんて呼ばれて親しまれているし。

あと私たちよりも永く生きているらしい。

前に聞いた何百年も生きているというのはさすがに嘘だろうけど……。

私がそんなことを考えていると、いつの間にか蓮が目の前にいた。

「にゃ」

蓮は私の顔をその深紅の瞳で見つめて、首を傾げながらかわいらしく鳴いた。

私が手を差し出すと、それをペロツと舐め、頬をこすりつけてくる。

か、かわいい……！

私は思わず笑顔になり、蓮を撫でた。

蓮はゴロゴロと喉を鳴らしながら、なおも甘えてくる。

蓮…かわいすぎるぞっ！

私ももつと優しく蓮を撫でてあげる。

ああ、なんか蓮に負けて落ち込んだことも、蓮の不思議さもどうでもよくなって来たな……。

いいじゃないか、蓮はこんなに可愛いんだから……。

「あらら、あの堅物の冥琳も蓮の前では形無しね」

私の顔を見て雪蓮が笑う。

まったく、私だって可愛いと思うことはあるんだぞ。

しかし、本当にかわいいな。

あっ、そうだ。

蓮を家に連れて帰ろう。

「堅物は余計だ。なあ、雪蓮……」

「んー？ 何？」

「蓮を私にくれ……」「蓮はあげないわよ」……そうか……残念だ」

本当に、残念だ……。

仕方がないな。

今、目一杯愛でるとするか……。

それから私は私と雪蓮の二人で、夕飯までたくさん蓮を可愛がった。  
蓮は少しグッタリしてたけど……まあ、大丈夫だろう。

その日の夕飯の時。

好物に見向きもせず爆睡している猫を見て、多くの人が心配した  
というのはまた別のお話……。

第三話。見た目はねこ、頭脳は大人…。その名は、蓮！（後書き）

第三話、終了です！

今回は冥琳でしたー。

どうでしたでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では次回にお会いしましょう。

第四話。 ねこ、たたかう。(前書き)

今回は少し悲しいお話です…。

#### 第四話。　ねこ、たたかう。

負けられない戦いがある。

譲れないものがある。

護りたいものがある。

何もそれは人間に限った話ではない。

それは俺たち、ねこだってあるんだ……。

これは悲痛な運命と戦った男の……いや、ねこのお話である。

今でも思い出すと震えちまう。

あれは猫なんかじゃねえ……。そう、虎だ……。まるで虎だった。

-----目撃者A男さんの証言。

すごかったですよー!!

まさに一騎当千！

彼こそ真の……三国無双です！

――――目撃者B子さんの証言。

猫神様、強くてカッコ良かった。

――――目撃者Cくんの証言。

その日、彼はすごく機嫌が良かった。

今日の昼食にお魚が出たし、その後、二人の姉妹にブラッシングもしてもらった。

先日、水蓮が三女を出産するといううれしいニュースもあり、そして何よりここ連日続いていた雨が止み、今日は晴天なのである。

そんなわけで彼は猫のくせに歌を歌いながら、散歩していた。

「にゃ、にゃ、にゃ、にゃあ～にゃあ～にゃあ～にゃあ～にゃ、にゃ、にゃ」

そう、本当に機嫌が良かったのだ、この時までには……。

「にゃ？」

街の子供たちに撫でられ、老人たちに拝まれ、お店の人たちに食べ物を買う。

そんな風に街を歩いていていた俺は路地裏で、ある奴らに遭遇した。

飼い猫とは反対の位置にいる、野良猫たちである。

もともと、毛が真っ白で目が真っ赤というアルビノ系のねこである俺は、非常に他の猫から絡まれやすい。

やはり、どうしても目立ってしまうしな。

しかし、そこは昔からこの街、建業に住んでる俺。

この街の野良猫のボスとは仲がいい。

だから、野良たちがケンカを売って来るはずがない……。

そう、思ってた時期が俺にもありました。

「ウウウウ」

「フー、フー」

何やら戦闘態勢に入っている野良猫たち。  
仕方がないので、

たたかう

にげる

まほう

はなす

まずは話しかけることにした。

注意：ここから先は猫語となっております。傍から見れば、にやー、にやー言ってるだけです。

「おい。お前ら、一体どうしたんだ？」

「うるさい！ この悪魔め！ ここで死ぬお前に話すことなんか何もない！」

「お前の討伐命令が出たんだ、悪いが死んでもらうぞ」

猫Aは言わなかったが、猫Bが事情を話してしまった。  
大丈夫か。その連携のなさで……。

てか悪魔とかすつごくく久しぶりに聞いたんだけど……。

「…討伐命令ね。穏やかじゃねえな、ブンタの奴がそう命令したの

か？」

一応、あいつとは杯を交わした仲だし、信じられないんだが……。俺が猫どもに問う。

「……………」

しかし奴らは何も言わない。  
何か事情があるのか……？

「だんまり、か」

俺がそう呟いた瞬間に、もう一匹の猫が飛び掛かってきた。

……………この……身の程知らずがっ！！

「はぁ、はぁ、はぁ」

俺は街を走っていた。

急げ、急げ、急げ！！

人々が慌ててる俺を見て驚いていたが、それを全部無視して駆け抜

けた。

クーデター。

簡単に言うとそれが起こった。

どうやらNo.2だった、ギンが反旗を翻したみたいだ。

ギンはその冷酷さで有名だった猫だ。

一応、ブンタに従ってはいたが、ずっとチャンスを狙っていたのだろつ。

そんなことを考えながらも、俺は目的地へ向かう足を止めなかった。そして、辿り着く。

人間がほとんど入ってこないその場所に……あいつはいた。

……傷だらけの姿で。

「ブンタ！」

俺はブンタに駆け寄り、容体を見るが……酷かった。

全身引つ掻き傷だらけで、毛玉も飛び散っている。そして首には一番大きくて深い、噛まれた傷があった。

……もう永くはない。そう思った。

「ブンタ！ おいつ！ 聞こえるか！？」

「ううう。れん、にい？」

俺が再度呼びかけると、ブンタは焦点のあっていない目で俺を見て、

俺の名を呼んだ。

「ああ、蓮だぞ！　しっかりしろ！！」

「……蓮にい……頼みがある……んだ。俺の……俺の息子を……」

意識の戻ったブンタに俺はさらに声をかける。

すると、ブンタは弱々しい声でそう言ってきた。

息子……？　確かコタロウ、だったか……？

「息子がどうかしたのか……？」

「今、ギンの奴……に捕まってる……んだ。頼むよ、蓮にい……。俺じゃあ、無理だった……。あいつを……助けて……やって……くれ……」

弱っているブンタは俺に必死に懇願する。

自分の息子を助けてくれって……。

「……わかった。この兄ちゃんに全部任せとけ！

」

それに俺は大きく頷き、そう言った。

弟分の最期の頼みだ、もちろん聞くさ……。

「へへへ、あり……がと……蓮……にい……」

ブンタはそれを聞くと、笑顔を浮かべた。

子猫の時からちっとも変わらない、あのとても無邪気な笑顔を……。

そして、静かに目を閉じた……。

「……おやすみ、ブンタ」

〈SIDE 雪蓮〉

「っ！」

冥琳と話をしていると突然、蓮の鳴き声が聞こえたような気がした。いつもとは全然違う鳴き声が…。

「ん？ どうしたんだ、雪蓮？」

「すごく怒ってる……そして、それ以上にすごく悲しんでいる……」

どうしたんだろう……？

気のせいじゃないって勘が言ってる。

「雪蓮、何を言っているんだ？」

「蓮よ。蓮が泣いてるわ」

「あの蓮が？ ……またいつもの勘か？」

「ええ、それに声が聞こえたの……すごく悲しそうな声が……」

そう言って私は窓から外を眺める。

蓮が帰ってきたら、頭を撫でてあげよう。

だから無事で帰ってくるのよ、蓮？

〈SIDE 水蓮〉

「かあさま……れんが……」

「ええ、泣いてるわね……」

新しく生まれた娘、小蓮を寝台で抱えながら、横に付いている蓮華の頭を撫でる。

蓮の悲しい声を蓮華も聞いたみたいだ。

「だいじょうぶかな？」

「ええ、大丈夫よ。だって蓮は守り神だもの……」

「……まもりがみ？」

きょとん、とした蓮華の顔を見て、笑ってしまった。

あれ、守り神の話は前にしなかったかな……？

「ええ、守り神。前に話さなかったけ？」

「ううん。きいたことはあるけど……それが、れんなの？」

ああ、蓮だってことは話さなかったんだったわね。  
今、思い出したわ。

「そうよ。私たちを何百年も守ってくれている神様なの」

「れん、すごいんだね！」

まあ、今はただの猫なんだけど……。  
でもいつかはこの子も会えるでしょう、本当の蓮に……。

そう思いながら、私はまた蓮華の頭を撫でるのだった。

〈SIDE 蓮〉

俺は野良猫がたくさん集まっている広場にやってきた。  
奥の方にはコタロウがいる。

「来たな、悪魔め……」

俺をたくさんの数の猫が囲んで来る。  
その中で、少しだけ身体の高い灰色の猫…ギンが俺を見てそう言った。

悪魔……。

五年くらい昔に俺とブンタの二匹で、こちらで悪さをしてた野良猫達をぶっ飛ばした時についた俺の渾名だ。  
今、思えばすごく懐かしくも感じる。

「この数を相手に一人で勝てると思ってるのか？」

「……………」

「へっ！ こいつ、俺らにビビってやがるぜ！」

おっと、昔のことを考えてたら……話が進んでたみたいだ……。なぜかギンも周りの猫たちもバカ笑いをしている。

「どうせブンタと同じでお前も大した事ねえんだろ…？」

「違いねえ。あいつ、息子を見せた途端に大人しくなったしな」

折角、俺がさ……。

違うこと考えて……………。

「お前ら、そいつもブンタみたいにやっちゃまうぞ…！」  
そのギンの言葉で囲んでいた猫たちが一斉に俺に向かって来る。

「このどうしようもない怒りを抑えてたって言うのに……！」

「『『『『『死ね！！』『』『』『』』」

もういいか。

限界だ……。

「……なめるなよ、この小僧どもがっ！！！！！！」

周囲に俺の咆哮が響き渡った。

戦いが終わった……。

俺の周りには野良猫たちが倒れこんでいる。  
致命傷の傷は付けてない。

殺す気はもともとなかった、そんなことをしてもブンタは喜ばないからだ。

「今度、コタロウに何かしてみろ……お前ら、全員噛み殺してやる！」

俺はそう言い残して、コタロウのもとに向かった。

「誰、ですか……？」

「俺か……。蓮だ」

俺はコタロウに名前を教えてやる。  
あれ？ この状況、前にどこかで……。

あつ、そうか。  
初めてブンタと会ったときに似てるんだ。

それだからだろうか……。

「蓮、さん……」

「……。別にさんづけはしなくていい。俺のことは……そうだな、蓮にい、とでも呼んでくれ」

コタロウにそう言ってしまったのは……。

夜も更けきつた頃、俺は城に帰った。

静かに部屋に入ると、水蓮が起きていた。

どうやら俺の帰りを待っていたようだ。

「遅かったわね……。頑張つてあの子たちも一緒に待つてたんだけど……」

視線を向けると二人で仲良く寝ている姉妹がいた。

幸せそうに寝ているみたいだ。

それを眺めていると……。

水蓮が俺を持ち上げて膝の上に置き、俺を撫で始める。

「お疲れ様……。今日は色々あつたみたいね……」

ああ、あつたよ。

うれしいことも悲しいことも……。

一つの出会いと一つの別れがあったよ……。

「そう、なら今日はもう眠りなさい。……疲れたでしょ？」

うん、そうするよ……。

おやすみ、水蓮。

「ええ、おやすみ……蓮」

その日、俺は昔の夢を見た。  
すごく懐かしい夢を……。

第四話　ねこ、たたかう。（後書き）

第四話、終了です。

いつもより少し暗いお話でしたが、どうでしたでしょうか…？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！  
では。

## 第五話 陽だまりの中で

赤ちゃん……。

それは愛でるもの。

猫……。

それも愛でるもの。

では、その二つが一緒にいたら……？

そんなの決まっている……！

超、愛でるんだ……！！

どうも、みなさん。

孫家さん家で飼い猫をやっています、蓮です。

突然ですが、貴方は子守りをしたことがありますか……？

私があります。

人間の時もそして猫のときも……。

そう、もうお分かりかも知れませんが、私こと蓮は……。  
只今、子守りをしています！

お相手は、生まれてまだ四力月の女の子、小蓮ちゃんです。

振り返れば今日の朝の話。

朝食を食べている時に水蓮が話しかけてきた。

なんでも今日はいつもより政務が忙しいとのこと。

それで何を思ったのか、彼女は俺に小蓮の面倒を見るように頼んできたのだ。

いや、侍女に頼めばいいんじゃない？ という俺の意見はもちろん却下されてしまう。

断れば、しばらくお魚抜きとのこと。

なんと理不尽な世の中か……。

絶望した！ そんな世の中に絶望した！

とまあそういうわけで、今日は子守りをすることに……。

さっきまでは雪蓮も蓮華も一緒だったのだけど、今は勉強の時間らしく、今は小蓮と二人つきりです。

まあ、でも子守りは慣れているので俺だけでも余裕でしょう。

「あー、あー」

「にゃー！」

ちょ、おま、止めて！  
ヒゲは握らないで！！

そう思っていた時が俺にもありました……。

ねこ、大苦戦中です。

前の蓮華がすごく大人しい子だったので、完全に油断しました。

そういえば、孫家の子供はこういう子ばかりだったな……。

水蓮然り、雪蓮然り……。

元気があるというか、落ち着きがないというか、なんというか。  
そんなことを考えていると……。

「う〜」

小蓮が不機嫌そうに顔を歪めて、こつちを見えています。

どうやら俺が構わなかったのが気に入らなかったみたいです。

とりあえず、小蓮の前で尻尾をゆらゆらと横に揺らしてみます。

これで可愛いあの子の視線を釘付け大作戦。

今まで成功率80%を超える、この作戦によって小蓮は俺の尻尾に  
夢中になったようだ。

目が楽しそうに尻尾を追っている。

はあ〜、とりあえずこれで機嫌は戻ったかな。

でもしんどいぞ、これ……。

くそ、おのれ……水蓮め〜。

俺は水蓮に呪詛を送りながら、もう一度小蓮を見た。  
小蓮はきゃっ、きゃっとうれしそうに俺の尻尾に向かって手を伸ばしている。

……。

ま、今日一日くらいなら頑張るか。  
たまにはこういうのもいいかもしれなしな……。

それから俺は子守りに全力を挙げて挑むのであった。

全力で赤ちゃんをあやす猫。

その、見た目は大変にシユールではあるが微笑ましい光景を、こっ  
そりと扉を開けて覗いている侍女たちが多くいたとかいないとか…  
…。

～SIDE雪蓮～

「むー」

私の隣で蓮華がむくれている。

理由は簡単、蓮だ。

というか、蓮華の機嫌が悪くなる時の大半の理由は、実は蓮のことだったりする。

「もう、蓮華？ そんなにむくれてもしょうがないでしょ？」

「うー、だって……」

「仕方がないじゃない。シャオはまだ小さいんだから」

蓮華に促すように言ってみるが、効果はいまひとつみたい。  
いつも聞き分けのいい蓮華も蓮のことになると駄々をこねる。

実は今日、蓮華が蓮といっしょに寝る予定だった……。

だけと思いのほかシャオが蓮に懐いてしまったのよね。

離れると泣き出してしまいうくらいには。

これは仕方がないってことで、蓮が今日はシャオの所で寝ることに  
なったのだけど……。

「きょうは、わたしだったのに……」

その結果、私のもう一人の妹がへそを曲げてしまったみたい。今も頬を膨らませている蓮華を見て、思わず苦笑してしまう。

そういえば蓮華がもっと小さいときに私も同じようにむくれてたわね……。

別に蓮華のことが嫌いだったわけではなかったんだけど、なんか蓮華を取られたみたいですごく嫌だったな。

たぶん、今の蓮華もそうなんでしょうね。

蓮は、私と蓮華にとって家族であり、初めての友達でもあるわけだし……。

それに蓮と一緒にだとなぜかよく眠れる。

理由はよくわからないけど、なんかすごく安心できるのよね。陽だまりみたいに暖かいし……。

さてと、考えていても仕方がないわね……。

この状況を解決するのは実は簡単なの。

蓮がこっちに来れないのなら、こっちから行けばいいじゃない！  
そうすれば私も一緒に寝れるし……。

「なら、蓮華……。今日は私と蓮華とシャオ、そして蓮のみんなで寝ましよう？」

「えっ？ みんなで……？」

「そうよ。それなら問題はないでしょ？」

「はい、ねえさま！ わたし、みんなでいつしよにねたいです！」

私の提案に手を挙げて賛成する蓮華。

その顔はさつきまでのむくれたものではなく、弾けんばかりの笑顔である。

私はそんな蓮華の手をひいて、蓮とシャオのいる母様の部屋に向かうのだった。

その日、夜。

夜遅くにやっと政務を終えた水蓮が部屋に戻ってみると……。

一匹の猫を中心に仲良く眠っている三姉妹の姿があった。

始めはそれを微笑ましく見ていた水蓮だったが、完全に寝るスペースの埋まっている寝台を見て気がついた。

「あれ？ 私は何処で寝ればいいのかしら？」

そう漏らし、孫呉の王は静かに絶望した。

## 第五話。 陽だまりの中で（後書き）

第五話。 終了です！

どうだったでしょうか？

うーん。 もっとシャオを出したかったけど、まだしゃべれなかったという罫。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

## 第六話　　プライスレス

お金では買えないものがある。

友達もそうだし、家族もそう。

時間もそうだし、自分たちの感情だってそうだ。

お金では買えないものがたくさんこの世の中にはある。

今、世は乱れている。

国では賄賂が横行し、金があるものが高い地位を得るそんな時代。

だけど、忘れてはいけない。

家族や友達と過ごす時間というのは…その暖かい日々は……決して百万の富に劣るものではないということを。

あつ、でも買えるものは……頑張って貯めましようね……！

「れん、はやくおきて！」

俺はそんな声と身体を揺さぶられる感覚に目を覚ます。

寝起きの焦点が定まらない目で、俺に声をかけている女の子……蓮華を見つめた。

「あつ、やつとおきた」

そう言つてうれしそうな顔を見せる蓮華。

あれ？ 寝過したのかな……？

そう思つて外を見てみるとまだまだ真つ暗である。

……。

つまり、これはあれだ……。

運動会とか遠足の前に早く起きすぎちゃったという奴だよね。

俺も昔にやったなーと思いつつ、なんで俺を起こしたし、と蓮華を見る。

しかし、返つてきたのは……。

「へへへ。れん、きょうはたのしみだね？」

蓮華の弾けんばかりの笑顔だった。

これだと怒るに怒れない。

それにして朝からすごく笑顔の蓮華。

相当、今日を楽しみにしていたみたいだ……。

うん、負けたよ……。

しょうがない。もう起きようじゃないか……。

自然と出てくる欠伸を噛み殺しながら俺はうんと身体を伸ばす。

さて、それじゃあ時間までお姫様のお相手でもしますかね。

あゝ、蓮より本部へ。

本日は晴天なり、くり返す本日は晴天なり。オーバー！

青い空、白い雲。

今日は絶好のピクニック日和となりましたー。

そう。今日私たちはみんなピクニックに来たのです！

建業の街から少ししたところにある森。

その奥にちよつとだけ進んだところにはとてもきれいな川辺があります。

実は以前、雪蓮に連れて来られた探索で見つけた所だったりします。

「うゝん！ いい所ね。空気もおいしいわ」

「うむ。たまには外でやるのも粋なもんじゃ」

「もう、祭は……。私の分もある？」

「もちろん用意してあるわい。ほれ、堅殿」

「ふふふ。ありがとう」

なんということでしょう。

年長者の二人が着いて早々酒盛りを始めているではありませんか。  
いーな。はっ!?

べ、別に羨ましいだなんて思っていないんだからねっ!

と、とりあえず俺は二人…特に水蓮に抗議の声を上げてみることに  
……。

「にゃー」

おい、その二人……。

いきなり酒盛りはどうよ、どうよ、どうなのよおう!

「いいじゃない、たまには息抜きも必要よ?」

「そうじゃぞ。堅いことをいうな」

まあ、間違っではないんだけどさ……。

今日は家族サービスの日だったのではないのかい?

「それは大丈夫よ。だってほら……」

そう言うとき水蓮はある方向を指差した。

俺がそちらの方を向くと……。

「蓮ー! 早くこっちに来なさいー!」

「れんー。あそぼー!」

「みんなが待ってるのは蓮だし……ね？」

こっちに向かって手を振り、俺を呼んでる雪蓮と蓮華。  
声こそ出していないもののこっちの方を見ている冥琳。  
みなさん、お待ちかねようだ……。

「ほら、行つてきなさい。我が家のお猫様？」

了解ですよ……。

じゃあ俺は行くけど、小蓮もいるんだからあんまり羽目はずさないよーに！

「りょーかい」

笑いながらそう言うてくる水蓮に少し不安を感じながら俺はお姫様たちの所に向かっつうのだった。

「蓮！ 今よ！」

「にゃ、にゃ！」

雪蓮の合図に合わせて、我が必殺の爪を一閃。

すると、あら不思議。

お魚さんが宙を舞っているではありませんか。  
これぞ飼い猫108の技のひとつ、魚獲りである。

「うむ。一度に二匹とは……。雪蓮に聞いたことがあるとはいえ、実際にこの目で見てみるとすごいな……」

「れん、すごい！」

俺の華麗な技を見た二人が感嘆の声を上げる。  
蓮華にいたっては目がキラキラと輝いているようだ。

ふふふ。どうだ！ 俺、すごくない？

とはいったものの、実はこの技は俺だけでは出来なかったりする。  
うまく呼吸のあった相方が必要なのだ。

「やったわね、蓮」

雪蓮が俺に声をかけてくる。

そして、俺の顔の前に掌を向けてきた。

ふむ。なるほど……。

ではいつせーの！

「「イエ イ（にゃーん）！」」

こうして俺と雪蓮はハイタッチもどきをするのであった。

その後は獲った魚を食べたり、飛んでいるセミを追いかけたり……。水を掛け合ったり、追いかっこをしたりと楽しく遊んだ。それはいい、それはいいんだけどさ……。

ただ、ひとこと言わせてもらえるなら、俺を川に投げ込んだその酔っ払い二人！

世が世ならそれ、虐待になるからな！

そう、何を思ったのか。

あの酔っ払いどもは蓮華たちが遊んでいるのを眺めていた俺を川へと放り投げたのだ。なんでも……。

「いや」。蓮も参加したいのかなーって思ったし。それに……」

「その方がおもしろゲフンゲフン。もといい肴になるかなと思ったからじゃ」

だめだ。

こいつら早くなんとかしないと……。

そう思っていた俺に救いの神が現れました。

そつ、未来のメガネ軍師様こと冥琳ちゃんです。

俺は蓮華にタオルで身体を拭いてもらいながら、冥琳に怒られている年長者達を見る。

正座をさせられ、まだ10にもならない子に怒られているその姿は、

とても孫呉の王とその忠臣には見えなかった。

そんな二人の姿を見ていて、なんか悲しいけど……これも現実なのよね……。とは雪蓮の言葉だ。

ただ雪蓮や……。

たぶん近い未来……お前もあっち側にいる気がするぞ？  
俺はこっさりそう思った。

## 第六話 プライスレス（後書き）

第六話。終了です！

さて、どうだったでしょうか？

休日って感じが出せてたなら幸いです。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では。

## 第七話。 満月の夜に（前書き）

時系列的にはぶろろーぐと同じ日となっております。

## 第七話。 満月の夜に

＼SIDE雪蓮＼

古人、曰く。

古くから孫家には守り神がいる。

いつも見せる姿は仮のもの、満月の夜だけにその本当の姿を表す。しかし、その姿を見れるのは孫家の者で成人を迎えた者に限る。それ以外の者が見たならば、即、天罰が下るであろう。

「成人、か。まだまだ先よね」

私ははあゝと深くため息をつく。

孫家の守り神。

そう呼ばれているものがある。

孫家では知らない者はいないほど有名な話で、にわかには信じられない話。

だって……。

「あの蓮がね。どう見ても猫だし……」

確かに普通のとは言い難いかもしれない。

私たちの言葉を理解しているみたいだし、言うこともちゃんと聞く。冥琳に将棋で勝つほど頭がいいし、子守りもする。

色は純白と言ってもいいほど真っ白だし、その瞳も真紅とっていいほど真っ赤だ。

尻尾もすらりと長くて……。毛並みもすごくいい。

寝ている姿はかわいいし、私がものを投げると取って来るし、お手もする。

猫パンチもするし……あれ、なんかかわいいのよね。見ててなんか和むし。

抱きしめると暖かいし、モフモフしてて気持ちいいし……って違う違う。今はそうじゃなくて……確かに蓮はすごくかわいいけど、やっぱり猫以外には見えないのよね。

とてもじゃないけど……守り神には見えない。

そう、確かに見えないんだけど……。

「……それだけじゃないって私の勘が言ってる」

そもそもなんで守り神って言われてるのかって言うと、昔にあった大きな戦いで孫家の主を守ったことから始まったらしい。その後、ついに行った戦場で負けたことがないとか。

猫が戦場に行くって何って聞いたときは思ったんだけど、実際に蓮も昔は母様について行くとときもあったらしいし……。

「あゝもうっ！ 考えるのは冥琳の仕事なのに……」

でも、このことでは冥琳には相談できない。調べようとするだけでも天罰が下るかも知れないし……。

母様に聞いても蓮が守り神様って言っただけだろう……。

うゝん、八方塞りね。

「今日は満月の日……」

私は暗くなつた空に浮かぶ月を窓から眺めながらそう呟いた。

うん。考えても仕方がないし、やっぱりここは行動あるのみよね!!

昼間に蓮華も蓮の本当の姿を見たくない? って聞いたら。

「ねえさま、わたしもみてみたいです!」

って目を輝かせて言つてたし、約束通り二人でこっそり見に行こう。

今日は蓮と蓮華と三人で一緒にお昼寝もしたし、準備はバッチリ! さあ、蓮華と合流して蓮の姿を拝みにいくわよ!

〈SIDE 蓮〉

俺は今の孫呉の王であり、別名江東の虎とも呼ばれている孫堅こと…… 水蓮の部屋に二人でいた。

小蓮は別の部屋で侍女が見ているらしい。

約束の刻まであと少し。

そう、もう少しで俺は……。

「蓮、まだなの？ 私は早くこの酒を飲みたいんだけど……」

「にゃっ」

もうちょっと待て、と酒に伸びた水蓮の手をねこパンチする。

俺が百年くらい前から寝かせておいた特級品だ。

水蓮の気持ちかわからないでもないが、それは認めん。

そう、もう少しで俺はうまい酒が飲める。

猫の姿だと舐めることは出来るんだけど……どうしても飲んだ感じがしないんだよね。

あと、舌も猫と同じで熱いものがダメで、お魚が飛び抜けておいしく感じるんだよね。

前は肉派だったのに……。

「ううう。蓮、まだ？」

ずっとお預けを食らって、いい加減に水蓮の我慢が限界に近くなってきたその時。

「にゃっ！」

俺の身体が発光し出した。

……どうやら約束の刻みたいだ。

御苦労さま、佐伯先生……。

眩い光が部屋を包んで、一瞬、視界が何も見えなくなる。  
そして……。

「ふう……。限定解除、完了」

「久しぶり、蓮。ふた月振りかしら」

「ははは、一応毎日会ってるけど……久しぶり、水蓮」

こうして俺はひと月振りに人間の身体に戻った。

けど、これも夜が明けるまでの間だけ……。

その間だけ、俺はこの姿に戻る。

もう四百年くらい前から続いていることだ、慣れたと言えば慣れたな。  
戻るだけでも……幸運、なんだし。

「乾杯！」

俺たちは、二人で酒を飲む。

ふた月振りの酒はすごく良かった。

先月は蓮華に捕まって逃げられなかったし……。

俺たちは飲みながら……昔のこと、最近のこと、家の姫様たちのこ  
と。

たくさんのことを話した。

日頃、話が出来ないから人と会話するのがとても楽しい。

水蓮も笑っているから、別にいいんだけど……。できるならもつとたくさんの人と話がしたいな。そう思った俺は水蓮に聞いてみることにした。

「それにしても……俺と二人だけで飲んでて楽しいのか？」

「ええ、楽しいわよ……。蓮は古今東西、色々な話を知ってるし、すごく面白いもの」

まあ、長生きしているしな。

話はたくさん知ってるさ。けど、だからって……。

「それにしてもあんな嘘の話まで作るのはなかったんじゃないか……？」

そう。

成人まで俺に会うことが出来ないというのは真っ赤な嘘なのである。あと、孫家の者以外がダメということも……。

「ふふん。私も子供の時はやられたんだし。これも家の伝統ですよ」

そう言つて、水蓮は笑う。

どうやら、すごく上機嫌のようだ。

「そうかい。さて、あいつらは何歳で俺と会えることやら……」

「私は１１歳の時だったし……あと何年かはかかるんじゃない？」

そういえば水蓮がはじめて俺と会った時は笑ったな……。大きく口を開けてポカーンって顔してたし……。それ見て大笑いして、嘘のことばらしたらなんかすごく怒られたな！。

もっと早く教えてよ、とか何とか。

って、嘘ってばらしたらまた怒られるのかな、俺。

しかも雪蓮達はたぶん……。

「……いや。たぶん、あいつらはもっと早いような気がするぞ」

「へえー。ならその時はみんなで宴でもしようかしら」

孫家の者はなんか俺と会話して初めて一人前になるんだとか、昔に誰か言ってたしな……。

うん、宴はするべきだろうな。

「ああ、そうしよう。その方が楽しいそうだ」

「なーに？　今だってこんな美人と二人っきりで飲めて、男としてはうれしいでしょ？」

そう言って、水蓮は俺に酌をしてくれる。

それを飲み干し、今度は俺が水蓮に酌をする。

「まーね。うれしいっちゃ、うれしいんだけど……俺、お前がおねしよしてた頃から知ってるからな」

「ぶうつ！ ゲホゲホッ！ も、もう変なこと言い出さないでよ…」

「ははは。わりい、わりい」

そんな風に楽しく？ 会話をしていると夜はどんどん更けていった。

まだ小さな小蓮もいるので日付が変わる前にはお開きとなった。  
それから俺は夜が明けるまで、お気に入りの場所で月を眺めることにする。

「月見酒つてのもたまにはいいかな……」  
そう言つて、ゆっくり酒を楽しむ。

月がすごく綺麗だ……。  
まん丸で、大きくて、だけどその光はとても優しくて……。  
周りの星たちもキラキラと輝いている。それがいいアクセントになつていて、まるで一枚の絵画のようだ。

この世界に来てから上を見上げるということを覚えた。  
あっちじゃ、下を見下ろすことはあっても上を見上げることもなんて  
ほとんどなかったしな。

そんなことを考えていると……こちらに近づいてくる気配を感じた。

どうやら今日のメインは今から始まるみたいだな……。

こちらに走ってきていた気配……雪蓮は俺の後ろにやってきた。  
そして、口を開く。

「貴方が蓮、なの？」

その声を聞いて後ろを振り返ると。  
信じていないような……けど、どこか確信しているような……そんな  
半信半疑の表情があつた。  
だから……俺は……。

「ああ。こんばんわ、雪蓮……」

まず、あいさつから始めることにした。



## 第七話 満月の夜に（後書き）

第七話。終了です！

どうだったでしょうか？

蓮、人間に戻る。というお話でした…。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

第八話。これが我が家のお猫様！（前書き）

前回の続きです！

## 第八話　これが我が家のお猫様！

＼SIDE雪蓮＼

蓮の本当の姿を見るために蓮華と蓮を探していたけど、なかなか見つからなかった。

今は蓮華が眠ってしまったので部屋に届けた後、一人で探しているけど、見当たらない……。

「どこにいるのかしら……」

そう呟いていると、今日蓮がいた場所を思い出した。

街が一望できるあそこならいるかもしれない……！

そう思い、向かった先で私は目撃した……。

月を見上げている一人の人を……。

「貴方が蓮、なの？」

私はどこか恐る恐る聞いてみる。

まだ確証はない。だけど……私の勘がいつている、この人が蓮なんだって……。

「ああ。こんばんわ、雪蓮……」

私の方に顔を向けて、そう言ってくるのはたぶん男の人。  
すごく中性的な顔立ち。

腰に届くかと思うほど長い髪の色は、蓮の毛と同じ真っ白で、目の色も蓮と同じ真っ赤だった。

この一見、女の人にも見えるこの男の人があの猫の蓮の本当の姿……。

「本当に蓮、なのよね？」

「まあね、昼にヒゲを抜かれた孫家の飼い猫こと、みんな大好き蓮ちゃんですよっ」と

その人はそう言って、優しく笑う。  
その笑顔が、いつも見ている蓮の顔とダブって見えた。  
私はそれをただ、じっと見つめる。

「……………」

「あれ？ 信じてない感じ…………？」

うー、困ったなーと呟く男の人。  
でも全然困っていないのは一目瞭然だった。  
だって目が笑ってるし…………。

「それにしても、まさかこんなに早く会うとは思わなかったよ…………」

「えっ…………？」

「あの水蓮でももう少し掛かったのにさ」

「そ、そうなんだ……」

「うん。優秀、優秀。そういうわけで……」

そう言うのと、男の人……ううん、蓮は私に新しい杯を渡してきた。それを私が受け取ると、持っていたお酒をトクトクと注いでいく。

えーと??

私の頭の上に疑問符が浮かぶ。

お酒はまだあんまり好きじゃないんだけど……。

「まずは、乾杯しようか」

そう言っただけ蓮は杯をこっちに向けた。それに合わせて私も杯を持ち上げる。

「何に乾杯するの?」

「この月の下で俺と雪蓮が会えたことに……」

笑いながらそう言う蓮はとてもうれしそうで……。

月の光と合わさったその顔はとても綺麗だった。

少しの間それに見惚れてしまったけど、不思議そうに首を傾げた蓮を見て、私は慌てて頷いた。

「う、うん」

「それじゃあ……」

「乾杯！」

私と蓮は同時にお酒を飲む。

以前、飲んだ時は変な味であんまり好きではなかったけど……。  
この時飲んだお酒はなんでかすごくおいしかった。

だからこの後、私がお酒好きになってしまったのは仕方がないこと

……。

そう、全部蓮が悪いの……！

それから蓮に色々なことを聞いた。

もう実は四百年くらい生きているということ。（けど、不死つてわけではないらしい）

この姿に戻るのには満月の夜だけで、さっきまで母様と晩酌をしていたということ。

『天』と呼ばれる国からこの国にやってきたこと。

この国に来てすぐに私たちのご先祖様に拾われて、それからずっと一緒にいること。

一度だけご先祖様を助けたら、いつの間にか守り神なんて呼ばれる

ようになったこと。

本当に色んなことを聞かせてくれた。

蓮は話上手で、どんな話もとてもおもしろかった。

信じられないような話もたくさんあったけど、なぜか蓮が嘘をついていないとわかった。

話している時の目が嘘じゃないって、そう言っていたから……。

～SIDE蓮～

雪蓮と酒を飲みながら、色んなことを話して聞かせた。

昔のこと……。天のこと……。俺の知っている昔話。

その話の一つ一つを目を輝かせながら聞いている雪蓮を見て、まだまだ子供だなんて思った。

ただ、天から堕とされたことと力を封印されたことは話さなかった。別に暗くなるような話は、ね？

けどやっぱり孫家の子だな……。

これ結構、度数の高い酒なんだけど、うまそうに飲んでるし……。  
うんうん、本当に将来が楽しみだ。

楽しい時間というのは早く過ぎるもので、だんだんと空が白んできた。

この楽しい時間もおしまい、かな……。

さてと、それじゃあ最後に一言だけ言っておこうかな。  
俺は同じように空を見上げていた雪蓮に声をかける。

「雪蓮……」

「んー？ なに？」

「きつと……雪蓮もいつかは王になる……」

「うん」

それはたぶん決定事項だ。

雪蓮にも王となるに十分なものを持っている。

水蓮のあとはこのまま雪蓮が継ぐことになるだろう。

後はそれが遅いか早いかの違いでしかない……。

「王は臣下達とこの地に住んでいる民たちを導いてやらないといけない」

「うん、そうね」

王は常に先頭に立つ、云わば道標だ。  
前を切り開き、後ろの者たちを率いていく。  
そう言うものだって俺は考えている。

雪蓮も王の役割が分かっているのだろう。  
俺の言葉に大きく頷いていた。

「だけど王は孤独だ……。たとえば、どんなに仲の良い信頼できる臣下にも言えないことが出て来てしまう……」

王ほど、悲しい仕事はないような気がする。  
常に私ではなく公として動かないといけないし……。  
やりたいこともできない……。  
言いたいことも言えない……。  
きつと……。そんなこともたくさんできる……。

「うん……」

その時のことを考えたのか……。  
少し顔が暗くなる雪蓮。

だから、さ……。

「だからそんな時は……。俺に話せばいい。俺はずっと傍にいて、愚痴くらいならいくらでも聞いてやるから」  
そう言っただけはポン、と雪蓮の頭に手を乗せる。

孫家と共にあること。

それが昔の当主との約束。  
守り神としての俺の役目。

そして、今の俺ができるたった一つのことである。

「聞く、だけなの……？」

少し、不満そうに雪蓮がそう言ってくる。  
力を貸してはくれないのかと、目がそう言っている。

「聞くだけだよ」

「なんで……？」

「だって俺、ねこだもん」

それ以上を求められても困りまーす。  
少し上目遣いで膨れている雪蓮にそう言っただけは笑う。  
それにつられて雪蓮も笑った。

夜が明け、太陽が出てこようとしている。  
それと同時に俺の身体もゆっくりと光り出す。

「れ、蓮!？」

雪蓮は光り出す俺に慌てて声をかけてくる。  
なんかすごく必死だ。

「ははは。もう時間切れ、だな」

「そっか……」

寂しそうな顔になる雪蓮……。  
まったくそんな顔、すんなよ。

仕方がないので雪蓮の頭を撫でてやる。  
いつもは撫でられているのに今はまったく逆の立場だ。

「雪蓮、またね」

「うん……また」

最後にそう言葉を交わすと俺はねこに戻った。

むう……。

視線がやっぱりすごく低い……。

「本当に蓮だったんだ」

「にゃーん」

俺の方をマジマジと見る雪蓮に返事を返す。

つて、信じてなかったんかい！

心のなかで突っ込みを入れつつ、俺は欠伸をする。  
すると俺のが移ったのか雪蓮も欠伸をした。

「……寝よつか」

「にゃーん」

俺は返事を返して、雪蓮とは反対の方向へと向かう。

まあ正体を明かしたわけだしな。

まだ子供だって言っても一緒に寝るのはもう嫌だろう……。

そう俺は思ったわけだったんだが……。

「蓮？ どこに行くの？」

そう言って俺を捕まえる雪蓮さん。

いや、ほら。

一緒に寝るのはあれかなーって思ったんだけど……。

「私は別に気にしないわよ。だって人間でも猫でも蓮は蓮でしょ？」

そう言ってもらえるのはうれしいんだけど……。  
……本音は？

「正直、猫の印象が強すぎてそれ以外に見えない。人間が猫になつたっていうより猫が人間の形に化けたって感じがするのよね」

というわけで、一緒に寝ましょ？

そう言いながら雪蓮に連れていかれる俺。

どうやら俺は結局、飼い猫の蓮君のままのようです……。

それは別にいいんだけど、なんか人の尊厳を奪われたような……。

ま、いいのかな……？

そんな風に思いながら、俺と雪蓮との初対面は幕を閉じるのだった。

その後。

お昼になって起き出すと、すごくむくれている蓮華がいた。  
なんでもねえさまだけずるい、とのこと。

そのご機嫌取りが大変だったことはいうまでもない。

## 第八話　これが我が家のお猫様！（後書き）

第七話。終了です！

どうだったでしょうか？

結局は猫扱いをされる蓮なのでした。

お気に入りが入りが400件、総合評価が1000ptを超えていました。  
みなさん、ホントにありがとうございます！

これからもがんばっていくので応援してくれるとうれしいです！  
では。

## 第九話 宝探しにレッツ&ゴー！

皆さんはご存知ですか？

建業のどこかに、こゝんなどでかいお城がある事を。

お家の名前は『孫家』。そして、そのねこ君の名前は『蓮』。

ねこにはちょっぴり秘密があつて、ちょっぴりと言っていないこともあつたりしてゝ。

でもとてもとてもかたゝい家族の愛で結ばれているのですゝ。

ども、毎度おなじみ、飼猫の蓮です。

前回、人間だつて教えたのに全然扱いが変わらないことについて。次の時に蓮華にも教えたんだけど……。

「すごいね、れんはにんげんにもなれるんだゝ」

そう言つて目を輝かせるだけでした。

……うん。

やっぱり俺はあくまでも猫らしい。

ちょっとへこんだので、水蓮に話したら大爆笑してた。

悔しかったので酒を取り上げたら、速攻で謝ってきたからまあ許した。

それにしても、雪蓮も蓮華ももう少しくらいリアクションしてくれ  
たっていいと思うんだよ。

別に嫌われるよりはいいんだけどさ……。

そんなことを少し黄昏ながら、考えていると……。

「蓮！ 宝探しに行くわよ！！」

俺の所にやってきた雪蓮がいきなりそう言ってきたのだった。

急遽、決まった宝探し。

構成パーティーは以下ようになった。

勇者：雪蓮

賢者：冥琳

魔物使い：蓮華

魔物：蓮

うん。

なんかすごく文句を言いたいところがあるんだけど……。  
いいかな？ ねえ、いいかな？

「よし、これなら完璧ね！」

「ああ、最高の編成だ。どこにも隙がない」

いや、あるよね。

突っ込む隙が、わりと普通に、とても大きな……。

「れん、がんばろうね!」

はあ。

もう魔物でいいですよ……。

それにしてもなんで宝探しなんぞを？

俺がそう思って首を傾げると雪蓮が説明してくれた。

「書庫でこれを見つけたの」

そう言っつて雪蓮が見せてきたものは一枚の地図だった。

良く見てみると、どうやらこの周囲のものみだ。

その中で一カ所だけ目印の付いている場所がある。

何かがある場所を示しているのかな……？

「これはきつと宝の地図よ！　ここに何か隠されているような気がするの!」

「また、勘か？」

「ええ、そうよ」

雪蓮は冥琳の問いにそう笑顔で返す。

雪蓮の勘がいつているのなら、たぶん何かあるんだろっけど……。

ただ、どーも昔に見たことがあるような気がする……。

それに加えて、嫌な予感もひしひしと……。

「それじゃあ、行くわよー！」

「しゅっぱつー！」

そんな不安を感じながら俺たちの冒険は始まったのだった。

「れん！ みぎー！」

「にゃん！」

了解です！  
マイマスター！。

俺はこっちに飛び掛かってきた野犬にストライクレザークローを食らわせる。

まあ、ただのひっかき攻撃ではあるんだけど……。

野犬は予想外の反撃に怯んだみたいだ。  
そして、その隙を見逃す雪蓮ではない。

間髪いれずに野犬に攻撃を加えた。

その結果、簡単に吹き飛ばされる野犬。

てか、鍛錬をしているとは聞いてたけど、雪蓮がマジで強いんですけど……。

もしかしたらもう一般兵より強いんじゃないか……？

俺がそんなことを考えている間に、勝てないと見たのか野犬たちは逃げ出していた……。

ふう〜。

戦闘終了なり〜。

俺たちの探険はなかなかスリルのあるものとなっている。

今みたいに野犬に囲まれたり、ハチの巣から大群が攻めてきたり、熊の親子と遭遇したので音をたてないように静かに逃げたり、巣から落ちてきた雛鳥を巣に戻してあげたり……。

うん。

普通に本でも出せるくらいの大冒険をした気がするぞ。

少しは蓮華が怖がるかなーとも思ってたけど……。  
どうやらこの子も間違いなく孫家の子のようで、終始楽しんでいる様子。

今もニコニコ顔だ。

雪蓮は言わずもがなで。

鼻歌を歌いながら、先頭を歩いている。

となると、一番大変なのは冥琳だ。

何度も雪蓮が飛び出そうとするのを必死に押さえてるし……。  
顔を見れば、若干お疲れのご様子。

「にゃ〜？」

心配になったので、とりあえず声をかけておく。  
すると、冥琳は俺を見てすぐに抱きかかえる。

「ありがとう。蓮だけが私の癒しだよ……」

そしてモフモフしながら俺にそう言ってきた。

なんというか、まあ……。

がんばれ、冥琳。

名軍師と言われるその日まで……。

朝に出発したが、今はもうお昼だ。

雪蓮の武勇、冥琳の知略に俺と蓮華の連携。

これらがいい感じ融合した俺たちは、結構いいパーティーだったよ  
うで割かしサクサクと、先に進んで行けた。

これなら、もうすぐに目的地に到着するだろうな。

俺は昼食を食べながらそう思っていた。

「うーん。このあたりのはずよね……」

「ああ。地図に書いてあるのはこのあたりだな」

森の奥にある少し開けた場所で止まると、雪蓮と冥琳がそう言い出した。

確かに地図を眺めてみると、この辺りを指しているように見える。

地図を見ながら、みんなで少し考え込んでいると……。

「あっ！ どうくつ！」

そう言つて、蓮華が指を差した方向には少し小さめの洞窟があつた。どうやら、うまく木の枝で入口が隠れていて見えなかったようだ。

「お手柄よ、蓮華！」

「良く見つけましたね、蓮華様。お手柄です」

「えへへ」

蓮華を笑顔で褒める二人。

一方の蓮華も褒められてうれしそうだ……。

ただ俺だけは、少しだけ考え事をしていた。

うん。

この洞窟って見覚えがあるぞ……。

うん、絶対にあるはず……。

ここは確か……。

「よし、じゃあ中に入るわよ」

「おー！」

「そうだな。本当に何か隠されているのかもしれない」

そんな間にも三人は洞窟の奥へと進んで行く。  
その顔を見れば、みんなどんな宝があるのかを楽しみにしているようだ。

俺も昔の記憶を思い出しながらそれに続いた。

……。

……。

あつ……。

思い出した……。

思い出したぞっ！

つてことは宝物って……。

あれ、だよな……。

ここにある宝物の見当がついた俺は顔を引き攣らせる。

洞窟の一番奥には小さな木でできた箱があった。  
そしてその中には……。

「ん。何かの本かしら」

「みたい、だな。題名は……」

「れんとわたし……？」

「作者は……」

「孫 文台……」

やっぱり水蓮の黒歴史日記だったー！！

あの所々によくわからないポエムとかが書いてある奴……。しかも日記の中身はほとんど嘘な、妄想日記だし……。今になってみれば、大層黒歴史な代物だろう。

そう言えば確か……。捨てるのは嫌だとか言ってここに隠しに来たんだったな。無理矢理、連れて来られた覚えもあるし……。

てか、あれを娘たちに見られるとか……。

ご愁傷様、水蓮……。

割とマジで同情するわ。

そうこうしている間に中を覗いていた三人が、ぱたんと日記帳を閉じた。

中を覗いていた三人は何やら非常に微妙な表情をしている。

「こ、これは持って帰れないわね……」

「あ、ああ。ここに置いていた方がいいだろう」

「かあさま……」

早速、封印指定が掛かった日記帳。

うん、その選択はただし。

俺たちは何も見ていない……。

それがみんなで幸せになれる唯一の方法だ……！

こうして俺たちの冒険は幕を下ろした。

最後に、変な空気になったけど……。

気にしたら負けだね！！

後日、娘たちから何やらすごく生温かい目で視線を送られている江東の虎がいたとかいないとか……。



第九話 宝探しにレッツ&ゴー！（後書き）

第九話。終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています〜！  
では。

## 第十話　ねこ、攫われる

この物語はスーパーハンサムネコ、蓮と彼を取り巻く美女達の愛と肉欲とポロリが満載の小説である。　注：嘘です。

姉さん、事件です！　SOSです！

どうも只今、誘拐されている真つ最中のねこ、蓮君です。

なぜかはわかりませんが、人攫いに攫われているみたいです。

押し込められた馬車のなかには、俺の他に数人の子供たちもいます。

はあ、姉さん……。

どうやら面倒事のようです……。

話は今日の夜にまで遡る。

あの満月の夜の雪蓮との対面から時は流れ、早五年。

水蓮の黒歴史の発見からも早五年。

あれからは毎回、孫家のお姫様たちと過ごすことになった。  
まー、正確には水蓮と一緒にの所にみんなで乗り込んで来るんだけどね。

俺の知ってる面白い話を聞かせてやったり、一緒に月を眺めたり、  
なぜか武術の稽古をつけてやったり。  
毎回、楽しくやらせてもらってる。

昨日の夜もそんな感じで過ごし、蓮華と小蓮を寝かしつけた後に水蓮、雪蓮と酒を飲んでいた。  
結局夜明けまで飲んでいて、蓮華に見つかり水蓮、雪蓮共々怒られたのもいつものことだ……。

説教が終わり、ねこに戻るとすぐ睡魔が襲ってきた……。  
このまま城内で寝てると怒られるかな と思った俺は城を抜け出したわけんだけど……。

なんか五、六人のおっさんズ…所謂、賊のみなさまにあつという間に攫われちゃいました。  
そして冒頭に戻る、というわけである。

うーん。どうしようかな。  
一人で逃げられるわけもないし……。

.....。

ふあゝ。

.....ねむ。

とりあえずは寝よつかな.....。

いずれ水蓮たちが助けに来るだろうし。

まあ、なんとかなるでしょ。

助けが来るまで寝てようかとを考えていた俺だったが.....。  
ふと、一番奥で泣いている女の子が目についた。

蓮華くらいの年齢だろうか.....。

小柄で真っ黒な髪の子だった。

どうやら他にいる子供たちよりもっと怖がっているみたいだ。  
今も身体を震わしながら、泣いている。

女の子が泣いているのはあんまり見ていたくないものじゃないしな.....。  
そう考えた俺は女の子の方と向かって行くのだった。

〈SIDE 蓮華〉

「蓮ー？」

「れーんー？」

私は今、シャオと一緒にたつて家の飼猫の蓮を探している。

探しているのだが…おかしい。

いつもなら、もう私たちの声を聞いてすぐにやってくるはずなのに……今日は一向に姿を現さない。

私はそれを不思議に感じながらも蓮を探す。

しかし、なかなか蓮は見つからない。

街の方に行っているにしても昼には一度帰って来るはずだし……。

「れん、いないねー」

「うーん。おかしいわね」

私はシャオと一緒に考え込む。

本当におかしいわ。

今までこんなこと一度もなかったのに……。

私がそんなことを考えていると、別の所を探していた姉様がこつちにやってきた。

「蓮は見つかった？」

「あつ、姉様……。いえ、どこにもいません」

「れん、よんでもでてこないのー！」

「そう、私も見つけれなかったわ……」

どうやら姉様も見つけられなかったらしい。  
姉様はそのまま考え込むと顔を少し顰めた。

「しえれんねーさま？」

「どうかしたのですか？」

「ううん。ただちよつといやな予感が、ね……」

姉様がそう言うと、何人かの兵士を連れた母様が歩いてきた。  
けど、いつもとどこか様子が違う。

そう、あれはまるで戦場に向かう時みたいだ。

「母様、どうかしたの？」

母様の様子を見て、不思議に思ったのか。  
姉様がそう問いかける。

そして、私たちは驚きの事実を聞かされた……。

「……蓮が攫われたわ」

〈SIDE 蓮〉

「モフモフです」

「にゃ、にゃー」

あ……ありのまま今、起こった事を話すぜ！

『俺が女の子を慰めようと思ったたら何時の間にかおもちゃにされた』

な、何を言ってるのかわからねーと思うが、おれも何をされたのかわからなかった……。

催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ……。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

「次はおれ」

「私もさわりたい！」

そして次々と俺の周りに寄って来る子供たち。

おいおい、お前ら。

俺らって一応、誘拐されたんだぜ？

ちよっとは緊張感持とーよ。

ま、でも泣いてるよりは全然いいのかな……？

仕方ない、付き合ってやるか。

ほら、好きにし……

「モフモフモフモフモフ。ん、気持ちいいです。最高です」

「うわー、気持ちいい」

「ほれほれほれ」

つてお前ら、少しは加減つてものしろ！

いや、してください！　お願いしますからー！

特に黒髪の女の子！　お前、さっきまで泣いてただろうが！  
切り替え早すぎだからね！

そんなに適当に触られると……。

「にゃあ……」

ほら毛が逆立った……。

はあ、また毛繕いしなくちゃ……。

こうして俺は全身を触られまくった……。

ううう。もう好きにして……。

そんな風に馬車の中で流れていた緩やかな空気は、馬車が止まり、  
二人の男が入って来たことで終わりを迎えた。

男たちはかなり慌てているようだ。

何か予想外のことも起こったのか……。

「あいつら……こんなに早く追いかけてくるなんて……！」

「くそっ！　簡単な仕事だと思ったのによお……」

どうやら、水蓮たちが追いかけてきたみたいだ。  
しかももう確認できるところにまで来ている……。  
あと少しの我慢だな……。

じゃあ、なんでこいつらは止まったんだ……？

一瞬、そう思った俺だったが答えは簡単だった。

「仕方ねえ、人質使ってなんとか逃げるしかねえな」

そう言うとき男は俺の周りに固まっている子供たちに視線を向ける。  
子供たちは先ほどの元気はもう見る影もなく、その顔には恐怖が張り付いていた。

「おいっ！ お前に俺らの人質になって貰うぜ」

「大人しくしているよ」

男たちはこの中で一番小柄な女の子……あの黒髪の女の子に目を付けたようだ。

ゆっくりとその腕を伸ばし、女の子を捕まえようとする。  
女の子は目をぎゅっと閉じ、小さな声で助けてと呟いた。

はあ。

どうやら俺は結構、バカ野郎らしい。  
だってこんな時、勝手に身体が動き出すんだから……。

「にやつ！」

「うわっ、痛っ！」

俺は後先考えずに男へと飛び掛かる。  
いきなり顔を引っ掻かれた男は一瞬、慌ててたが……すぐに俺を引き剥がした。

「なんだ、こいつ！」

そう言うのと、もう一人の男が持っていた剣を大きく一振り。  
俺はその攻撃をうまくかわし、男の顔の横側に猫キックを食らわせる。

男は猫キックをもろに食らい、その場に倒れた。

うん、我ながらうまくいったな……。

俺がそう思った瞬間。

「このくそ猫がっ！」

始めに引っ掻いた男に俺の腹をおもいつき蹴りつけられた。  
蹴り飛ばされ、何度も叩きつけられる俺。

一瞬、息が止まったかと思うほどの衝撃とその後に来る猛烈な痛み。  
何本か骨が折れたかな……。

弱いよなこの身体……。

本当にこういう時、猫の身体の自分が恨めしい。

男は相当、頭に來たのか。

倒れている俺の首を掴むと、そのまま俺を持ち上げた。

苦しい……。

すっげえ苦しい。

けど、この腕を離させることは俺には出来ない……。  
もう力はほとんど残っていなかった。

てかおっさん、本当に首絞まってるから……！

俺、死んじゃうから……！

いやまあ、殺す気なんだろうけどさ。

「このバカ猫が！ 人間様に楯突いてんじゃねえよ！」

そう言つて、さらに手に力を入れる男。

それに合わせて俺の意識もだんだんとなくなって来る。

ははは、これは死んだかな……。  
俺がそう思い始めた時。  
視界に桃色が映った。

へへへ、おっさん……。そうやって俺に構ってるのもいいけどさ……。  
あんたの後ろに桃色をした虎が二匹いるから気をつけた方がいい……  
ぜ。

そう思いながら、俺は意識を失ったのだった。

まだ最終回ではないぞい。  
もちっとだけ続くんじゃ。

はっ！ 何か今、亀の甲羅を背負ったサングラスの老人がいたよう  
な……。

俺はそんな変なことを考えながら、目を開ける。  
上には見なれた天井があつた。

どうやら、建業の城に戻ってきたみたいだな……。

「目が覚めたのね……」

その声に視線を向けると、水蓮が横の椅子に座っていた。  
少し動いただけで、身体に激痛が走ったのはここだけの秘密だ。

「まったく無茶するわね……」

いや身体が勝手にね……。

そつえば、あの子供たちは……？

「全員、無事だったわ。今は自分たちの家にみんな帰ってる」

そっか。

それなら良かった……。

「あの子たち、みんな言ってたわよ……。猫神様にお礼がしたいって  
さ。特にあの黒髪の女の子」

ふーん。

別にそんなのいいのにな……。

この時の俺は知る由もなかった。

あの時助けた子たちが恩返しと称して全員、士官してくることを……。  
そのメンバーが中心となり、お猫様親衛隊なるものができたりすることを……。

この時の俺はまだ知らなかった……。

「貴方が気を失った後は大変だったわ……。子供たちは泣き叫ぶし、雪蓮は暴れるし……。」

それは…悪いことしたな。  
んで、お前は……？

「もちろん、あいつらを皆殺しにしてみよう」

そう言つて、笑顔を見せる水蓮。

あゝ、お前もキレてたわけね……。

それにしても身体が痛すぎるんだけど……。

「自業自得よ……。まあ、今日はもう休みなさい？」

そう言い、俺の頭を一撫ですると水蓮は席を立ち、扉の方に向かう。

さて、俺はもうひと眠りしますかね……。

そう思っていた俺に一度、こちらを振り返った水蓮が爆弾を落としてきた。

「ああ、あとたぶん明日には蓮華の説教があるから、楽しみにしてなさい」

えっ？ マジ……？

それってなんて死亡フラグ……？

れんは めのまえが まっくらになった。

## 第十話　ねこ、攫われる（後書き）

第十話。終了です！

いかがだったでしょうか？

黒髪の女の子…後の明命である、の巻でした。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています〜！

では。

第十一話 猫はこたつで…こたつがない…だと!?(前書き)

少し、日が空いてしまつてすみません。

ちよつと季節外れですけど、なんとなく書きたくなつたんで書きました!

では本編をどうぞ

第十一話　猫はこたつで…こたつがない…だと!?

季節は巡り、時は流れる。

今年もあの季節がやってきた。

みなさんも好きな季節がありますよね？

春夏秋冬。

どれもいい所がいろいろあります。

もちろん、俺にも好きな季節があるわけで……。

春はいいよね。

ぽかぽかとお日様も暖かくて、お昼寝には最適だし……。

夏もいいよね。

真っ青な空に白い雲が浮いてて、見てるだけでのんびりできるし……。

秋もいいよね。

涼しくなってきた、山とかの色とかも変わってとってもすごく綺麗だし……。

ただし冬……てめえはダメだ!!

今も外では雪が降っている。  
しとしとしと、雪が降ってやがる。  
俺のテンションも比例してどんどん落ちていく……。

確かに綺麗だとは思うよ？  
真っ白だし、ふわふわだし。  
雪化粧つてのも乙なものだと思うし、結晶とかもみんな違う形でいいと思うよ。

だけどさ……。  
そんないいところを差し引いてもさ……。  
冬は寒すぎるんだよっ！！

俺も一応はさ。  
毛を冬モードにしているんだよ！？  
空気も入れて膨らませているんだよ？

なのに何さ、これ？  
もう一步も動きたくないんだけど……。  
てか動くと凍え死ぬ。

どこかで聞いた歌だと雪が降ると犬は喜んで庭を駆け回るらしいけどさ。  
正直、理解に苦しむわ……。

俺は無理。マジで無理。

名も知らぬ犬たちよ……俺にもその元気をわけてくれ。

あと確か猫はこたつで丸くなるんだよね。

いいよね、こたつ。

人間は素晴らしものを生み出したと思うよ。

だけでもうだっけど！

この世界というか時代にはこたつがないという罨。

なぜだー！ー！ー！！

普通、冬とこたつとみかんはワンセットじゃないのか……！

神よ、なぜこんな試練を俺に与えるのですか……？

俺のことが嫌い……？

はいはい、そうですか。

俺もお前らなんて大っ嫌いだよ！！

実際にろくな奴はいないしね……。

そんなこんなで比較的暖かい部屋の中で、小さく丸くなっていた俺は突然の襲撃に遭う。

そつ、今日もあいつがやってきたのだ。

「れ〜ん」

「っ！！！」

声を聞いたとたんに俺の身体に緊張が走った。

身体をさらに小さくし、なんとか忍び寄る魔の手から守ろうとするが……。

「ふふふ。甘い甘い！」

「にやう……」

奴の手は俺の鉄壁？ の防御をひらりとかわし、懐へと侵入。

そして……いきなりお腹に氷のような手をつけられた。

外で雪を触ったであろうその冷やされた手は……文字通り、魔の手だった。

「うわ〜。やっぱり蓮は最高の湯たんぽよね」

いやあったか、あったか、じゃないから！

俺を便利グッズと勘違いしてないかにや！？

俺の抗議の視線は無視され、なおも身体を弄られる。

その度に俺の毛が逆立つ。

うつ……くつ……。

これって、ある意味拷問……。

マジでやめてくれないかにや……。

所々、語尾もなんかおかしくなってきた。折角、温めて置いた俺の体温がっ！

「ほらほら、蓮華もどう？」

自分の手が温まってきた後、雪蓮はさらに追い打ちをかけてくる。鬼だ！ここに鬼がいるぞー！

「も、もう、姉様？ 蓮が嫌がってますよ？」

いやいや、蓮華さん？

そう言いながら冷たい手をつけるのは……。

「にゃん！」

やめて貰えとうれいなくなんて。もう遅いんだけど……。

「本当。暖かい……」

俺を弄りながら、ほっこり笑う蓮華。

そんなにいい笑顔を見せても許してやらないんだからね……！  
という元気も今の俺には残されていなかった。

体温カムバークッ！

「さーてと、手も温まったことだし……」

「そうですね。もう充分です」

あらかた満足した後、姉妹はことあるうか俺を外に連れ出そうとする。

やめて！ もう俺の残基は一基も残ってないぜ……。

「折角、雪が降ってるんだからもったいないじゃない」

「蓮、外の景色もすごく綺麗よ？」

そう言って俺を説得しようとしてくる二人。  
いや正直、引き籠りたいんですけど……。寒い嫌だし。

「もう仕方ないわね……」

そついうと雪蓮は俺をひょいっと持ち上げ……。

「強制連行よ！」

「にゃー！」

俺を外へと連れ去った。

助けて、蓮華ー！

と最後の頼みである蓮華を見るも……。

「まったく姉様は……」

そう言いながらも笑顔で付いてくるだけだった。

ブルータス！ お前もかつ！！

結局、その後。

外で雪だるまを作っていた小蓮にまた湯たんぽ代わりにされた。  
今度は逃げることもできたけど、俺は逃げなかった。

べ、別に作ってた雪だるまが俺を似せてて、うれしかったとかじゃないよ？

真っ赤になってた小蓮の手を見たからとかでもないからね！  
勘違いしないでよね！！

「きゃ！？」

なんか変にツンデレってた俺に、突然飛来してきたものが直撃する。  
声をあげた所を見ると横にいた雪蓮に当たったようだ。

たいして痛くもなかったそれは、よく見てみると雪のかたまりだった。

ふと視線をずらすと、こちらをにやにや笑って見ている水蓮の姿が……。

ふふふ……。

俺は少しだけ笑いながら、雪蓮に視線を合わせる。  
雪蓮も俺を見ると大きく頷いた。

気持ちは一つ。

よろしい。ならば戦争だ！

こうして第一回、仁義なき雪合戦大会が幕を開けた。

まあ結果は……。

「いくらなんでも四対一はズるいんじゃない!？」

「何をいつてるのよ!？ 先に仕掛けてきたのはそっちでしょ!」

「今回は母様が悪いです。これはお仕置きです!」

「シャオもなげる」

逃げ回る水蓮を三姉妹が追撃している。

わっははは！

圧倒的じゃないか、我が軍は！

しかし、そう思ってた俺の顔に雪玉が直撃。

「油断大敵」

そう言っていると笑ってまた逃げる水蓮。

俺はそれを追いかけてようとしたが、すぐに止めた。

だって水蓮の目の前に……。

「水蓮様？ お部屋にいらっしやらないと思ったら……」

すごい笑顔の鬼がいるんだもん。

「め、冥琳？ ほらたまには家族との時間も大事かなーって、ね？」

「ほう。では政務は大事ではないと？」

「そ、そんなことはないのよ？ た、ただ……。ほらみんなも何か……」

助けを求めようと水蓮が後ろを振り返ってみると、自分の家族の姿はどこにもなかった。

ただあるのは自分の飼い猫に良く似た雪だるまだけ……。

「裏切ったな。みんな、私の気持ちを裏切ったんだ！」

「変なことを言っていないで政務に戻ってください」

「い、嫌〜！」

そして、そのまま水蓮は引き摺られて行きましたとさ。

お・し・ま・い。



第十一話 猫はこたつで…こたつがない…だと！？（後書き）

第十一話 終了です！

いかがだったでしょうか？

猫っていえばこたつじゃね？ って思ってた書きました。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！  
では。

第十二話　にらめっこ…？　俺は簡単には負けんよー！！（前書き）

更新が遅くなってすみません。

なんでか角膜炎になってしまって苦しんでました…。

だいぶ治ってきたので更新します！

では、どうぞ！

第十二話　にらめっこ……？　俺は簡単には負けんよー！

にらめっこ……。

みなさんも子供のころに一度はやったことがあるのではないだろうか？

無表情、またはおかしいな表情をつくり、どちらかが先に笑ったら負け、というルールで雌雄を決するといったって簡単なものだが、それだけに奥が深い。

代表的なこどもの遊びのひとつであるが、これはある種の決戦でもあると言える。

声を出すまでとか色々とローカルルールもあるらしいが、俺の中のルールでは基本的に変顔オンリーである。

しかしまあ、なぜこんなことを言い出したのかというのだ……。

「……………」

「……………」

それは今まさに、にらめっこ中なわけで……。

しかもお相手は最近、我が孫呉に入ってきた一人の武将。  
甘寧さんである。

その甘寧さんは今も俺に鋭い視線を向けてきていますよ、はい。  
でも俺は……。

俺はあいつらのためにも簡単に屈するわけにはいかないんだー！！

彼女の名前は甘寧。  
真名は思春というらしい。

もともとは江賊って奴だったらしいけど、水蓮にその腕を買われて  
今は蓮華に付いている。  
いつもは政務をしている蓮華の手伝いや護衛をしているらしい。

いやはや、あの蓮華が政務をしているとか。  
すぐく時間が流れた感じがするよね……。  
感慨深いというか、年取ったってというか……。

まあ、それは置いて。

問題はその甘寧さんである。

少し取っ付き難い雰囲気醸し出していることからわかるけど……。  
みんなに話を聞いてみると今まで笑顔になったのを見たことがないらしい。

たぶん真面目な人なんだと思うからそつとしておけばいいのに、なんとかその笑顔を見たいというアホな君主様が現れたのだ。

「というわけで蓮。思春を笑顔にしてください」

そしてこの無茶ぶりである

いやいや、あの人も人間なんだからきつといつかは笑ってくれると思うよ。

だからそれまで待てばいいじゃない。

「私はすぐに見たいの。それにあの子もその方が早くここに馴染めるかもでしょ？」

もう慣れたもんであるが俺の意見はすぐさま却下された。

むう……。

あの雰囲気但至少でも和らげば、周りともっと仲良くなれるのは確か……。

そこは水蓮の言うとおりのなのかもしれないけど……。

「まあ、蓮じゃ無理だっていうのなら仕方ないけど……」

そう言っつて水蓮はにやりと笑った。

むむむ。

こやつ……。

俺が笑っている水蓮を睨んでいると、傍で話を聞いてきた姫様たちが話しに入ってくる。

「大丈夫よ、母様。蓮なら余裕余裕」

ね？　っといった感じで俺に話を振って来る雪蓮。

「蓮……出来る？」

聞いているようにも聞こえるけど……。  
その目は期待に満ち溢れている蓮華。

「シャオも思春の笑っているところみたい」

弾けるばかりの笑顔を見せ、俺の逃げ道を完全に失くしてくる小蓮。

「もちろんタダではないわよ。お魚一週間分でどう？」

そして、水蓮のトドメの一撃。

.....。

……わかったよ。

やってやるーじゃないかつ！

ミッション：気になるあの子を笑わせる！ が発生しました。

勝利条件：今日中に甘寧さんを笑わせること。

敗北条件：上記が達成できないこと。

成功報酬はみんなうれしいお魚一週間分。

なお失敗した場合はしばらくお魚抜きとなっているのでご注意を。

いささか俺に不利なような気がしなくてもないが……。

まあいい。やってやんよ！！

そんなわけで、俺の絶対に負けられない戦いが幕を開けるのだった。

（蓮が部屋を出た後）

「もういっちゃった。意外と蓮って単純よね」

「うん、ご褒美には魚を出せば一発だしね!」

「あれは昔から変わらないのよね。本当に扱いやすいわ」

そんな三人の会話を横で聞きながら……。

「蓮……。色々頑張ってる……」

蓮華がそう呟いていたとかなんとか。

さて、まずは敵を知ろうと言うわけで、追跡をして見ることに。  
敵を知らずんば百戦危うからず、というやつである。

追跡して見れば、何かしらのヒントがあるはずと息巻いていたんだ  
けど……。

結果は……。

うん、予想以上だった。

兵の鍛錬や街の警邏をしてても好きな物とか何にもわからない。

基本的に鋭い空気を醸し出してるし……。

おやっさん、隙がどこにもないぜい。

こいつは強敵だ……。

敵の強大さを確認した俺は、とにかく策を練ってみることにした。  
好きなものがわからなかったから、あと笑わせる手段で思いつくのは……。

くすぐりの計。

モノマネ。

一発ギャグ。

ショートコント。

むむむ。

どれも行ける気がしないぞ……。

そこまで考えていて気がついた。

あっ！？ 俺、ねこじゃん……。

考えたやつがどれも実行できないという罠。

仕方がないので、ねこの姿でも出来ることを考える……。

.....。

何も浮かばねえ.....。

てか動物がきらいな可能性もあるし、アレルギーとかだったらどうするよ.....。

あれ？ これって軽く詰んだ？

そんな状況に軽く絶望していた時。

俺の脳裏には水蓮たちの顔.....ではなくて報酬の一週間分のお魚たちが浮かんだ。

お魚たちはつぶらな瞳で俺を見つめている。

.....そうだ。

ここで諦めてどうするんだ！

俺がここで諦めたらあのお魚たちは.....俺に食べて貰えないじゃないかな  
いか！

俺は腹を括った。

かくなる上は突撃あるのみである！

昔の偉い人もいつていたはずだ。

当たって砕けろと！ ジャパニーズ玉砕精神だと！！  
今こそ俺はその精神に則る！

俺は決死の覚悟で飛び出した。

「……………」

「……………」

こうして中庭で休憩中の甘寧さんとにらめっこしているわけなんだ  
けど……。

ダメです。

全然、笑ってくれないです。

間抜けな顔をしたり、舌を鼻まで伸ばしてみたりと色々身体を張ってみたけど、少しも表情がかわらない。

おまけに……。

「……何がしたいんだ？」

そんなことを言われる始末。

うう。もう心が折れそうです。

てか折れた……。

さようなら、俺のお魚たち……。

他の誰かにちゃんと食べて貰うんだぞ。

というか俺の変顔、面白くなかったのかな……。

祭とかは前、大爆笑してたのに……。

そんなことを思いながら傷心中の俺が爪を器用に使って地面にの字を書いていじけていると……。

「もしかして……私を笑わせようとしてくれたのか？」

甘寧さんが俺に疑問を投げかけて来る。

俺はそれににやーと返事をしながら大きく頷いた。

「そうか……。……変な猫だな」

そう言つと甘寧さんは俺と視線を合わせるようにしゃがみ込んだ。そして、慣れない手つきで俺を撫でてくる。表情に変化はないけど、その雰囲気は少し柔らかくなったように感じた。

おそろおそろといった感じだけど、優しく触ってくれていることから動物が嫌いというわけではないみたいだ。

俺を慰めてくれているみたいだし、この人はいい人に違いない。そう思った俺は喉をごろごろ鳴らしながら、その手に頭をこすりつけて甘えることにした。

「私は余り動物には好かれなかったはずなんだが……」

そう言いながらも撫でる手は止めない甘寧さん。だんだんとうまくなってきたその手捌きが俺を夢の世界へと誘い始めた。

「ん？ 眠いのか？」

「にゃ〜」

俺がそう答えると、甘寧さんは座り込んで俺を膝の上に乗せてくれた。そしてまた撫で始める。

んー、ねむ……。  
おやすみなさい……。

こうして俺はそのまま昼寝をするのだった。

くSIDE思春く

「眠ってしまったみたいだな……」

私は静かに眠ってる猫を撫でてやりながらそう呟いた。

たしかこの猫は孫家の飼い猫の蓮という猫だ。

猫神様饅頭というものもあるぐらい街でも民たちに好かれていて、  
城の中でもみんなに可愛がられている。

私が今お仕えしている蓮華様もとても可愛がられている様子で、よくお話をして下さる。

だから話には聞いていたのだが、直接見たのは今日が初めてだった。

しかし、直接見てみるとわかる。  
確かに可愛い。

始めはいきなり変な顔をして見せて、変な猫だと思ったが……。撫でてやると甘えてきて、すごくかわいい。そして……。

「にゃう」

ふふふ。どんな夢を見ているのやら……。

なにやら寝言を言いながら眠っている姿を見て、自然と頬が緩んだ。なんというかすごく和む……。

まだ仕事が残っているが、もう少しこのままでもいいかな。そう思いながら、私は蓮を優しく撫でるのだった。

くちゅうどその頃

「うわっ。思春が微笑んだ！」

「本当だ！ 母様。思春が笑ってるよ」

「やったね！ シャオちゃん！」

「母様……。そのネタは……」

陰から見ていた孫家ファミリーがいたとかいないとか……。

第十二話　にらめっこ…？　俺は簡単には負けんよー！！（後書き）

第十二話。終了です！

いかがだったでしょうか？  
思春さん登場の回でした。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしております！  
では。

第十三話 予感（前書き）

今回から少しだけシリアスになります…。

### 第十三話 予感

月日が流れるのは本当に速い。

気がつけば、雪蓮も蓮華も小蓮も大きくなってた。

上の二人は毎日政務とかもしてるし、小蓮も勉強が大変そうだ。まあ、内二人は俺を連れ出してよく逃げ出しているけれど……。

今の呉は平和といってもいい。

祭などの古参の将たちや思春や明命などといった新しく入ってきた将たちみんなが頑張ってくれている。

武官も文官も自分の力を余すことなく民たちのために使っていた。漢という国は荒れているが、ここの街のみんなも変わらず元気に生活出来ている。

これもみんなの頑張りのおかげだと思うと少し誇らしい。

そんな中、俺はというといつもと変わらずのんびりと過ごしている。しかし、ある意味ではねこというのは相当いいご身分なのではないだろうか。

寝て、食べて、寝て。遊んで、食べて、また寝る。

たまに連れ出されたり、無茶ぶりされたりすることもあるけれど。うん。本当に今が幸せだって感じてる。

ずっとこのまま過ごしていけたらいいな。

俺は心からそう思った。

満月の夜。

いつものように酒を飲んでいると水蓮が口を開いた。

「蓮……。劉表を攻めるわ」

いつもとは違った雰囲気だった。

戦のこともいつもなら笑いながら話すのに、その時の水蓮はどこかおかしいと思った。  
何か焦ってる……？

「劉表、ね……」

話によると、最近、荊州の劉表が兵を集めていると暗部から報告が上がっているらしい。

呉の民たちが危険に晒されるのなら王として動かねばならない。  
それは当然だと思っし、仕方のないことだとは思っ。

だけど、なんでか俺はすごく嫌な予感がした。

別にになにか根拠があるわけじゃない。  
水蓮たちが負けるとも思えない。

だけど…なんとなく何かが起こるような気がした。  
それも孫呉に悪いことが……。

それに水蓮の様子もどこか変な様に感じる。

そんなことを俺がしばらく考え込んでいると。

「何を深刻そうな顔をしているのよ？」

水蓮が俺の方を見ながらそう言うてきた。  
どうやら結構な時間、考えてたみたいだ。

「ん？ いや、ちょっと、ね」

「……もしかして心配してるの？」

「心配はいつでもしているよ。水蓮はいつも無茶するから……」

というが無茶しかしな……。

未だに最前線で戦いたがるのは総大将としてどうなのよ。  
いつも冥琳が頭を抱えているんだぞ……？

「あははは。いつも心配をおかけしてます」

「……お前、改める気ないだろ……」

俺はじとー、とした目で水蓮を見るが効果はもちろん無しだ。それを見て、はあくため息をつくと杯を空にする。

俺の方を見て笑っているのはいつも水蓮だった。さっきのは俺の気のせいだったのか……？

「蓮。ため息をつくときと幸せが逃げるわよ？」

「へいへい」

俺に酒を注ぎながらそう言ってくる水蓮。

俺はそれに適当に答えながら杯に口をつける。

気のせいならその方がいい。

戦前に不安になるのはいいことじゃないしな。

「それに、もし危なくなったら蓮が護ってくれるんでしょ？」

ちょっとおどけた感じで水蓮がそう聞いてくる。

いつもなら猫の俺に無茶を言うなって言うんだろ。

だけど、気がつく俺はいつもとは違うことを口にしてた。

何ができるかはわからない……。  
けど、この飼い主様を絶対に護ってやる。  
そんな誓いと共に……。

「……ああ。この命にかけても護ってみせるよ」

「っ！ ……ふふふ。期待してるわよ」

水蓮は少し驚いた表情をした後。  
笑いながらそう言って杯を傾けた。

「大丈夫……。きっと大丈夫……」

その後、小声で何か呟いていたみたいだが俺には聞き取れなかった。

「ん？ 水蓮、何か言ったか？」

「なんでもないわよ。ほら蓮。私の杯が空になったんだけど？」

「おっと、それは失礼しました。お嬢さま」

俺は恭しく頭を下げると酌をしてやるのだった。

出陣の朝。

俺は部屋に置いてある箱の前に立っていた。

その中には深紅のスカーフと蓮と刻まれている鈴付きの首輪が入っている。

昔から戦の時に俺が身につけているものである。

それを見ると自ずと身体に気合いが入っていくのがわかる。

未だに嫌な予感は消えていない。

こんなに不安な気持ちで戦場に出るのはもしかしたら初めてかもしれない……。

「蓮、少し動かないでね」

小蓮に首輪をつけて貰う。

りん、と綺麗な音を立てる鈴。

昔にお守りがわりと行って子供たちに貰ったものである。

戦場でいつでも俺を守ってくれる大事な宝物だ。

次は右手に深紅スカーフを巻いてもらう。

スカーフの赤は孫呉の赤。

今までの孫呉の礎となった者達の血の色。

孫呉のために戦った英霊たちの色だ。

「よし、完成！……うん、蓮。これでバッチリだよ！」

「にゃー」

褒めてくれた小蓮にお礼を返す。

そして今回の戦はお留守番の小蓮に外まで見送ってもらう。

広場に行くと、もうみんな集まっていた。

兵達も己が武器を持ち、整列している。

その表情はみな凛々しく、逞しい。

まさに孫呉の精鋭たちと呼ぶにふさわしい者達だと思う。

俺は歩いて水蓮の下に向かい、定位置である水蓮の馬に跳び乗った。

「ふふふ。蓮、似合ってるわよ」

乗ってすぐに水蓮にそう言われた。

決して嫌な気はしないが、特別にうれしいとは感じなかった。

出陣の時にいつも言われてるし……。

水蓮は俺の頭を一撫でした後。

顔を引き締まったものに変える。

雰囲気も王のものに切り替えたようだ。

「よし、出陣よ！」

水蓮がそう言うのと兵たちが雄叫びをあげる。  
それは真つ青な空へと大きく響いていった。

俺は右手に巻かれた深紅のスカーフを見つめる。

またここにみんなで帰って来よう。  
そして、みんなで笑おう。

だから……英<sup>みんな</sup>霊たち……。  
俺に力を貸してくれ。

こうして俺たちは戦場へと足を進めるのだった。

## 第十三話 予感（後書き）

第十三話。終了です！

いかがだったでしょうか？

次回の繋ぎみたいなお話でした。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では。

## 第十四話 風と共に去りぬ

劉表との戦が始まった。

敵の兵数はほぼ同じ……。

しかし、こちらは孫呉の誇る精鋭たちと優秀な将たち。戦は終始、こちらが優勢に進めていた。

「呆氣ないわね……」

雪蓮が引いていく劉表軍を見てそう呟く。

その顔には不完全燃焼だとしても書いてあるようだ。

「雪蓮……戦はまだ決したわけではない。気を抜くな」

「冥琳……。でも、つまんない」

「確かに呆氣ないのお」

「祭殿まで……。はあ」

冥琳が雪蓮を宥めているがほとんど効果はなく、さらに祭も便乗してくる。

冥琳は頭を押さえ、深いため息をついた。

「にゃ」

俺は慰めの意味も込めて冥琳の足に頭を擦りつける。

「蓮……。お前だけが私の味方だ……」

そう言うと冥琳は俺を抱きかかえ、撫でて来る。

その姿は仕事に疲れた一人暮らしのOLのようにも見えた。

「なによ。蓮は冥琳の味方をするの」

「姉様……」

そう言つて頬を膨らませる雪蓮。  
それを見て蓮華もため息をつく。

するとその横に冥琳が近づき、口を開いた。

「蓮華様……蓮を撫でますか？」

「ええ、そうさせて貰うわ……」

そして二人して俺を愛でてくる。

今、戦の最中だよ？ とは言わないでおこつ。

何というか、真面目組のみなさん。

いつもお疲れ様です……。

そんなやり取りをしている中。

いつもなら、率先して話しに入つて来る水蓮が妙に大人しい。

俺がそれを不思議に思っていると……。

戦場に動きがあった。

劉表軍が撤退をはじめたみたいだ。

「堅殿！ 敵が撤退を始めましたぞ！」

祭がその動きを見て、すぐに水蓮に声をかける。

水蓮はその声に頷くと……。

「よし！ 追撃に移るわ！ 祭、私に付いてきなさい！」

「応！」

「母様！ 私は！？」

「……雪蓮は留守番よ。あんまりわがまま言わないの」

「そんなあゝ」

打ちひしがれた顔をしている雪蓮を尻目に、水蓮は祭を引き連れて追撃に出ていく。

どんどん小さくなっていく水蓮の姿を見ると、俺の頭のどこかが警鐘を鳴らした。

マズイ……。

何がマズイのかはわからないけど……。

とにかくマズイ！！

「ん？ 蓮？」

「蓮？ どうかしたの？」

雪蓮と蓮華が俺に声をかけてくるが、俺はそれに何も返さない。

行かなくちゃ！

ただ漠然とそう思った。

「蓮！？ どこに行くの！？」

「蓮！ 待ちなさい！」

後ろで雪蓮たちが何か言っているが……それを聞き流して俺は走り出した。

水蓮の下に……早く……！

〈SIDE 水蓮〉

劉表との戦は私たちが優勢だった。

戦の前に感じた嫌な予感も今は感じない。

最近、重く感じていた私の身体も今はなんともないみたいだ。

私がそんなことを考えていると、劉表軍が撤退を始めた。

今が好機ね……。

早くこんな戦いを終わらせて、こっちを心配そうに見ている蓮を安心させてあげましょうか。

「よし！ 追撃に移るわ！ 祭、付いてきなさい！」

私はそう言つと、祭を連れて追撃に移るのだった。

山間部へ逃げていく劉表軍の逃げ遅れた兵達を討ちながら、尚も追撃していく。

横を見てみると激流の流れる谷があるみたいだった。

足場が悪く、体力の消耗や士気の低下を及ぼすような場所ではあるが、孫呉の兵達はなんなく進んで行く。

そして、もう直ぐ敵軍の殿に食いつくと言つ所で……。

突然、森の中から敵兵たちが飛び出してきた。

旗には、黄と書かれている。

「くっ、伏兵ね！」

「そのようじゃな……」

私と祭は追撃を止め、その場に急停止した。  
逃げていた敵兵たちも引き返して来て、兵の数はあちらの方が多くなっている。

どうやらまんまと嵌められてしまったみたいだ。  
けど、そう簡単にはやられないわよ！

私と祭は手勢を率いて迎撃に移った。

「こんつの！」

私は向かってくる敵兵を南海霸王で叩き斬る。  
戦況はあんまりいいとはいえない。

数を頼りに攻めてくる敵に、私たちはどんどん押されていった。  
祭も矢を使い切り、今は剣を振るっている。

このままじゃあ、マズイ……。  
なんとかしなくちゃ……。  
私がそう思った時。

「堅殿！」

祭の切羽詰まった声が聞こえてきた。  
その声で私が後ろを向くと……。

一本の矢が私に向かって飛んできた。  
それをなんとか南海霸王で防いだが、体勢が完全に崩れてしまう。  
そして、その隙について兵士が斬りかかって来た。

「孫堅っ！ 覚悟——！！」

兵士の振りかぶった剣の動きがすごくゆっくりに見える。  
ダメ、これはかわせそうにない。

そして悟った。

ああ……私はここで死ぬんだなって。

今までの人生を思い返してみる。

私は全力でここまで駆け抜けてきた。

前を向いてまっすぐ進んできた。

雪蓮なら立派に私の後を継いでくれる。  
それを支えてくれるみんなもいる。

だから……何も後悔することはない。

ああ、でも蓮の無敗神話崩しちゃったな……。  
それが少しだけ残念かな。  
それともう一緒にお酒を飲めないことも……。

蓮……。

もう会えないみたい……。

雪蓮達のことをお願いね……。

そう最後に祈って私は目を閉じた。  
死を受け入れるために……。

どん、と押された衝撃と綺麗な鈴の音が聞こえた。  
それと同時に剣が何かを切り裂く音も聞こえる。

私の身体には何も痛みが来ない。

不思議に思った私が目を開けると、目の前には……。

蓮がいた。

本陣で雪蓮たちと一緒にいるはずの蓮が目の前にいた。

ただいつもと違うのは……。

その真っ白な毛が真っ赤に染まっただけのこと……。  
いつもの元気な姿じゃなくて、地面に倒れていることだ。

「れ、蓮？」

私が声をかけても、蓮は何も答えない。  
それどころかピクリとも動かない。

嘘よね……？

冗談、だよ……？

私は蓮に手をおそろおそろ伸ばそうとする。  
しかし、それより前に……。

「ちっ！ 猫のくせに邪魔しやがって！」

目の前の兵士が倒れている蓮を蹴り飛ばした。  
蓮はゴロゴロと地面を転がると、そのままゆっくりと谷に落ちていく。

「蓮っ！」

間に合って！

そう思い、私は手を精一杯伸ばして蓮を捕まえようとする。  
しかし、その手は僅かに届かず空を掴んだ。

蓮はそのまま谷底に落下していく。

そして……谷底の激流の中に姿を消してしまった。

「いやあああああ————っ！——！！！」

辺りに私の絶叫が響き渡る。

私の横では蓮の巻いていた深紅のスカーフがひらひらと揺れていた。

## 第十四話 風と共に去りぬ（後書き）

第十四話。終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では。

第十五話　　だけど…きみがいない。　（前書き）

今回、視点の変更が多いです。  
ご了承ください…。

第十五話　　だけど…きみがいない。

〈SIDE雪蓮〉

突然駆けだした蓮の後を、私は軍勢を率いて追いかけている。

あんな蓮の姿は初めて見た。

きっと何かがあっただと私の勘もそう言ってる。

あの時の蓮はすごく焦っていた。

それこそ私たちの声が届かないくらいに……。

もしかしたら蓮と母様にしかわからない、何かがあるのかもしれない。  
い。

……そうだとしたら、少しだけ悔しい、かな。

私がそんなことを考えていると、戦っている両軍が見えた。  
しかも、こちら側が押されている。

母様達が危ないっ！

そう思った私が救援のために突撃の指示を出した、まさにその時。

「いやあああああ————っ！——！！！」

天にまで響くような母様の絶叫が聞こえた。  
いつもの母様らしくない叫び。

何かがあつたんだ！  
急がなくちゃ！！

私が急いで母様の下に向かうと、何か赤いものを握り締め、剣を振るっている母様がいた。  
その表情はどこか鬼気迫るものがあり、本物の虎のように敵を殺していた。

「母様っ！」

「……雪蓮。これを持っていてくれないかしら……」

私は母様に声をかけると母様はこちらを向いた。  
そして、母様があるものを渡して来る。

「えっ！？ これって……」

母様がさっきまで握り締めていったもの。  
赤色のそれに私は見覚えがあつた。

さっきまで蓮が身に着けていた、深紅の布。  
なんでこれを……？

少しの間考えた後、私は気がつく。

いない……。

周りを見渡してみる。

いない……。

蓮が、いない……。

「蓮の大事なものをあいつらの血なんかで汚したくないの……」

母様がいつもより低い声でそう言った。

良く見てみると、目も赤い。

考えたくない予感が私の頭を過ぎる。

「か、母様……。蓮は……」

「……………」

母様は私の問いに何も答えず、敵兵に向かって行った。  
でも一瞬だけ、辛そうな顔をしたのを私は見逃さなかった。

蓮は死んだの……。

そう言われた気がした。

泣きたい……。  
悲しみたい……。  
泣き叫びたい……。

でも、それより先にやることもある。  
私は剣を握る手に入れた。

「許さない……！」

お前たち……！  
全員殺してやるっ……！

〈SIDE祭〉

策殿が連れてきた軍勢を加えた儂らは怒涛の反撃に移った。  
特に堅殿と策殿の勢いが凄まじい。

今も二匹の虎が劉表軍を蹴散らしておる。

……それは当然じゃろ。

あの蓮が死んだのだから……。

あれだけ可愛がっていたのじゃ……。

大事な家族だったのじゃ。

怒らないわけがない……。

蓮はただの猫ではない。

勿論、見た目などはどこからどう見ても猫じゃが……。

我ら孫呉の者からすればそれだけではない。

呉の民は皆、子供の頃から蓮と遊び、可愛がる。

そしてそれは大人になってからも変わることはない。

じゃからあんなにも多くの者達に好かれている。

孫家の守り神。

そう言われているほど、蓮は孫呉の象徴にもなっているのじゃ。

それが殺されたのじゃ。

何も怒っておるのは堅殿や策殿だけではない。

兵達、皆が怒っておる。

その貌をみればよくわかるわい。

この士気の異常な高さ。

この怒涛のような攻め。

劉表軍はやってはいけないことをしてしまったんじゃ……。  
覚悟するんじゃない……。  
ああなつたあ奴らは簡単には止まらんぞ。

かくいう儂も相当怒っておつてのう……。

蓮の仇……。

今ここで討たせてもらおうかつ!!

〈SIDE水蓮〉

斬る。斬る。斬る。

向かってくるものは全部斬る。  
逃げるものも全部斬るっ!!

死んだ……。  
蓮が死んだ……。

私を庇って死んだ……。

嬉しかった。

私が劉表を攻めるって言った時。  
少し嫌な予感がしていたあの時に。

「この命にかけても護ってみせるよ」

蓮がそう言ってくれただけで、嬉しかった。

安心できた。

きっと大丈夫だって思えた。

だけど……。

こんな結果は望んでいなかった……。

生かしてくれたのは嬉しいわよ！  
庇ってくれたのも嬉しいわよ！

でも……。  
だけどね……。

蓮……。

あなたがどこにもいないじゃない……。

それじゃあ、ダメなの……。

そんなことされても……嬉しくもなんともないのよっ！！

私は思いのすべてを込めて剣を振るう。  
振るう剣は南海霸王。

孫家に伝わる宝剣。

こんな私怨で振るっていいものじゃないのはわかってる。

だけど、今は振るわせて……。  
そうしないと、あのバカな猫おこに対する怒りとそれ以上の自分に対する怒りでどうにかなってしまいそうだから……。

私は剣を振るった。  
怒りとか悲しみとか全部込めて……。

何人、斬ったのだろうか……。  
気がつけば辺りには数多くの屍が落ちていた。

劉表軍が撤退していく。

一時はあんなに攻めてきていたが、すべて蹴散らした。  
伏兵の将だった黄祖も討った。

雪蓮が追撃に行こうとしたので私はそれを止めた。  
こちらの兵達も少なくない損害を受けている。  
兵士達も行ったそんな表情をしてはいたが、追撃はさせない。

「母様、なんでよ！　まだ敵が残ってるわ！」

「雪蓮、落ち付きなさい」

興奮している雪蓮を落ち着かせようと宥める。  
その時、少し胸に違和感を感じた。

「なんでよ！　蓮が殺されたのにつ！　なんでそんな風にしているの！？」

「兵達も疲れているわ……。また伏兵もいるかもしれない。だから……」

「だから……。だから蓮の仇は取らないでいいっていうの…？　蓮が死んだのは母様のせいなのに！！」

雪蓮の言葉が私の胸に大きく刺さった。  
わかってる……。

私のせいだっていうのはわかってるわよ……。

私の胸がズキズキと痛み出す。

「さ、策殿！」

「兵達に聞いたわ。母様を庇って、蓮が斬られたって…！　そして谷に落とされたって！」

「……………」

祭が雪蓮を止めようとするが、雪蓮は止まらない。  
私は何も言えなかった。  
だって全部、事実だもの……。

胸の痛みはどんどん大きくなっていく。

「それなのに……庇って貰ったくせに……！　なんで仇も取らないのよ！」

泣き叫びながら雪蓮がそう言った。  
私は静かに口を開く。

「雪蓮……。私は……。っ、くっ！」

言葉の途中で私の胸に激痛が走った。  
その今までにないくらいの痛みには私はその場に倒れてしまう。

「っ！　堅殿っ！」

「母様……？」

慌てたような祭の声と、呆然としたような雪蓮の声が聞こえる。  
だけど私は、自分の意識がどんどん遠くなって行くのを感じた。

「堅殿！　しっかりするんじゃ！　堅殿っ……！」

「母様！　ねえしっかりして……！　母様……っ……！」

祭と雪蓮の叫んでいる。  
それをどこか遠くに感じながら思う。

ごめん……。  
返事できないや……。

そして私は完全に意識を失ったのだった。

とある河原

「ん？ あれは……」

少女は河原であるものが目に付いた。  
良く見ると一匹の猫が倒れている。

その身体には刃物でつけられた傷があり、全身はびしょ濡れだった。

「まだ、生きているわね」

まだかすかだが、その猫は呼吸をしていた。  
それは弱々しいものだったが、どこか強い意志を感じた。

「そう……。貴方はまだ生きたいのね」

少女がそう言うと、その猫はぴくりと少しだけ動いた。  
少女はそれを見てくすりと笑うと、その猫を抱きかかえる。

「いいでしょう。助けてあげるわ……。この曹 孟徳が」

第十五話　　だけど…きみがいない。（後書き）

第十五話。終了です！

いかがだったでしょうか？

あれ？　作者は呉が嫌いな…？　って思った方。

ごめんなさい…。あさきゆめみし（曲名書いていいのかな）を聞いていたらこんなことにつ！

あつ！　でも呉は大好きですよ！

まあ、別にどの国が嫌いとかはないんですけどね！

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

ではでは。

第十六話。 あつ。 ここはどこなのでしょう？ (前書き)

お気に入り登録が1000件を超えてしまいましたっ！

正直、すごく嬉しいです！

これからもみなさんが、楽しんでもらえるような作品にしていけるように頑張りますので応援して貰えると嬉しいです！

## 第十六話

あゝ。

ここはどこなのでしょう？

水蓮に敵兵の剣が振り下ろされる。

しかし、水蓮は動かない。

それだけじゃなく、水蓮はどこか諦めたような……悟ったような顔をした。

ム力ついた。

すっげえム力ついた。

俺が護ってやるっていったのに……。

あんな顔をした水蓮にどうしようもなく腹が立った。

そして気が付いたら飛び出していた。

まあ、斬られた時はヤバいかなって思ったけど……。

俺にはまだしないといけないことがある。

いや、できた……。

俺はあのバカに一言言ってやらないといけない。

簡単に諦めんな！　って……。

だから……。

俺はまだ死ねない……。  
死ぬわけにはいかないんだっ！！

「う、にやう？」

最初に感じたのは眩しいほどの日の光だった。

俺は気がつくやうに寝台の上にいた。

一瞬、建業に帰って来たのかと思ったけど、なんとなく寝台の感触が違ふ。

部屋を見渡しても、俺が知っているものとはやっぱり違った。

ここはどこだ……？

そんなことを考えるが、じっとしていても何もわからない。  
なので、とりあえず起き上がろうと身体に力を入れることにした。

すると……。

「にゃあ〜！」

全身に猛烈な痛みが走った。特に脇腹が痛すぎる。  
やばっ、すごく冷や汗が出て来たんですけど……。

ここはゆっくりと呼吸を整えるんだ！

なるだけ動かないことが一番大事。

少しでも動いたらまた泣きを見ることになってしまう。

確認事項を頭に入れて俺が呼吸を整えようとしたまさにその時。

「おっ！ 目が覚めたのか！？」

どん、と音を立てて扉を開けるとともに女性が大声を出して入ってきた。

俺はそれにビククリして身体を動かしてしまい、身体にまた激痛が走る。

「ん？ 何を悶えているんだ？」

いやいや、あんたのせいだからね……。

すごく突っ込みたいけど、痛くてそれどころではない俺だった……。

痛みがなんとか引いた後。

俺は女性と対面した。

女性は黒髪で赤いチャイナ服を着ている。

「しかし、お前は運がいいな。もし華琳様が助けてくれなかったら確実に死んでいたぞ?」

「にゃ〜?」

いや華琳って誰?

っていうか貴方も誰なんですか?

俺は疑問を投げかけてみる。

「ん? そうだぞ。華琳様は素晴らしい方なのだった!」

ありゃ、ダメだ。通じないや……。

むう。呉のみんなだったら会話できるのに……。

しかし、これが普通の反応なんだろう。

そう思うと呉の人達って……いや、何も考えまい。

「……………それでだな。その時の華琳様が……………」

まあとりあえず、この人がその華琳様って人のことが大好きなのはよくわかったかな。

俺は適当な所で相槌を打ちつつ、話を聞くのだった。

「……というわけで華琳様は本当に素晴らしいのだ！ 良くわかったか？」

「にゃー」

かなり長いお話がやっと終わったようなので、頷きながら返事をしておく。

目の前の女性はそれを見て、うれしそうに頷いた。

「うんうん。お前、中々話のわかる猫だな……」

つ、疲れた。

ケガ猫にこれはちと辛いぜい……。

でも、この人は何をしにここに来たんだろう？  
時間とか大丈夫なのかな……？

俺がそんな風に思っていると……。

「あつ！ しまったー！！ 華琳様に目を覚ましていたら呼ぶように言われていたんだっつ！」

女性は大声でそう言うと、頭を抱え出した。

どうやら、噂の華琳様とやらの用事を頼まれていたみたいだ。

「マズイ。すごくマズイ……。このままでは華琳様に叱られてしま  
う……」

今度は落ち込み出した女性。  
すごく忙しい人だなーと思いながらも、俺のせいで怒られるのはなんか申し訳がないなとも思った。

仕方ない……。  
少し我慢しよう……。

俺は寝台から起き上がると、女性の足に頭を擦りつけた。  
身体に走っている激痛は我慢します。  
でも涙がでちゃう……。だって、ねこなんだもん。

「……慰めてくれるのか？」

「にゃーん」

女性がそう言ってきたので俺は返事を返す。  
元気出せよって意味も込めて……。

「そうか……。うん、お前は中々……いや、かなりいい猫だな」

そう言っただけは何やら考え始める女性。  
本当に忙しい人だな……。

「よし、決めた！ お前にいいものをあげよう！」  
そう言っただけで女性は胸を張った。

いいもの……。  
できればお魚がいいな……。  
いや、俺はお魚を所望しますぞっ！！

「んー。そう言えば、お前の名前は何と言っただ？」

女性が突然名前を聞いてきたので、俺は首を伸ばし、首輪に付いている鈴を見せる。

しかし、なぜにこのタイミングで？

「んー。蓮、というのか？」

「にゃん！」

そうだと言わんばかりに俺は元気よく答える。

そのせいでまた痛みが走ったのはご愛敬だ……。

「そうかそうか。ならば蓮！ お前に私の真名を預ける！」

ああ、真名ね……。

つて、ええ〜！？ 何、この急展開……。

「あつ！ 真名というのはな……。すごく大事なものだぞ？ お前がいいやつだと思ったから預けるんだからな？」

俺の驚きを余所に女性は真名の説明をしてくれる。  
それはわかってるけど……。

「まあ、とにかく私の真名は春蘭だ。よろしくな、蓮！」

そう言う女性……春蘭は俺の頭を撫で始めた。  
まあ、預けてくれるのなら受けておこうかな。  
気を許してくれてるってことだし……。

「にゃあ！」

俺がそう考えて返事を返すと、春蘭は嬉しそうに笑い、そして俺をガツチリ掴んだ。

「よし、蓮。ならば早速、華琳様の所に行って一緒に怒られようではないか！」

「にゃ？」

あれ？ 雲行きがなんか怪しくなってきましたよ。  
嫌な予感もひしひしと感じますよ……。

「うーん、話はこうだな。私が部屋に行くと、目を覚ましたお前が逃げ出してしまった。それを私が追いかけて捕まえていたら遅くなつたと。うむ、完璧だ」

いやいや、穴だらけだよ！？

まず、前提条件として俺は今、走ったりできないし……。  
というかその理由だと俺が悪者に……。

はっ！ まさかそれが狙い……。

春蘭……！！ なんて恐ろしい子……！！

というか、真名もこのために教えたのかっ！

驚愕する俺を余所に春蘭は意気揚々と部屋を出る。  
俺を逃がさないように離さないままで……。

はぁ。もうどうにでもなれ……。

そんな投げやりな気持ちな俺はこの後に出会う。

一人の女の子に……。

霸王と呼ばれる女の子に……。

第十六話。 あつ。 ここはどこなのでしょう？ (後書き)

第十六話。 終了です！

いかがだったでしょうか？

まだ華琳様は出ませんでした。

春蘭のキャラがおかしくないか、少し心配だったり…。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしております！

では。

## 第十七話　お猫様と霸王様。

目の前に女の子がいる。

金色の髪で、宝石みたいに綺麗な青い目をした女の子。

彼女が纏っているのは凡人とは一線を介した雰囲気。

彼女に初めて会った人はその王たる覇気によって気押されるだろう。

そして、ある者は心酔し、ある者は恐怖する。

そんな空気を彼女は出していた。

たぶん、彼女に会った人は初めに思うだろう。

この人は人の上に立つべき人間だ、と……。

だけど、俺は少しだけ違った。

王たる器の持ち主だとかそんなのは関係なく……。

彼女にはただの女の子に戻っていられる時間はあるのかな……？

その身に纏った鎧を…その仮面を…脱げる場所はあるのかな……？

そんなことを思い、彼女のことが少しだけ心配になった。

「春蘭…。ずいぶん遅かったわね……」

華琳という人が口を開く。

その声には不機嫌さが少し滲み出ていた。

「は、はい。私が部屋に行くといきなり蓮が逃げ出しまして……」

少し慌てて春蘭が言い訳を始める。  
あんまり動揺すると嘘だつてばれるよ？ と俺が思ったのはここだけの秘密だ。

「蓮……？」

「この猫の名前です。この首輪の鈴にも彫ってありました！」

そう言つと春蘭は俺を前に突き出した。  
前に出された俺は宙ぶらりん状態である。  
なんかすごく間抜けっぽい。

「ふん、なるほどね。ところで春蘭……。嘘をつくのなら、もう少し上手くつきなさい」

「べ、別に私は嘘にやど……」

うわー。

余裕でばれてるよー！！

しかも春蘭、噛んでるし……。

「とぼけてもダメよ。だいたい、今も自分で歩けないその子が逃げられるわけがないじゃない」

それはごもつとも。

俺、今も春蘭に抱えられてる状態だしね……。

「うつ、それは……」

「そう、春蘭は私に嘘をつくのね……。悲しいわ」

そう言くと華琳さんは悲しそうな顔を作った。

だけど、手で隠した口が少し笑っている。

さすがにこれは嘘だって春蘭も……。

「っ！ 華琳様！ 申し訳ありません！ 蓮と話をしていたら遅くなってしまいました！」

気付かなかったー！！？

春蘭……なんて素直な子っ！！

「猫と話を……？」

そう呟くと華琳さんは少し怪訝そうな顔を俺の方に向ける。

ちょうど俺もそっちを向いていたので、ばっちり目と目が合った。

「にゃ〜」

また春蘭が嘘をついたと思われるのは可哀想なので……。俺は大きく頷きながら返事をした。

「へえ、人の言葉が分かるみたいね。始めまして、蓮。私は曹 孟徳よ」

少し笑みを浮かべながら、俺に自己紹介をしてくれる華琳……。いや孟徳さん。やっぱり勝手に真名で呼ぶのは無しだよね！

「にゃん！」

「ふふふ。本当に賢いみたいね……。それに……」

どうもです、孟徳さん！

というわけで元気よく挨拶を試みる。

それを見た孟徳さんは笑みを深くすると、俺を抱きかかえ、顔を近づけてきた。

「いい瞳めをしているわ。とても強い意志のある瞳……」

そして俺の瞳をしっかりと見つめてそうやってきた。

強い意志、ね。

意志……。何かを成し遂げようとする心。

それにしてもいい瞳をしているなんて、に直接言われたのは初めて

だ。

「貴方はとても気高く、美しい」

それはたぶん彼女の中での最大級の賛辞であろう。  
とても猫に言うような言葉ではない様にも思っただけ……。

それにそれを言うのなら、俺は孟徳さんの方がすごく気高くて綺麗  
だと思うよ？

「ありがとう。そう言っても貰えると嬉しいわ」

そう言っていると孟徳さんは嬉しそうに笑った……。  
ん、あれ？　もしかして考えが伝わってる？

「何故なのかしらね……。貴方の瞳を見ていれば、何を思っている  
か良くわかるわ」

おう……。まさか会話できるとは……。  
春蘭とは出来なかったのに……。

「春蘭……？　あら、真名で呼んでいるの？」

ああ、何でか預けてくれたんだよね。  
理由はよくわかんないけど……。

「そうなの……。なるほどね……」

すると、孟徳さんは何やら考え始める。

どうかしたんだろうか？

「それじゃあ、私も預けるわ。私の真名は華琳よ」

えっ！？

マジで……！？

そんな簡単にいいのかな？

「いいのよ、私は貴方のことが気に入ったもの」

そっか……。ならよろしくっ！

あと遅くなっただけど、華琳。助けてくれてありがとう。

俺はぺこり、と頭を下げる。

「ええ、よろしく。後、そのことは気にしないでいいわよ、ただの気紛れなもの」

気紛れでも華琳が助けてくれなかったら、俺は死んでいたと思うし……。

だから、ありがとう。

いつかこの恩は必ず返すからっ！

「そう。まあ期待しないで待っているわ」

そう言うとき華琳はふわりと笑い、俺の頭を撫でる

その時の笑顔はさっきまでのものとは違い、年相応のものだった。

「あのく、蓮？ 華琳様？」

その後も少し俺と華琳で話をしていると、おそろおそろ春蘭が話しかけて来た。

そういえば春蘭……影薄くなってたね……。

あつ、別に忘れてたとかではないよ？ ホントだよ！？

「あら春蘭、まだ居たの？」

「か、華琳様」

ひでえ……。

華琳ってドSなのかな……？

ほら、春蘭が泣きそうな顔をしてるよ？

「ふふふ、冗談よ」

その楽しそうな顔。

やっぱりドSみたいだ……。

てかアホな子とドSっ子って……。

まだ二人しか会ってないけど、この人はみんなキャラが濃いな……。

二人のやり取りを見ながら、そんなことを思う俺なのであった。

＼SIDE華琳＼

私は今日の分の政務を黙々と片付けていた。

私がこの陳留を治めてまだ日が浅い。

まだやらなければならぬことは山ほどあった。

次の書簡を手に取り、ふと考える。

あの猫は目を覚ましたのかしら……。

河原であの子を拾ってからもう一週間。

あの子は未だ、目を覚まさない。

大きな刃物で斬られた傷とどこかで打ちつけたのであろう全身の打撲。

正直、生きているのが不思議なほどの大怪我だった。

けどあの時、今にも死んでしまいそうな状態だったあの子は、それでも必死に生にしがみついていた。

生きたい……生きなきゃいけない……。

私にはあの弱々しい呼吸がそう言っているように聞こえた。

無様な生より誇り高い死を……。

私は常にそう思っ生きている。

だけど……。

なぜだろう……。

その時のあの子の姿が、とても尊いものだと感じたのは……。

その今にも消えそうで消えない命の灯が、とても綺麗だと感じたのは……。

気が付くと、完全に手が止まっていた。

いけない……。

まだ片付けなければならない書簡が残っているんだった。

私は頭を切り替えて仕事に戻る。

それでもあの子のことか少しだけ…ほんの少しだけ気になったので、少し様子を見に行つて貰うことにした。

私も秋蘭も書類仕事で忙しい。

今、手が空いているのは春蘭だけだった。

それで春蘭に頼んだのだが……遅い。  
すごく遅い……。

自分で見に行こうかしら……。

私が半ば本気でそう思っていると、扉が開き、春蘭が戻ってきた。  
あの子を連れて……。

春蘭が連れて来たこの子の名前は蓮、というらしい。  
しかも、どうやら人の言葉を理解できるみたいだ……。

私が自己紹介してみると、よろしくとでも言うように鳴く蓮。  
不覚にも、少し可愛いと思つてしまったのはここだけの秘密だ。

私は蓮の瞳を見てみる。

その真つ赤な瞳は、とても澄んでいて強い意志と光が宿っていた。

その瞳を見ていると、こちらが吸い込まれてしまいそんな感覚に陥る。

美しい……。

純粹にそう感じた。

それと同時に蓮は普通の猫ではないとも思った。

まだ蓮には他になにか秘密がある、そんな気もした。

もしかして私が蓮を助けたのは……。

私が蓮と出会ったのは……天命なのかもしれない。

私は自分が映っている蓮の深紅の瞳を見ながら、そう思うのだった。

**第十七話　お猫様と霸王様。（後書き）**

第十七話。終了です！

いかがだったでしょうか？  
遂に華琳様登場でした。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では。

## 第十八話　最近って…そうなんだね。

華琳が春蘭を弄って遊んでいるのを見ていると……。  
がちやりと扉の開く音がした。

「おや？　何やら楽しそうですね」

「あら、秋蘭。もう仕事は片付いたの？」

入ってきたのは青い髪の落ち着いた雰囲気的女性だった。  
口調からすると、華琳達とも親しいみたいだ。

「はい、今日の分はすべて。ところで……姉者がまた何かしたので  
すか？」

女性……秋蘭さんは華琳の問いに答えると、そう聞き返した。

「秋蘭！　別に私は何もしてないぞ！」

秋蘭さんにそう言つと春蘭は少し、頬を膨らませる……。

姉者……。

春蘭が姉者……。

つて！？

「にゃあああ！？」

いかん、ビクリしすぎて思わず声を出してしまった。  
そのせいで三人の視線が俺に集まる。

うつ。

そんなに見ないでもらえると嬉しいな。

「蓮、一体どうしたのだ？」

「にゃ、にゃあ〜」

頭にクエスチョンマークを浮かべる春蘭。

言えない……。

春蘭が姉だとは思えないなんて本人には言えない……。

俺は内心冷や汗を掻きながらも、可愛らしく鳴いて誤魔化そうとする。

よし、春蘭ならこれで誤魔化せ……。

「春蘭が姉と聞いて驚いたみたいよ？」

「にゃ！？」

うおい！

華琳さん！？ 何て事をいうのさ！？

「ふふふ……」

華琳に抗議の視線を向けるが、意地の悪い笑顔で返された……。  
悪女や。

ここに悪女がおるっ！

「なにい〜？ おい蓮っ！ お前は私が姉らしくないというのか！」

華琳がそんなことを言うから案の定、春蘭が絡んできましたよ……。大丈夫。秋蘭さんの方がお姉さんっぽいとか、少しも思っていないから落ち着いて、ね？

「秋蘭の方が姉っぽいらしいわよ」

ちよっ、華琳さん。

もう誰かあの子を止めて……！

「れ〜ん〜？」

えっと、春蘭……？

とりあえず、その物騒な剣を仕舞うことから始めようか。ていうかそんなの食らったら俺、一発でアウトだから！？

前門の春蘭に後門の華琳。

俺はここで終わってしまうのか。

俺がそんな状況に軽く絶望していた時、救いの女神が現れる。

「まあ少しは落ち着け、姉者。その子も怖がっているぞ？」

「秋蘭。しかしだな……」

その女神は青い髪の女性……秋蘭さんだった。

宥めるような口調で見事にあの春蘭を押さえている。

おおっ！

まさに救いの女神っ！

それいけ、ぼくらの秋蘭さん！

「華琳様も……。あんまり姉者を煽らないでください」

「ふふふ、悪かったわ。つい、ね？」

華琳はそう言うけど、顔が笑っている。

華琳さん？ 貴女、絶対に反省してないですよね……。

俺が華琳の方をじと、と見ていると……。

「それはそうと、もう目が覚めたのだな」

「にゃん！」

秋蘭さんが俺にそう聞いてくるので、返事を返す。

そして、ついでに秋蘭さんに頭を擦りつけて愛想を振りまいた。

この三人の中ではこの人が唯一の良心だし……。

さっきのお礼も込めてみた。

「そうか、元気になったのなら良かった……。しかし、人懐っこい猫だな……」

秋蘭さんはそう言う俺を撫でてくる。

その顔には少し笑みが浮かんでいた。

「どうもその子は、人の言葉がわかるみたいなの。だから秋蘭も自己紹介をしなさい。私と春蘭は真名も預けたわ」

「はい、華琳様。私の名前は夏侯 妙才だ。真名を秋蘭という、お前の名は？」

華琳がそう言うと、秋蘭さんは自己紹介をしてくれた。

俺も名も聞かれたので、春蘭の時と同じように首輪を見せる。

「蓮、か。よろしく、蓮」

「にゃ！」

はい、よろしくです！

ここで一番頼りになるのは貴女だと思ってますから……。何かあったら助けてね！

「それとさつきは姉者がすまなかつたな」

そう言うつまなそうな顔をしてくる秋蘭。

俺は気にしてないよ、といった感じにゴロゴロと喉を鳴らしながら思う。

本当にしっかりしてる妹さんや……。

それにしても秋蘭といい、蓮華といい、最近は妹の方がしっかりする傾向にあるのかな……。

なんというか姉のみなさん……もっと頑張つて！

「あら？ 蓮は秋蘭によく懐いているみたいね」

「？　そうなのですか？」

華琳の言葉に秋蘭が首を傾げる。  
俺も別にそんなつもりはないんだけど……。

「ええ。私にはそんなに甘えて来なかったわ……」

そう言くと華琳はちょっとだけつまらなそうな顔をした。  
んー？　どうかしたのかな？

「蓮……。華琳様はお前のことをすごく心配されていたんだぞ？  
仕事中也よく気にされていたし……」

少しの間、華琳の顔を見た後。

秋蘭が俺にそんなことを言ってくる。

なぬっ！

華琳がそんなことを……。

俺は少し驚きながら華琳の方を振り向いた。

「後、お前が一週間も目を覚まさないから、たまに部屋を覗きに行  
つたりもされていたな……」

華琳……。

お前……。

「なつ、秋蘭！　余計なことは言わなくていいわ！」

秋蘭にいきなりカミングアウトされた華琳は、顔を赤くして文句を  
言っている。

どうやら、この子はからかうの好きだけど、からかわれるのには慣れていないようだ。

それにしても、そんなに心配してくれていたとは。気紛れとか言ってたくせに……。

俺は少し生温かい目で華琳を見つめる。

「な、なによ？ 私はただ面倒は最後まで見ないと気が済まなかっただけよ！」

うん、なんていうか……。

その顔で言われてもなーって感じが……。

でも、感謝はしているよ。

華琳、本当にありがとう。

「ふん！」

俺がお礼を言うと、華琳は顔を横にぶいっと向ける。その顔は未だ、赤いままだった。

「あれは照れているだけだからな」

小声で秋蘭がそう教えてくる。

俺はそれに頷いた。

さすがに俺もそれはわかってますよ、姐さん。

「しゅうらうん？ 何か言ったかしら？」

「いえ、華琳様。特には……」

華琳の地獄耳にはそれが聞こえたみたいだが、秋蘭はなんともないように返す。

もしかしたらこの人がラスボスなのかもしれない。

俺が少しそう思い始めていると……。

「あの、みんな？」

少し前から話に置いていかれていた春蘭が話しかけてきた。  
俺達、三人は春蘭を一斉に見る。  
そして……。

「ああ、姉者。まだ居たのか」

「春蘭、まだ居たの？」

「にゃ？（春蘭、居たんだ？）」

そう言った。

「う、うわあーん！」

三人からの一斉攻撃を浴びて、泣きながら外へと飛び出していく春蘭。

ノリだったとはいえ、可哀想だったかな……。俺が少しそう思っていると……。

「ふふふ。やっぱり姉者は可愛いな」

秋蘭が笑顔でそう言っていた。

おう……。

この人もやっぱり普通じゃないよ……。

拝啓、呉のみんな……。

ここの人たちはみんなキャラが濃いみたいです……。

俺、大丈夫かな……。

第十八話　最近って…そうなんだね。　（後書き）

第十八話。終了です！

いかがだったでしょうか？

いかん、すげえ難産だった…。

三人ってこんな感じだよね？　大丈夫だよね？  
違和感があったらすみません…。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では。

第十九話　それゆけ！　僕らの春蘭号！　（前書き）

今回、少し長めです。  
ご注意ください！

## 第十九話　それゆけ！　僕らの春蘭号！

ども、只今、陳留にレンタル移籍中の蓮です！

そういえば、この登場の仕方かなり久しぶりだったり…。

さてさて、借りてきた猫という諺もありますが、現在の俺の状況はまさしくそれと言えるでしょう。

簡単にいうと、俺は今、すごく大人しくしてます…。

まあ、なわばりとか云々じゃなくて怪我が主な原因なんだけどね…。

どうやら怪我は動いた時に走った痛みの通り、結構酷いみたいで…。半年くらいは安静にして置かないといけないらしい。つまりそれは最低、半年は帰れないということ…。

はあ…。

ちよっだけ、ため息が出た。

華琳は怪我が治るまで、ウチで面倒を見るといつてくれた。

さすがに申し訳なかったので、一度は遠慮しようとしたんだけど…。

「中途半端なままで怪我人を放り出すような真似を私にさせる気なの？」

そう言われてしまうと、俺は何も言えないのである。

それに実際、このままで呉に戻るのは無理っぽい…というか、そもそも帰る手段がない。

歩いて帰るのは…ちょっと、無理なような気もするし…。  
なので結局、俺はしばらくここで御厄介になることになったのだった。

はあ…。また借りが増えていくよ…。  
本当にどうしよう…。

まあ、それは一旦置いて…。  
今の俺はとても大きな悩みがあった。

それは、暇なことである。

自由に動けないのって予想以上に辛い。

しかも、たまに無理して外を歩いたりすると、何故か華琳に見つかって部屋に連れ戻される…。  
むう。華琳には何かセンサー的なものが付いているに違いないと思うんだ。

しかし、何度止められようが、俺のこの熱いパトスは止められな…。

「蓮、ここで何をやっているのだ？」

部屋から出た瞬間に止められた、だと！？

ただ、救いだっただのは華琳ではなく春蘭だったことだ。

ここはなんとか誤魔化して、俺は外で散歩をするんでいい！

「にゃー」

俺は笑顔を浮かべて可愛らしく鳴いてみる。  
スマイル、スマイル…。

「あまりうるちよろすると、また華琳様に叱られるぞ？」

「にゃ、にゃあ」

うっ…。

ここで見たことはどうぞ、ご内密に…。

俺は春蘭に懇願の眼差しを向けてみる。

しかし…。

「うーん。よくわからんが、私は今から警邏だ」

っ、伝わってねえ…。

コミュニケーションの壁は思ったよりも厚かったようだ。

でも、これはいいことを聞いたぞ。

春蘭に着いていけば、街に出れるじゃないか！

「にゃ、にゃん！」

「ん？ 蓮も着いて来たいのか？」

俺は春蘭にきらきらと何かを期待した目を向けた。すると、今度は正しく意味を理解してくれた春蘭。

これは、いけるっ！

しかし、華琳様がな…とやっているけど、もうひと押しだ！

俺はきらきらした目をつるつるした目に変更する。

俗にいう、捨てられた子犬の眼差しビームだ。

別名、君に届け、この想い！ 攻撃でもある。

「うつ…。ええい、わかった。連れていくから私をそんな目で見るな！」

ふ、他愛のない。

またつまらぬものを攻撃してしまった…。

なんーてね。

やばい、街とか久々ですげえ嬉しい！

「しかし、お前は今あまり動けないだろう？ 一体、どうするんだ？」

ふふふ。春蘭、それは問題ないよ。

ちゃんと考えてるから…。

こういう時はね…。こうするのだっ！

くSIDE秋蘭く

今日は午後から、姉者と警邏だ。  
私は城門の前で姉者を待っていた。

しかし、時間になっても姉者はやって来ない。  
さすがに仕事をさぼるのはマズイ。

仕方ない、呼びに行くか…。

私がそんなことを思っていると、後ろから姉者の声がした。

「おい！ 秋蘭く！」

「遅いぞ、あね、じゃ……」

私が姉者の声を聞いて振り返る。  
するとそこには…。

「あ、姉者？ 何故、蓮を頭の上に乗せて…」

蓮を頭の上にちょこん、と乗せた姉者の姿が…。  
くっ、いかん。

これはなんて最終兵器だっ！  
リーサルウェポン

私は慌てて、視線を逸らす。

その時、少し鼻を押さえていたのはご愛敬だ。

「い、いや。これはだな、蓮の奴が勝手に…」

「にや、にやつ！？」

「おわっ！？」

姉者が言い訳をしようと私に詰め寄ると、頭の上の蓮が落ちそうになった。

それで蓮も姉者もあたふたとし出す。

くっ、なんだこの破壊力は…。

私を悶え殺す気なのか…。

私は少し、強めに鼻を押さえる。

そこから少しだけ赤いものが見えていたのもご愛敬だ。

というか、この状態で警邏…。

果たして、私は最後まで耐えきれののだろうか？

私は少しの不安を抱えながら、まだ慌てている姉者達を見る。

うむ、無理だな…。

私は早々とそう悟ったのだった。

警邏をしていると姉者がいきなりため息を吐いた。

「はあ」

「姉者、大丈夫か？」

私は姉者にそう尋ねる。

ここまでの警邏で、凝視しなければなんとか大丈夫な状態までの耐性を作ることができた。

まあ、いくらかの鉄分は失ってしまったが…。

「まあ、蓮は小柄だから重くはないのだが…」

そう言うと、姉者は困った顔をする。

そんな姉者も可愛いなと思いながら、私は周囲に視線を向けた。

「すごく見られているな……」

「むう。まったく私は見世物ではないというのに……」

今度は、少し不満そうな顔になる姉者。

ここまでの警邏の最中、民達の視線は蓮と姉者に集中していた。まあ、どれも微笑ましいものを見るようなもので、悪いものではなかったから問題はないが、姉者は少し堪えたらしい。

それでも蓮を下さないのは、蓮が嬉しそうにしているからだ。今も楽しそうに辺りをキョロキョロして見ている。

そんな蓮を見てみると、蓮がある所に視線を集中させた。そちらの方を見てみると、一人の少女が籠を売っている。

「おつ、姐さんら。どや、竹籠一つ買ってくれへんか？ 邑の皆が丹精込めて作ったからそこの竹籠よりも丈夫やで」

少女はそう言うと、並べている商品を見せてくる。うむ。これは中々の代物だ……。

「にゃ！」

私は竹籠を見てそう思ったが、蓮はどうやらその横にある木箱の方に興味があるみたいだ。

木箱の方を凝視しているその目もどこか輝いている。

「おっ、そのにゃんこは中々お目が高いで！　これは、ウチが開発した全自動籠編み機なんや！」

「全自動…」

「…籠編み機？」

「せや。まずはこの籠の材料となる細う切った竹をこの絡繰の底に入れるんや」

鸚鵡返しに聞き返す私と姉者の前で、少女は竹の薄板を木箱の底に一周するように入れていく。

「さあ、姐さん。この取っ手をぐるぐる回してくれへんか？」

「ああ…」

少女が影になつて見えなかった取っ手を姉者の方に向ける。

姉者も言われるがまま取っ手を持ち、ぐるぐると回してみた。

すると薄板が木箱の中に吸い込まれていき、木箱の上から編み込まれた竹籠の側面が姿を見せる。

「おおっ！」

「どや！　これで竹籠の周りが簡単に編めるっちゅう寸法なんや！」

「よくわからんが、これはおもしろいぞ！」

少女が自信満々に胸を張って誇る。

次々と編まれていく竹籠に興が乗って来たのか、姉者は楽しそうにさらにぐるぐると回している。

そんな姉者の微笑ましい姿と、姉者の動きのせいで落ちそうになり、必死にしがみ付いている蓮の姿を見て、私は思わず笑みが零れてしまった。

たまにはこんな警邏も悪くはないな。  
というか、かなりいい…。

毎回これでも…。  
いや、しかし…。

私がそんなことを考えていると、突然、脳裏に自分の主の顔が浮かんだ。

そして、その主が言っていた言葉も…。

「秋蘭。もし蓮が外に出ているのを見たら、すぐに部屋に戻しなさい。まったく、あの子は…まだ怪我も治っていないのに……………」

その後も何やら華琳様は言っていたが、今はそれは置いておこう。

これはマズイ。  
非常にマズイ。

なにやら横で爆発が起こって、姉者達が笑っているが……それも今は置いておこう。

今すぐ、城に戻らなければ華琳様が…。  
あのどこか異常なまでに蓮を溺愛している華琳様が…。

鬼になってしまう…。

「秋蘭、見る。蓮が…」

「姉者、すぐに城に戻るぞ！」

「えっ！？ あ、ああ…」

姉者が何か言いかけたが、私はそれを遮った。  
そして少女にお金を払い、籠を一つ買うつと、姉者を連れて城に急いだ。

今はただ急ぐんだ。

鬼が…。

鬼が現れる前に…。

しかし、私の儚い願いはどうやら神には届かなかったらしい。  
急いで戻った城門の前には、我らの敬愛なる主が笑顔で腕を組んで

立っていた。

「華琳様…」

「二人とも御苦労さま」

「はい！ 華琳様、只今戻りました！」

姉者が華琳様にそう答える。

姉者…。華琳様の顔をもっとよく見てくれ…。  
ほら、目が笑っていないぞ。

「さて、なんで蓮まで連れて行っ……ぶっ…」

華琳様がそう言いながら姉者の方を向く。

しかし、突然その言葉を止めて、顔を横に向けてしまった。  
そして、何かを必死に耐えている。

私は不思議に思い、姉者の方をしてみる。  
そしてその瞬間、嘔き出した。

蓮の…。

蓮の頭にすっぽりと未完成の竹籠が挟まっている…。  
これでは猫というより…。

「何？ 蓮は何時の間にか猫から獅子にでも転職していたの？」

華琳様がそう笑いながら言った。

蓮はそれを見て、少し不服そうな顔をした後。

「にゃお」

獅子の真似をし出した。

しかし、そのあまりにも可愛らしい獅子に私も姉者も華琳様もみんなで大笑いしてしまった。

それをまた不服そうな目で見てくる蓮。

蓮が来てからはなんだかみんな笑うことが多くなったみたいだ。

私も姉者も…そして華琳様も…。

私はそのことに少しだけ感謝しながら、蓮の頭を撫でるのだった。

その後。

私は何も言われなかったのですっかり忘れていたが、きつちり蓮は華琳様にお叱りを受けていたところに追記しておこう。

どんまいだ、蓮…。

第十九話　それゆけ！　僕らの春蘭号！　（後書き）

第十九話。終了です！

いかがだったでしょうか？

ちょっとだけ、いつもより長くなっちゃいました。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

## 第二十話 猫耳軍師、現る！

どうも、ゆつくりしていつてね！　でお馴染みの猫こと、蓮です！

前回、春蘭達と街に出て色々を見て回りました。

まあ、少し残念な目にも遭いましたが…。

あの籠は中々外れないし、みんなは笑ってるし…。

うん、災難だった…。

そんなことがありながらも街を見て回るのは非常に楽しかった。

こここの街も建業の街と同じくらい活気があったしね。

これも華琳達が日夜、仕事を頑張っているからなのかなーとか思ってみたり。

まあ、それは良かったんだけど…。

そのせいで華琳さんに大変なお叱りを受けまして……その結果。

「ん？　蓮、どうかしたの？」

何故か、一日のほとんどを華琳の執務室で過ごすことに…。

俺を監視している訳ですね…。そうなんです…。

「そうよ、そうしないと貴方はすぐに動き回るじゃない」

むう。

それは確かにその通りなんだけど…。

ほら、あれはね。動物の本能というか、なんというか。

「本能ね…。普通の動物は怪我をしたら大人しくしているものだけれど?」

まさしく正論を言ってこられる華琳さん。  
どうやら俺に反撃の余地はないようです…。

「…にやあ」

俺はしぶしぶそう返事をする。

というか、仕事の手を休めないで俺と会話するとか…何さ、そのハイスペックっぷりは…。

華琳の能力の高さに俺が内心で舌を巻いていると、華琳は筆の手を止め、俺の方を向いて来る。

「…もう仕方がないわね」

そう言つと、華琳は俺を抱き上げた。

そして、扉の方に歩き出す。

あ、あれ? いずこへ?

というか華琳さん? 仕事はいいの?

「とりあえず、急務なものは片付けたわ。……それに私も少し休憩しないと、仕事の効率も落ちてしまうしね」

俺の疑問に華琳はそう答えると、部屋を出て中庭へと向かう。  
なんだかんだ言つて華琳は優しいなー、などと思いながら、俺は外に出れる喜びでどんどんテンションが上がっていくのだった。

＼SIDE 桂花＼

私が提出する書簡を持って華琳様の執務室を訪ねる。

ああ、今日も華琳様のお顔が拝見出来るなんて…私はなんて幸せなのかしら…。

どこもおかしな所はないわよね？

私は扉の前で身嗜みを整えると、ゆっくりと扉を開けた。

「華琳様。失礼しま……………」

私は笑顔で華琳様のいらっしやる方に声をかける。  
しかし…。

「…………あれ？」

華琳様がいらっしやらない。

いつもならこの時間は仕事をしていらっしやるはず…。  
なのに部屋には華琳様の姿はどこにもなかった。

休憩でもされているのかしら…。

はあ…。

思わず、自分のタイミングの悪さにため息が出た。

別に急ぎの用ではないのだが、肩透かしを食らった気分である。

また後で届けに来よう…。

仕方がないので、書簡を持って華琳様の執務室を出る。

そして、仕事に戻るために自分の部屋へと帰っていると…。

ふと、中庭が目についた。

そして、そこには金色の髪をした愛しの主の後ろ姿が…。

私は途端に笑顔を浮かべると、華琳様に声をかけようとした。

「華琳さ……」

「ふん、そう…。なるほどね…」

しかし、それは華琳様の言葉で遮られる。

誰と話をしているのかしら…。

私はこっそり隠れると、華琳様達の様子を窺った。

そして見た。

愚かにもあの華琳様の膝の上に座り込み、頭を撫でて貰い、嬉しそうにしている白い猫の姿を…。

思わず、書簡を持つ私の手に力が入る。

あいつは最近、侍女達が可愛いと噂している…。

そして、華琳様を誑かせている猫…。

確か名前は…そう…蓮…！

私は最近、よく聞くあの猫の情報を頭に浮かべた。

大怪我を負っていた所を華琳様に助けられた。  
人の言葉を理解できるくらい頭がいい。

器量も愛想も良くて、みんなによく可愛がられている。  
春蘭や秋蘭達に真名も預けられているらしい。  
そして、何より…あの華琳様が溺愛している。

ほら、今だってあんなに楽しそうに…。

私がもう一度、華琳様達の方を見してみる。

「ふふふ。そうなの…春蘭が…」

国宝級と言っても過言ではないような笑顔を、あの猫に向けている  
華琳様とそれににゃーと鳴いて答える駄猫。

ああ…華琳様…。

最近、私との時間は減っているのに…その駄猫とは…。

しかし、華琳様に文句は言えない。

まあ、端から言うつもりは微塵もないけど…。

となると、あの駄猫ね…。

ちよつと可愛いからって調子に乗って…。

確かに噂の通り、真っ白で可愛いらしい猫だ。  
それは認めて上げる。

けど、アンタが笑っていられるのも今のうちよ！  
覚悟してなさい！ このっ、泥棒猫っ！

私がそう胸に深く誓っていると…。

あの泥棒猫がこっちに視線を移した。

そしてにゃ〜、と私を見て鳴く。

そうになると、当然華琳様も私に気づくわけで…。

「あら、桂花。そんな所で何をしているの？」

「い、いえ。華琳様に提出する書簡を…」

こちらを振り返ってきた華琳様にそう言っ書簡を渡す。

咄嗟にうまく言い訳できた自分に拍手を送りたい。

「そう、わざわざありがとう。でもそれなら、すぐに声をかければ良かったんじゃないの？」

「き、休憩中に申し訳ないなと思ひまして…」

渡した書簡に目を通しながら、華琳様がそう言って来る。  
さすがに覗き見ていたとは言えない…。

「もう、そんなに気にしなくてもいいのよ。はい、問題はないわ。  
このまま進めて」

「はい、わかりました」

そう言うと、華琳様は私に書簡を渡してくる。  
仕事の方に問題はなかったようなので、ほっと一息ついた。  
すると、今まで大人しくしていたあの駄猫が華琳様の服の裾を引っ張る。

こらっ！ この駄猫！

華琳様のお召し物に触るな！

ていうか、いつまで膝に乗っているのよ！  
今すぐそこを退いて、私と変わりなさい！

「ん？ ああ、そうね。紹介してあげる。この子は私の軍師をして  
くれている苟？よ」

「にゃん！」

私がそんなことを考えている間に、華琳様が私の紹介をしていた。  
そして、よろしくとでも言うように可愛らしく鳴く駄猫…。  
うっ、ちょっと可愛い。

「桂花。この子は蓮よ。聞いたことはあったかもしれないけど、直  
接会うのは初めてでしょう？」

「は、はい」

駄猫の紹介をしてくれる華琳様に私はなんとか返事をする。  
もしかしたら、声が少し上擦っていたかもしれない…。

「にゃう？」

それをこの猫は感づいたのか。

わたしの方を見て少し頭を傾げ、不思議そうな目で私を見てくる。くるっとした真っ赤で無垢な瞳…。

思わず、この猫を撫でようとして伸びた手を慌てて止める。

騙されてはダメよ、桂花！

こいつは敵。

こいつは敵なのよ！

私がそう自分に言い聞かせていると…。

「もしかして桂花は猫が苦手だったの？」

私の動きを見ておかしいと思ったのであろう。

華琳様がそう聞いてきた。

「えっ！？ いえ、そんなことはありませんけど…」

実際に、猫が嫌いというわけではない。

わけではないのだけど…この猫は…。

「私はもう仕事に戻らないといけないの。だからその間、蓮を見てくれないかしら？」

「は、はい！」

「それじゃあ、お願いするわね」

「って！……あつ！ 華琳様…」

思わず返事をして、しまったと思った時には全部が遅かった。私にそう言い残すと華琳様は仕事に戻ってしまふ。残ったのは空しく響いた私の言葉だけだった。

私がつくりと肩を落としていると…。  
目の前にあの駄猫がやってきた。

「なによ…？」

私は駄猫を睨みながらそう言った。  
しかし、駄猫は何もしないで、ただ首を傾げているだけだった。  
そして、私の横に座ると大きく欠伸をし出す。

「はあ…。何かバカらしくなって来たわ」

私はその姿を見てため息を吐く。  
思えば、私は猫相手に何をやっているのか…。  
猫に嫉妬するとか何か人として終わってる気もするし。

「っ！ にゃう……」

「え！？ ……あつ、ごめん。痛かった？」

ちよつとむしゃくしゃした私は少し乱暴に駄猫を撫でる。  
すると、駄猫は痛みが走ったのであろうか。身体をびくつとさせた

後、弱々しく鳴いた。

さすがに悪いことをした思い、私が謝ると…。

「にゃ、にゃー」

少し、震えた声で駄猫…蓮が鳴く。

大丈夫と言っているのだろうけど、やせ我慢なのは見え見えだった。もう仕方がないわね…。

「もう、大人しくしてなさい…。アンタが早く治らないと華琳様もご心配されるから」

私はそう言つと蓮を自分の膝の上に座らせて、今度は優しく撫でて上げた。

蓮の毛はモフモフしてて、すごく撫で心地がいい。これは癖になってしまつて言っていた侍女達の言つ通りだった。

しばらくの間、私がその毛並みを堪能していると…。

「…………みゆう…」

蓮の寝息が聞こえてきた。

どうやら、何時の間にか眠ってしまったみたいだ…。

「もう…少しだけよ…………」

まだ片付けないといけないもの残っているが、今、蓮を起こすのは忍びない。

華琳様にも任されていることだし、しばらくはこのままにしてあげよう。

そうよ、これはあくまでも華琳様のご命令だからであって、もうちょっと撫でてたいなーなんて少しも思ってたなんていない。

思ってたと言ったら、ないのだ！

そう誰かに言い訳をしながらも私の手が止まることはなかった…。

その夜、とある部屋にて…。

「ひいー！ 全然終わらない…。これも全部あの駄猫のせいよー！  
」

必死に筆を動かしながらそう叫んでる猫耳と。

「くちゅ！」

寝台に寝ながらくしゃみをしている猫の姿があったというのはまた別のお話である。

## 第二十話 猫耳軍師、現る！（後書き）

第二十話。終了です！

いかがだったでしょうか？  
猫耳さんの登場でした。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしております！  
では！

第二十一話。 いっだって、どんなときだって、そう願ってる。(前書き)

シリアスっぽいです。

ご注意を…。

## 第二十一話　いつだって、どんなときだって、そう願ってる。

こんちゃーす。

どうも、華琳に拾われてそろそろ一ヶ月になろうとしている蓮です。

突然ですが、私は前の暇なこととは、また違った別の悩みを抱えています。

実は、もうそろそろ満月なんですよね…。

すっかり忘れてましたけど…。

てか、本当に何も考えていなかったけど、どうしようか…。

さすがに人になれるなんて言えない。

もしかしたら物の怪の類と勘違いされて、最悪殺されかねないしな…。

うーん。

あれって時間が来たらオートで勝手になるものだから、自分じゃコントロールできないし…。

うん、マジでどうしよう…。

俺は自分に与えられた部屋でそんなことを考えている。

いつもなら華琳の部屋にいるんだけど…。

今日は何やらすごく忙しいらしい。

それと同じように春蘭も秋蘭も桂花もみんな、朝から姿を見ていない。

こんな時、侍女さん達が俺を撫でに良く来たりするんだけど、それ

も今日はない。

まあ、みんな忙しいなら仕方ないんだろうけどさ。  
実はちよつと寂しかったり…。

こんな一人でいる時は、少しだけ呉のことが恋しくなってしまう。  
水蓮や雪蓮がバカをやって蓮華や冥琳がそれを見て、頭を抱えながらも説教して、その姿を祭やみんなが笑って見てる。

そんなありふれた日常。

俺の大好きな日々。

どうしてもそんな光景を思い浮かべてしまう。

これが所謂、ホームシックって奴かもしれないな…。

水蓮はあの後どうなったのか？  
一緒にいた祭も無事なのか？

疑問は尽きない。  
不安も尽きない。

俺がいなくなつたからみんなどうしているんだろうか？  
雪蓮も蓮華も小蓮も…泣いているのだろうか？

泣いているんだろうな…。

俺の脳裏に泣きじゃくる三人の顔が浮かんだ。

嫌だ。

そんな光景は嫌だ。

たとえ、想像の中のことだとしても…。

見ていたくない…。

ダメだ。

一人になるとすぐこんなことばかり考えてしまう。

こんな暗いことばかりを考えても何にもならないのに…。

そうだ、外に出よう。

俺は寝台から少し勢いをつけて立ち上がる。

こんな嫌な気分のままでは居たくない。

また華琳に怒られるかもしれないけど……まあ大丈夫だよな？

のろのろと歩いて中庭に出ると、俺は空を見上げた。

今日もいい天気だ。時折、吹いてくるこの風もすごく気持ちがいい。空はどこまでも青く、そしてどこまでも遠くへと続いている。

うん、ここから見る空も中々だ。  
まあ、俺のお気に入り場所には勝てないけど…。

みんなは今どこで何をしているのかな…。  
この空の続く先にいるのかな…。

俺がいなくてもみんなは笑顔でいてくれてるのかな…。  
元気で…いてくれるのかな…。

みんなにはいつだって…。

笑顔でいてほしい。  
元気でいてほしい。

そのためだったら俺はなんでもしてあげる。

笑わせてあげること…。  
元気づけてあげることだって…。  
そう、なんでもしてあげる。

でも、それは傍にいなきや出来ないことで…。  
傍にいない俺には絶対に無理なこと…。

今の俺にできることはただ願うことだけ…。

みんなが笑顔でいることを。

みんなが元気でいることを。  
みんなが…幸せなことを…。

願うだけ…。

ただ、それだけしかできないんだ…。

あはは。結局、みんなのことを考えてるよ…。

気分を変えに来たのに、一体、俺は何をやっているんだろう。  
少し、涙も出ちゃってるし…。

俺がそんな風に嘆いていると…。突然、一陣の強い風が吹いた。  
中庭に植えられた木の葉が風によって大きな音を立てる。

そつ、まるで俺に何か語りかけているみたいに…。

…そうだね。

今は願うことしかできないのなら…。

もつと強く願おう。

みんなの幸せを…もつともつと強く。

だからみんなの所に運んでくれる？  
俺の願いを…。

俺は風に祈った。  
どうかこの願いがみんなに届きますように、と…。

〈SIDE 華琳〉

今日は朝から大忙しだった。  
どうやら最近、この辺に賊が現れたらしい。

すぐさま、私達は軍の編成に兵糧の確保。  
そして賊討伐のために軍議を始めた。

そのために今日は蓮に自分の部屋にいて貰ったのだけれど…。

「居ないわね…」

私ははあ〜とため息をつく。

蓮は一人にすると、こうしてすぐにどこかに行ってしまう。

まあ、大半は遠くには行かず、誰かと一緒にいたりするからすぐに見つかるのだけれど…。

今日は中々見つからない。

…本当にじつとしていない子。

まだ怪我也治っていないというのに…。

それにしても…。

誰かと居る時はじっとしているのに、一人になると途端に動き回るわよね…。

私が蓮の行動について考えていると、突然、ある仮説が頭の中に浮かんだ。

もしかしたら、蓮はじっとしているのが嫌なのではなくて、一人になるのが嫌なのかもしれない。

「…まさか、ね」

まったく何の根拠もない考え。

普段なら一笑に付してしまいそうな考え。

だけど、それは中庭に一人佇む蓮の姿を見て確信へと変わった。

そう、蓮は中庭にいた。

そして青い空の遠くをただぼんやりと眺めている。

何を考えているのかはわからない。

何がその瞳に映しているのかもわからない。

けど私は確かに見た、蓮の瞳から静かに零れ落ちる涙を…。

何を想つての涙なのかはわからない。  
何かを嘆いているのかもしれないし、誰かのことを想つてのことが  
もしれない。

しかし、蓮のその深紅の瞳から零れた涙は…。  
純粋な想いの結晶<sup>かけら</sup>は…。

今まで見たどんな宝石よりも綺麗だと思った。

私はあの子のことを勘違いしていたのかもしれない。  
私はあの子は太陽だと思っていた。

人の心に元氣を与えてくれる。  
みんなに笑顔を与えてくれる。  
そんな暖かな太陽だと思っていた…。

でも違うのね…。  
あの子の本質は月。

静かにすべてを包み込んでくれる。  
暗闇でも誰も迷わないように優しく照らしてくれる。  
けど、どこか儚さを持っている…そんな月。

放って置いたらそのまま消えてしまいそうな蓮の姿。

そんな蓮を見て私は思う。

ああ…。

やっぱりあの子は美しい…。

その瞳に宿る強い意志が。

その身に纏う優しい空気が。

その心が持つ純粋な想いが。

あの子の在り方が美しい…。

どこか気高く、儚い…その在り方が…。

あの子のすべてが美しい…。

そう…。あの子のすべてが…。

欲しい…。

私は純粋にそう思った。

あの子が…蓮が…。

欲しい…。

ずっと私の傍に置いておきたい。

私は心の底からそう思った。

でもそれは叶わないものだと言のどこかで悟ってもいる。

蓮には…帰る場所があるのだから…。  
いつかは帰ってしまうのだから…。

そんなことを思っていると…。突然、強い風が吹いた。

すると、どうだろうか。

さっきまで泣いていた蓮が今度は祈り始めた。

その顔はすごく優しく、どこか愛おしいような顔だった。

私はぎりつと、歯を噛みしめる。

それと同時に私は自分の中に黒い感情が湧き上がって来るのを感じた。

…いいわ。

私は欲しいものは必ず手に入れるの…。

だから蓮…。

貴方を必ず、手に入れて見せる。

そのためなら…私は…。

でも今はそんなことを考えている場合ではないわね。

私は浮かんできた考えをすべて仕舞うと、蓮の下へと歩き出す。

泣いている蓮もいけれど、笑顔の蓮の方がもつといい。

だから今は素直に蓮を愛しましょう。

私が満足するまで…。

すべてはそれから…。

そう。その後からでもいい…。

第二十一話。 いっだって、どんなときだって、そう願ってる。(後書き)

第二十一話。 終了です！

いかがだったでしょうか？

むむむ。 ちょ、華琳さん！？

あれれ…？ おかしいな…どうしてこうなった…？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

ではでは。

閑話。 水蓮道場！（前書き）

30分で書いた駄文です…。  
お目を汚してすみません。

## 閑話　水蓮道場！

水蓮道場はただのへんてこコーナーです。  
少しキャラが変になってるかも…。

なお、本編とは一切関係ありませんのでご注意ください…。

「どうも～！　みんな大好き、水蓮道場。始まるよぉ～！」

「……………」

「ちよつとお～。蓮も何かいいなさいよ～」

「…………いや、なにさ。これ？」

「何って…水蓮道場でしょ？」

「いやいや、それだけじゃわかんないから…」

「え～。ま！　簡単に言うとな。ほら蓮が魏に行っちゃったでしょ？」

「まあ…そうだね」

「それで呉の方の出番なくなっちゃったから、とりあえず救済処置…  
…みたいな？」

「…………正直、いらなくないか？」

「むう。弟子一号！　そう言うことは思っても言わないものよ」

「いや、何故に俺のポジションがそこなのさ…」

「だって。髪が白いし、目も赤いじゃない。ほらその格好も中々似合っているわよ？」

「男にブルマが似合うわけないだろ！　だいたい俺のどこにロリ要素があるんだよ！？」

「まあ細かいことはいいのよ。それでは、さて本題なんだけど…」

「俺の意見は無視！？」

「あゝ！　もう、うるさいわね。そんなことから、華琳ちゃんが少し病んじったのよ…」

「うつ…それは…たぶん気のせいじゃ…」

「今日更新した話を見ればわかるじゃない。どー見ても、あれはダークサイドに落ちてたわよ…」

「……………プイ」

「チエストゥ！」

「痛っ…。おい、こら！　いきなり南海霸王で叩くなよ！」

「現実から目を逸らそうとした罰よ！　それに大丈夫、これギャグだから…」

「そう言う問題じゃないよね!？」

「いいったらいいのよ。それより弟子一号。このままでは貴方はバツトエンドまっしぐらよ!」

「えー？ まさかそのせいでこの企画が…。師しよー、俺はどうすれば…」

「ふふふ、安心なさい。すごく簡単な方法があるわ」

「それは一体…!」

「私の出番を増やせばいいのよ!」

「……………いや、そんなドドンって効果音が付きそうな感じに胸を張られても…」

「私なら華琳ちゃんの魔の手からでも守ってあげられるわよ？ それに私の出番も増えるし…」

「完全に後半が本音だよね…。あーやだやだ。これだから死亡フラグを立てた奴は…まだ完全には消えてないし…」

「チエストオオオオ!…!」

「グエツ! いったあー! し、師しよー、その剣は本当に痛いであります! もっと優しいものにしてくださーい!」

「却下。人が気にしていることをいうようなバカ猫は道場三週!

ほら、きりきり走りなさい！」

「えー、なんで俺が…」

「この水蓮スタンプが欲しくないの？」

「ちえ。わかったよ、走ってきまーす」

「ふう、行ったわね…。さてさて。最近、少し作風変わっちゃったかなと作者がちょっとだけ悩んでたり…。のんびり分も少し足りないような気もするし…。本当、困ったものよね」

「でもまあ、このままでもいっかな。なんて思っちゃってるから、たぶんこのまま行くんでしょ…。初めの感じが好きな人には少し申し訳ないな、と思ってます」

「水蓮ー？　なんか道場の前に竹刀持った女の人がいるよー？」

「竹刀ぶんどって追い返しなさい。後、ここでは師匠と呼ぶよーに…」

「はい。っと、女の人追い返しましたー。なんかパクんなーとか言っていましたけど…」

「それでよろしい。それにこれはパクリではないわ。パロディよ！」

「はあ…そっすか」

「さて。結構長くなっちゃったけど、今回はここまでね」

「え？ 続くのこれ！？」

「物語はまだまだ始まったばかり。これからは乱世へと突入していくわ。その中で猫として生きていく蓮。華琳ちゃんも病んじやつたし、物語はこれからどう進んで行くのか…」

「あれ？ もうまとめに入っちゃった？」

「次回は視点を呉の方に一旦、移るわ。苦悩しているあの子達に蓮の願いは届くのかしら？」

「……もういい。もう何も言わない」

「というわけで今回の水蓮道場はここまで！ また本編でお会いしましょうね」

「……………」

「もう、蓮。すねないの」

「だって…」

「ほら元気出して。最後くらいは一緒に言っわよ？」

「…うん」

「「それじゃあ、また見てね」」

「あつ、あとユニークが10万人を超えたわ。みんなありがとう」

「どう考えてもメインはそれだよね!？」

閑話。 水蓮道場！（後書き）

というわけで、ユニーク10万人記念でした！

とりあえずやった方がいいのかなーと思ってやったんですけど…。

ただもう二度とやらないかな…。

会話文だけとか難しすぎるし…。

まあ。そんなわけですが、これから『我が家のお猫様！』を読んでいたけると嬉しいです！  
では。

第二十二話。 また会えると信じて…。

〈SIDE雪蓮〉

戦いの後、母様は倒れた。  
そして、今でも母様は床に臥せっている。  
医師の話だと、心の臓が悪いらしい。  
もう王の激務には耐えられないそうだ…。

私達と劉表軍と戦いは結果的には勝利した。  
だけど、それで得たものは何もない…。

代わりに私達はたくさんのものを失った。

先祖縁の土地を…。  
呉に住む民達を…。

私達の誇りを…。

私達の平穩を…。

そう、全部失った…。

いや、正確には違う…。

……すべて奪われた。

「……というわけで、孫策さんには賊の討伐に行つて貰いたいんですよ」

「うむ。妾のためにも早く行つてくるのじゃ！」

「……………」

私は謁見の間で、私達からすべてを奪った相手…袁術の目の前にいる。

正直、今にも翩り殺してやりたくて、殺気が滲み出そうになるのを必死に我慢している状態だ。

「こらー！ 孫策！ 何とか言つたらどうなのじゃ！」

「あの、孫策さん？ ちゃんと聞いてるんですか？」

黙っている私が気に入らなかったのか。

袁術が声を張り上げてくる。

袁術の声を聞く度に腹の底から沸々と怒りが湧いてくる。

その横にいる張勳のどこか伸びのある声もそれに拍車をかけた。

「……わかったわ。行けばいいんでしょ、行けば……」

それでも今の私は袁術の客将なのだ。

命令は聞かなければならない……。

「そうじゃ！ 初めからそう言えば良いのじゃ！」

「それではよろしくお願いしますね」

「…了解」

形だけの礼をして謁見の間から出る。

そして、長い廊下を抜けた後……。

「くそっ！」

私は近くにあつた壁を殴りつけた。

固く握った拳から血が出てくるが気にしない。

もう限界だった……。

物に八つ当たりしても何もならないことはわかっている。

けど、我慢出来なかった。

惨めだった…。

あんな子供に扱き使われなければいけないことが…。

悔しかった…。

自分にみんなを纏める…惹きつける力が足りなかったことが…。

私は弱い。

どんどん離れていく家臣達を引き留めることが…。

呉が壊れていくのを止めることが出来なかった。

そして、結局はこの様…。

本当、呆れてものが言えない。

ねえ、蓮。

私はどうしたらいいのかな…。

もうわかんなくなっちゃった…。

「あつ…。あはは…」

私はそう考えて、思わず笑ってしまった。

もう蓮はいない…。

いないのに、私はすぐにこうやって頼ろうとしている。

…縋ろうとしている。

本当に私は弱いわね…。  
こんなんじゃない…。

ダメだってわかっているのに…。

私はぼんやりと空を見上げた。  
真っ青に晴れ渡った空に綿のように浮かぶ白い雲。

そう言えば、蓮は空が好きだったわね…。

いつも時間がある時に蓮はお気に入り場所で空を眺めてた。  
私や蓮華も何度か一緒に眺めたこともあったっけ…。

私は懐かしい日々のことを思い出す。

あの時はすごく綺麗に見えたけど、今は余り綺麗に見えないわね…。

でもそれは何も空に限ったものじゃない。

海も…河も…山も…そして月だって…。

全部、蓮がいなくなってからはどこか違って見える。  
世界のすべてが輝きを失ったように…色褪せて見える…。

それは蓮華やみんなも同じみたいで…。  
みんなから笑い声が…笑顔が消えた。

もう少ししたら、みんなバラバラになってしまうのに私はただそれ  
を見ているだけ…。

何て声をかけていいのかもわからない。

蓮がいなくなつて初めて気がついた。

私達はこんなにも蓮に支えて貰っていたということを…。

昔から傍にいたから気がつかなかった。

私達はこんなにも蓮から笑顔を買っていたということを…。

最近、私はよく昔の夢を見る。

私や蓮華にシャオと母様と蓮。

家族みんなで楽しそうに遊んでる夢。

でも、楽しい時間はあつという間に過ぎちゃって…。

そして夕方になると、突然、蓮が走り出す。

蓮は一度もこっちを振り返らないで、ただただ遠くへと走っていつ  
てしまう。

私も必死に追いかけるんだけど、どうしても追い付かなくて…。

なら行かせないようにって、走り出す前に必死に手で掴もうとする  
んだけど…。

まるで空気みたいにすり抜けちゃって何も掴めない。

そのまま時間になって…結局、蓮は走りだして、いなくなっちゃう。  
そんな夢…。

そして目を開けると、もう朝になってて…。  
私に残ったものはすごい喪失感だけで…。

最近はそんな夢ばかりを見てしまう。  
我ながら女々しいとも思っけど、見てしまう。

ねえ、蓮…。

昔、蓮は言ってくれたわよね？

ずっと傍にいてくれるって…。  
話を聞いてくれるって…。

私はあの時、すごく嬉しかったのよ？  
王になるのは大変なことだけれど……頑張ろうって思えたのよ？

ねえ、なんで…？

なんで傍にいてくれないの？

私の傍にずっといてくれるんじゃないの…？

ねえ、答えてよ……蓮…。

私は空に向かってたくさんの疑問を投げ掛けた。

答えが帰って来るはずなんて、あるわけないのに…。

何度も…そう何度も…。

どのくらい時間が経ったのだろうか。

気がつくと、空が少し赤くなってきた。

どうやらかなり長い時間、ここに居たみたいだ。

「早く帰らないとまた冥琳が心配するわね」

私はそう言つと、帰るために歩き始めた。

けど、それはすぐに止められることになる。

それは一陣の風だった。

少しだけ強い…けどどこか暖かい風。

「…………蓮？」

気がつけば、私はそう呟いていた。

蓮だ…。

今、蓮の声が聞こえた…。

もちろん近くに蓮が現れたわけじゃない。  
でも私は確かに聞こえた……感じた…。

蓮の声を…。

蓮の暖かさを…。

あの風の中で感じた。

蓮が…。

蓮が生きてる。

私の勘も蓮が生きてるって教えてくれている。  
何より、さっきのは間違いなく蓮だった。  
絶対に間違えるわけがない…。

蓮は生きてる…。

今もどこかで…私達のことを想ってくれているっ！

私のすべてが歓喜している。

身体中が震え、ぼろぼろと涙も出てくる。

良かった。

本当に良かった…。

生きているのなら、きっとまた会える。

いつか、きっと…。

けど、それなら泣いている場合じゃないわよね…。

心のどこかに残っていた冷静な部分で私はそう考えた。

私は湧き出て来る涙を拭う。

そして、頬を一度大きく叩いた。

蓮が生きているのなら、蓮の帰って来る場所を取り戻さなきゃ…。

いつまでもこんな所で腑抜けている場合じゃない。

きっとまた会えるから…。

私は私のすべきことを…。

〈SIDE冥琳〉

袁術の所に行った雪蓮の帰りが遅い…。

私はそれをずっと待っていると、雪蓮は夕方になって戻ってきた。

私は文句を言おうと思ったが、雪蓮の顔を見て、すぐにそれを止めた。

最近、どこか陰りのあった雪蓮の顔ではない。

以前の…いや、それ以上に今の雪蓮は覇気に満ちている。

何があったのかはわからないが…。

これなら…今の雪蓮ならきつと出来る。

失くしてしまった呉をきつと取り戻せる。

そう思い、私は内心で喜んだ。

まあ、外には出さないように何とか必死に耐えたが…。

「冥琳、た…だいま」

「ああ、雪蓮。おかえり。遅かったな…」

「ごめ〜ん。ちよつと寄り道を、ね？」

「ふん。少し、待たせ過ぎだぞ」

私達はそう言うのと、二人して笑いあう。

そして少しの間、そうしていると、雪蓮が口を開いた。  
その目を真剣なものへと変えて…。

「…冥琳。私はすべてを取り戻すわ…。だから、私に…」

「言わなくてもわかつている。元より、私の知はお前と孫呉のためにあるのだから」

雪蓮の言葉を遮って私はそう言った。

今更、力を貸してくれなんて言葉は必要ない。

だからお前は王らしく堂々としていればいいんだ、そんな想いを込めて…。

「そつか…。それじゃあ冥琳。頼りにしているからね？」

「ああ。私も頼りにしているからな。雪蓮？」

「ふふふ。まっかせなさい」

私の言葉にそう返してくる雪蓮。

そういえば、こんなやり取りも久しぶりだな…。  
さて。やる気のある雪蓮に早速仕事を与えるか…。

「それでは、まずお前が片付けていない書簡からだな。頑張れよ？」

そう言うのと、私は雪蓮の前に大量の書簡を見せた。  
積み重なった書簡は山のようになっている。

「え！？ これ、全部…？」

「そう、全部だ」

私がそう言つと、雪蓮は汗をだらだら掻き始め、少しずつ後ろに下がっていく。  
逃げる気だな…。

「……ま、まあ、明日から頑張るってことで…」

そう言つて逃げようとした雪蓮の腕を掴む。

ふふふ。逃がすわけがないだろう？

お前がしないと私がすることになるのだからな…。

「い・ま・か・ら・だ！」

「ふえーん！ 冥琳のいけず〜」

私はそんな雪蓮の声を聞きながら思った。

これからきつと呉を取り戻して見せる。  
それがどんなに困難な道であつても…。

雪蓮と…皆と一緒になら、必ず出来る。

やって見せる。

なあ、そうだろう？  
雪蓮…。

第二十二話。 また会えると信じて…。 (後書き)

第二十二話。 終了です！

いかがだったでしょうか？

呉からの視点でお送りしました。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしております！  
では。

第二十三話 シュガー&スパイス シュガー編（前書き）

更新が遅くなって大変すみません！

一週間ほど原付で行く、ぶらり二人旅をしました。

尻が非常に痛いです…。

ああ。来週から学校なのに…。

まあ、そんなこんなで第二十三話です。

どうぞ！

## 第二十三話 シュガー&スパイス シュガー編

〈SIDE華琳〉

「……以上のことから、孫堅……いえ、その娘の孫策は袁術の下で客将をしているようです」

「……そう。ありがとう」

私は秋蘭の報告を聞いて考え込む。

蓮の飼い主は江東の虎とも言われていた、あの孫堅だった。まあ、今は床に臥せているみたいだけど……。

「孫策……。英雄の娘にしては大したことないのかしらね……」

「……詳しいことはまだわかりませんが、臣下たちを纏める力はなかったものと思われます」

「………そう」

私がふと漏らした言葉に秋蘭が答える。

孫策……。いずれ私の覇道の前に立つ障害にはならないのかしら……。なら尚更、蓮を返したくないわね……。

「それで、蓮のことは……？」

「……どうやら敵兵の攻撃から孫堅を庇ったようです。元々は孫家の

守り神とも呼ばれていたようですし……」

「なるほど、ね」

守り神、か。

猫には大層な名だけれど、あの子がそう呼ばれていても何も不思議には感じなかった。

寧ろやっぱり、とも思ってしまう。

「あの、華琳様。その蓮には……」

秋蘭が少し心配そうな顔をして私に聞いてきた。  
彼女は言っているのだろう。

蓮に今の孫策達の状況を話すのか、と。

「……今はまだ止めて置きましょう。あの子のことだから話を聞けば、そのまま飛び出して行ってしまうそうだわ」

「はい……。わかりました」

秋蘭も同じ意見だったのだろう。  
私がそう言つと、大きく頷いた。

あの蓮のことだから、あの身体でも無理をして孫策の下に帰つてしまつたろう。

私達にも懐いてはいるが、やはりまだあちらには勝てない。

そのことを少し悔しく思っていると、ふと頭にある考えが浮かんだ。

足の腱を切つてしまえば、自分では帰れないんじゃないかしら……。

いや、それはダメね。

そんなことをすれば、あの子は私を嫌うでしょう。  
それは私の本意ではないわ。

となると、やはり一度返してから奪い取るのが一番か…。  
その時に孫策が英雄になっていれば、尚の事おもしろい。  
私の覇道に綺麗な華を咲かせてくれるだろう。  
まあ報告を聞いた限りでは望み薄だけれども…。

私がそんなことを考えていると、ガチャリと扉が開き、小さな来客が現れた。

その来客……蓮は、すぐさま私の下にやって来て、膝の上に飛び乗ってくる。

これはかなり珍しいことだった。

蓮が自分から甘えてくることは余りない。

秋蘭にはよくして来るらしいが、少なくとも私は蓮が自分から膝に乗って来ることは初めてだった。

「あら、蓮。どうかしたの？」

「にゃん」

そのことをほんの少しだけ嬉しく思いながら私がそう聞くと、蓮が答えてくる。

ちよつとだけ匿って、と。

その言葉に少しだけ疑問を感じていると…。

「蓮――！！ どこだ！ どこにいる――！！」

外から春蘭の大きな声が聞こえてきた。  
なにやら怒っているような声色だ。  
その声はどんどんこちらに近づいてくる。

そして蓮が身体を小さく丸めた時。

「失礼します！ 華琳様！ 蓮の奴めはここに来ませんでしたか！  
？」

怒りの表情をした春蘭が入ってきた。  
そして私に蓮の行方を聞いてくる。

私はちらりと自分の膝に目を向けた。  
机があるので春蘭からは見えないが、勿論、そこには蓮がいた。  
その蓮はこっちに懇願の眼差しで見えてくる。

はぁと内心でため息をつくと私は口を開いた。

「……蓮はここには来てないわよ。それよりも春蘭、少しは静かに  
しなさい。今、秋蘭と大事な話をしているの……」

「……すまない、姉者。今は報告中だ……」

「えっ！？ あ、すみませんでした。華琳様！ それでは私はすぐに  
退散します！」

そう言う春蘭はそそくさと部屋を出ていった。

もう報告は終わっていたのだから少し可哀想なことをしたわね…。  
秋蘭にも話を合わせさせてしまったし…。

それにしても…。

私はそう考え、ほっと息を吐いている蓮をじろりと見る。

「…蓮。姉者にまた何かしたのか？」

「蓮。正直に言いなさい。許すかどうかはそれで決めるわ」

「にゃ、にゃん！」

私と秋蘭で蓮を問い詰めると、蓮が少し慌てて口を開いた。

なんでも春蘭が楽しみにしていた桃まんを食べてしまったらしい。  
しかも期間限定品で今日までしか作っていない代物だったとか。  
それで一応は謝ったけど、許してくれなくて追い掛けられた、と。

「「はあ」「」

私と秋蘭は同時にため息を吐いた。

なんとくだらない理由なのか。

まあ春蘭らしいけれども…。

というか正直、猫が桃まんを食べるなとも言いたい…。

「にゃう」

あゝ、そうなの。

餡子が好きなのね…。

意外な好物を聞いたわ。

「好きなのはわかったが…。蓮、口に餡子が付いているぞ」

秋蘭がそう言うのと蓮の口を布で優しく拭き取った。

確かに良く見てみると白い餡子が付いていたみたいだ。

しかし私にはそのことよりも気になったことがある。

「……秋蘭も蓮の言葉がわかるの？」

「はい。以前はなんとなくでしたが、最近は割とはつきりと…」

「…そう」

知らぬ間に秋蘭が蓮語を理解したようだ。

決して猫語とは言わない。他の猫の言葉は私にも全然わからないものの…。

まあ、それは一旦置いておきましょう。

「それでどうするの？」

「姉者はあの様子だと簡単には許してくれないぞ？」

「にやう…」

私と秋蘭がそう言うのと、耳をへたりと下げて落ち込む蓮。そしてうるうるとした目を私達に向けてくる。

くっ！ これは反則的に可愛いわね…。

しかも何故か力を貸してあげないといけないような気にもなってしまうし…。

私がそう思っていると、隣の秋蘭も何かに耐えているような顔をしていた。

どうやら秋蘭もなにやらダメージを受けたみたいだ。

仕方がないわね…。

もしかしたら、私は少し…いやかなり蓮に甘いのかもしれない。

そう思いながら私は蓮に聞いてみる。

「そう言えば、今から街の視察に行くのだけど、貴方も着いてくる？」

「にゃん？」

蓮はまだ少しうるんだその目を私に向けながら、こてんと頭を傾げる。

その戦闘力は53万を超えていたと私は後世に伝えよう…。

「今日限定のものなのだろう？ 姉者は今から兵の鍛錬で行けなが、私と華琳様は街に出る。その時にその桃まんを買えばいいだろう」

私は何やら訳のわからないことを考えている間に、秋蘭がまだよくわかっていない蓮に話をする。

…本当に秋蘭は頼りになるわね。完璧といってもいいくらいだわ。鼻からその赤いものさえ出していなかったのならね…。

「にゃん！」

話を理解した蓮は今度は眩しいくらいに嬉しそうな顔をして頷いた。まあ、もう仕事は片付いたのだから少しくらいはいいわよね…。

私はそんなことを考えながら、私たちを急かす蓮を連れて街へと向かうのだった。

〈SIDE 秋蘭〉

私達は街の視察に出るという名目で桃まんを買いに来た。

まあ、今日の仕事はもう片付いていたし問題はなにもない。

ただ、華琳様は蓮には本当に甘いんだなと思って少し笑ってしまったが…。

さて、今の問題はそこではない。

前は姉者の頭の上に乗っていた蓮だったが、今回は少しだけ違った。

「蓮…。降りる気はないの？」

「にゃーん」

そう、今回の蓮は華琳様の肩に乗っているのだ。

華琳様と肩乗り蓮…。

くっ！ これもなかなかの破壊力だ！

しかし、本当に危なかった。

もし前みたいに頭の上に乗っていたら…。

私は華琳様に醜態を見せてしまうところだっただろう。

「…そう。まあ、そこが良いというのなら別にいいけれど……」

居心地がいいから降りる気はないよ、という蓮に華琳様はどうでもいいようにそう答える。

しかし、私は見逃さなかった。

一瞬だけ華琳様が嬉しそうな顔をしたことを…。

蓮もそれに気付いたのか華琳様の顔に頼ずりをしている。

それを華琳様は少し照れながら受け入れていた。

いかん、鼻から熱い情熱が…！

私は慌てて鼻を押さえた。そして呟く。

「もう噴き出しているじゃないか…」

目的の桃まんを買った後、私達は服屋に寄った。

まあどちらかといえば布地を主に売っている店だ。

なんでも蓮に着せる服を華琳様が自らの手で作るらしい。

今も楽しそうに布地を蓮に合わせながら、考え込んでいる。

その姿は城では中々見れないものだ。

蓮は余り乗り気ではなさそうだが、今度着せ替え人形になるのは確定している。

蓮…。頑張るんだな…。

「にいう…」

ほらほら、そんな風に落ち込むな。

私も少し楽しみにしているんだから…。

「にゃん！」

私がそう笑いながら言うつと蓮は恨めしそうにそう言った。

ぶるーたす、お前もか！　ってぶるーたすって何なんだ？

そんなこんなで楽しく視察をしていると、人が集まっている所があった。

その中央で何やら騒がしくしている男もいる。

「曹操だ！　曹操を呼べっ！」

その男の必死そうな言葉を聞いて私は思った。

今日のこの楽しい時間はもう終わってしまっんだな、と…。



第二十三話 シュガー&スパイス シュガー編 (後書き)

第二十三話。終了です！

いかがだったでしょうか？

本当に更新遅れてすみません。

感想返しも今から急いでしますね〜！

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

ではでは。

## 第二十四話 シュガー&スパイス スパイス編

前回のあらすじはこうだ…！

こちらで悪さをしている鬼の筆頭…桂花の罠に嵌められた俺は魏の忠犬こと…春蘭と戦うことに…。

あいつの怒りを鎮めるためには伝説のキーアイテム…限定桃まんを手に入れなければならない。

しかし、この身はまだ万全ではなく、街まで一人で行くことは不可能だった…。

そんな時、俺の前に現れた二つの影…。

二人は絶望に打ちひしがれている俺に救いの手を差し伸べてくる！

おおっ！ 猿と雉ではないか…。って、ぐはあ！

ちよっ、いきなり殴らないでも…。あっ、すみません…。猿とか言  
つてすみません…。

ま、まあとにかくこうして新たな仲間を手に入れた俺は、華琳様と  
雉の秋蘭をお供に街へと向かうのだった。

待っているよ！ 桂花<sup>おに</sup>め！ 八チ公<sup>しゅんらん</sup>を仲間にしたらすぐに退治に向  
かってやるからな…！

そんな気合いを入れていた俺達の前に、新たな男の影が…！  
果たして奴は敵なのか…味方なのか…。

答えは風だけが、知っている…。

それではまた次回をお楽しみに！

俺はお猫道突っ走るぜ！！

……っで感じてどうか…？

「…いや、もうなんか突っ込むのが面倒だ」

俺がうまく現状を教えようとしたが、どうやら秋蘭はお気に召さな  
いらしい…。

むう。我ながら、中々うまく出来たと思うんだけどなあ。

桃まんと桃太郎をかけてるとことか…。

次回は熱い展開が待ってるよ、的なことか…。

「そもそも、桃太郎というのがよくわからないんだが…。あと現実  
逃避は良くないぞ、蓮」

ちえ、いいじゃん、少しくらいさ…。

それで華琳、あれはどうするの？

俺は目線で華琳にそう聞いた。

今も、男は華琳を呼んでいる。

その手に持つ刃物を小さな女の子に向けながら…。

「私を御指名なのでしょう。なら行くしかないわね」

「しかし、華琳様……。もしも、ということもあります……」

「その時はその時よ。私は逃げも隠れもしないわ」

秋蘭が一応止めようとしたが、華琳がそれを聞くはずもない。まあ、秋蘭もわかっていたみたいだけど……。

それにしても、あの男は何がしたいんだろうね。身なりからすれば、賊なんだろうけど……。

それにしても焦った様子がないし、要求も華琳を呼べと言うものだけ……。

って、ああ、簡単だ……。

ようするにあいつは……。

「私に恨みでもあるんでしょうね……。私は覚えていないけれど……」

華琳が俺の言葉を引き継ぐようにそう言う。

その顔はいつもと変わらない凛々しいものだったが、どこか影があるように俺は見えた。

恨まれるのには慣れているとでもいうような……。疲れたような……。諦めたような……。そんな顔に見えた。

「まあいいわ。早速、行くとしましょうか」

華琳は俺を秋蘭に手渡すと、男の下へと歩き出す。  
俺は秋蘭の手に抱かれながら、その背をただ見つめるのだった…。

華琳が人込みに近づくと、さつと道が開いた。

そこをゆつくりとした足取りで歩き、華琳は男と対面する。  
そして少しの間、男を見つめると口を開く。

「呼んでいたようだったけれど、私に何か用かしら？」

「っ！　へっ、早々に本人のご登場かよ！」

男は一瞬だけ、いきなり現れた華琳に驚いたような顔をしたが…。  
すぐに鋭い目付きになると、華琳にそう言った。

「あら、私の顔は知っているのね？」

「ああ、知ってるさ。忘れたこともない…」

男の苦々しいというより、強い恨みの籠った声や目を向けられても  
華琳は涼しい顔をしている。

それが余計に男をイラつかせているようにも見えた。

「忘れるわけがない…。前にお頭や仲間をみんな……殺した、お前の顔はなっ！」

「…そう。それでこんなことを始めた、というわけね」

納得、といった感じで華琳は頷く。

なるほどね、と俺も思った。そういうことなら華琳のことを恨むだろうな…。

とはいえ、賊の討伐はお仕事だから仕方ないんだけど…。

「そうだ！ 俺はお頭に拾って貰わなったら死んでたんだ…！ 親も助けてくれる者なく、頼れる者もない…。食うものもなければ、住む所もない…。そんな俺にお頭は…飯をくれた、住む所をくれた。…暖かさをくれた！」

「……………」

華琳は男の主張を黙って聞いていた。

男の話は今の世ではよくあることだった。

悲しいことに今は、食えることに困った人たちが賊になることだって珍しいことではないのだから…。

「俺以外の奴らもみんなそうだった…。俺にやっと…やっとできた…家族だったのに…！」

男はその目から涙を零しながら、華琳を今まで以上の目付きで睨みつけた。

しかし、華琳はまったく動じない。

ただ男を静かに見つめているだけだった。

「それを…全部…全部お前が奪って行っただんだ！」

俺は男が手に持つ剣に力を入れたのを感じた。

秋蘭もそれに気付いたのか。  
俺を下に置き、剣に手をかける。

「だから、俺は…お頭の…みんなの仇を討つ！」

男はそう叫び、人質の女の子を手で押しやると…。  
そのまま華琳へと突撃してくる。

「っ！ 華琳様！？」

それに合わせて秋蘭が華琳の前に出ようとするが、他ならぬ華琳に  
手でそれを止められた。

……どうやら華琳が自分の手でケリを付けるらしい。

「うおおおおお！！」

「…いいでしょう。その思いも…その業も…私がすべて背負うわ」

気合いを入れて剣を振るってくる男に華琳はそう言うと、自らの剣  
を抜く。

その時の顔はまさしく王というのに相応しいものだった。

「…だから、安心して逝きなさい…」

男を斬る瞬間。

華琳がそう小さく呟いたのを確かに俺は聞いた。  
そして、表情を少し歪めたのも見てしまった。

しかし、それはほんの一瞬だったので他には誰も気がつかなかっただろう……。

「……秋蘭。後の事をお願い」

「はい、華琳様」

華琳は剣についた血を払うと、秋蘭にいつもの表情でそう言った。さっきの面影はどこにも感じられない。

秋蘭はその言葉に頷くと、駆けつけて来ていた兵に指示を出し始める。

「……蓮。戻るわよ」

「にゃ」

華琳は倒れている男を一瞥すると、俺に声をかけてきた。俺はそれに返事をして華琳の肩に飛び乗り、その場を後にする。

城までの道のりの中で俺は考え込んでいた。

勿論、内容はあの男のこと……ではなく、華琳のことだ。

俺はやっぱりこの子のことが心配だ。

その気持ちは今日の事でより一層、強くなった。

華琳は強い。

きっと普通の人よりは絶対に強い。  
力もそうだけど、何によりも心が強い。

でも、ただそれだけだ…。

普通の人より、少しだけ賢くて、少しだけ強い…ただそれだけだと俺は思うんだ。

人はそれを特別だって言うんだろうけど、それでも限界というものがある。

これが本当の悪人なら別にいい。

自分の好き勝手なことをすればいいのだから…。

でも華琳は違う。

この子は善人だ…そして、何より優しい。

だから、何でも自分だけで背負おうとする。

別に背負う必要のないものまで背負おうとしてしまう。

俺は自分の乗る華琳の肩を見る。

俺が乗るだけで隠れてしまつような、こんな小さな肩にどれだけのものが乗っているのか…。

人々の希望や期待、恨み、嫉み…たぶん色んなものが押し掛かっている。

それは簡単に捨てられるものではないし、華琳も捨てる気はないだろう。

…彼女には必要なんだと思う。  
彼女を本当の意味で支えてくれるものが…。

前に華琳が、私は霸道を行くと、そう俺に言っていた。  
霸道は茨の道だ。他者を下して一番上に立つ……そんな孤独な道だ。

だからこそ彼女には必要なんだ。

春蘭や秋蘭、桂花でもダメなんだ。

あの子たちはどうしても主と家臣になっってしまうから…。

下からじゃなくて…後ろからじゃなくて…。

隣に…傍に…ずっといてくれるものが必要だと俺は思っんだ。

本当は俺がその役目をできれば何も問題はないのだろうけど…。  
残念ながらそれは出来ない。

俺にはもう支えてあげないといけない人たちがいるのだから…。  
呉のみんな  
大切な人たちがいるのだから…。

気がつけば、もう空は真っ赤に染まっていた。  
俺はその空を見上げて心から願う。

願わくば華琳の全部を支えてくれる人が現れますように…。

そんなことを思っていたからか、俺はすっかり忘れてしまっていた。  
今日が何の日なのかということ…。

どうやら対面までの残り時間は、もう少ないらしい……。

第二十四話 シュガー&スパイス スパイス編 (後書き)

第二十四話。終了です！

いかがだったでしょうか？

少し長くなりそうだったのでここでキリました。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！  
では。

第二十五話。 気持ち。(前書き)

難産だったぜい…。

くそ…。やっぱり小説って難しい…。

まあ、書くのは楽しいんですけどね！

では本編です！

どうぞ！

## 第二十五話。 気持ち。

困った…。

マジで困った…。

ど、どうすればいいんだああー！！

辺りが暗くなった頃。

俺は部屋の中で一人、絶叫していた。

勿論、外から見たらにやーとしか聞こえないんだろうけどね。

いやしかし、本当に困った…。

朝からなんだかんだでバタバタしてて、頭の中から綺麗さっぱりと消えていた衝撃の事実。

そう、あれだよ…。

今日は満月の日だったんだよ…！

さっき何気なく外を見るまで気がつかないとか、本当に俺は何をやってるんだか…。

まだ刻限までは少し時間があるとはいえ、これはいかん。  
いかなですよおおお！

幸いもう夕食は食べたし、春蘭には桃まんも贈呈して許して貰ったし…。

誰も部屋に来なければ、問題はないんだけど…。

そう上手くいくとは思わない。

希望的観測はしない方がいいと俺の第六感が叫んでるし…。

とはいえ、外をうろつくのはどう考えても危険だ。

この国の奴らはどうも男嫌いな気があるらしいしな…。

特に桂花とか桂花とか桂花とか…。

うん。見つかったら確実に死亡フラグー直線だ…。

まあ、でもここまでお世話になっているのに騙すのもな…。

申し訳ないというか、なんというか。

そんな気も少しはするわけで…。

でも騒がれるのはもっと困るわけで…。

はあゝ。マジでどうするよ？

俺がそんなことをぐだぐだと考えていると、扉の前に人の気配がするのに気がついた。

やばっ！ 時間もうあんましないのに…！

「…蓮。いるの？」

俺の気持ちを余所に、そんな声と共に華琳が部屋へと入ってきた…。そして、無言のまま俺を膝の上に乗せる。

「？」

突然の襲来に慌てた俺だったが、それはすぐに収まった。

どうも、華琳の様子がいつもと違うのだ。

いつものどこか威厳のある空気は鳴りを潜めて、今は何も感じられない。

いや、寧ろ弱々しい感じた。

身体の具合でも悪いのかと一瞬思ったが、今日一日、そんな様子はなかったよなと考え直す。

となると気持ちの問題か……。

「にゃん？」

とりあえず、どうかしたのかと俺は聞いてみる。

まあ、十中八九、街であつたことが原因なんだろうけど……。

華琳は何も言わずに俺を撫でているだけだったが、少しの時が経つと徐に口を開いた。

「……蓮。私は間違つたことをしているのかしら……」

その声はとても小さいものだった。

囁くように紡がれたその言葉は、今にも途切れてしまいそうで……。そこに今の華琳の気持ちが籠っているように感じた。

「……………」

でも俺は何も言わなかった。

ただ黙って華琳の言葉を聞いていく。

華琳はそれでも構わないのか、さらに言葉を続けていった。

「……頭ではわかってるわ。納得も……しているつもり……。すべて

の人を救うことなんて出来ないってことは……。みんなで仲良くなんて出来ないってことは……」

たぶん、華琳の頭には昼間の男のことが浮かんでいるのかな。いや、もしかしたら今まで討ってきた賊達のことを浮かんでいるのかもしれない。

「民達の暮らしを乱す賊は討たなくてはならない……。だけど、元は彼らだって救うべき民だった。……皮肉なものよね。彼らは自らの手で、自らと同じ境遇の人を増やしていくのだから……」

勿論、それだけではないのかもしれない。

人を殺すのが好きだっていう、腐った奴らだって中にはいるだろう。でもそんな奴は少数だ。

他の人の大半は、生きるために仕方なかったんだと思う。

さつき華琳の言った通り、すべての人を救うことは出来ない……。

辛いことだけど、それが現実なんだ……。

……でも華琳は本当は救いたかったんだね。討ちたくなかってなかったんだよね。

「そうして始まる負の連鎖……。奪われた人は今度は別の人から奪う。そしてその人もまた別の……。そんな繰り返しばかりが起こつて、結局はどんどんそんな人達が増えていく……。でもその大本は何？ 一番悪いのは一体何なの？」

でもその負の連鎖を止めるためには、討たなくちゃいけなかった……。仕方ないなんて言わないけど、それしか方法がなかったんだ。どこかで止めないと、もっと大きくなってしまっから……。

華琳の独白はさらに続いていく。  
声にも少し熱が入って来ているみたいだ。

「一番悪いのは、人々が賊にならないと生きていけないようにしてしまっただけ……この国でしょう！ 民から税を奪うだけ奪っておいて、救いを求めても助けようとしめない。本当に腐ってる国……。私はこの国が嫌い……大っ嫌いなのだ！」

華琳はそう言った。

それは日頃の華琳なら思っただけでも絶対に言わないことだろう。この国に仕えているものが完全にこの国を批判したのだから……。でも、きつとこれが華琳の原動力というか、根本にあるものなんだと思った。

「力のある者がその力を十分に発揮できるだけの環境を作る、それだけでももつといい国に変わるはず……。それなのに、自分達の利益ばかりを求めた偉い奴らはそうしようとしなかった。だから決めた……。私は覇道を歩む……。他人の血で真っ赤に染まった、この道を歩いて行くと……！」

もしかしたら、初めは華琳も中から変えようと思ったのかもしれない。でも、それは無理だとわかってしまったんだ。

そこまでこの国が末期だったんだろう。

こんな歳の女の子が覇道を歩むと決めてしまうような現実。そして、実際に華琳にはその道を歩いていく力があつた。それはいいことなのか、悪いことなのか……。  
但至少なくとも俺にはそれがすごく悲しいものだと感じた。

「……私は王になるの。そして新しい国を作る……！　もつと……もつと……いい国を……！」

華琳は力を込めてそう言うと、撫でていた手を止めた。  
そして、今度は俺を強く抱きしめてくる。

「でもね……。どうしても思ってしまうわ。今、私にもっと力があつたのなら……。皇帝だったのなら……。そうだったのなら……。今を苦しんでいる人達を切り捨てなくてもいいのにつ！　救ってあげられなかったかもしれないのにつ！」

これが華琳の誰にも見せられない姿だ。  
今は華琳は王じゃない、上司じゃない。  
ただただ自分の力不足を嘆く、普通の一人の女の子だ。

「ごめんなさい……。助けてあげられなくて……。……ごめんなさい……」

謝り続ける華琳。

その瞳からは少し涙も零れているようで、俺の毛を少しずつ濡らしていく。

これは俺がしていいことじゃないのかもしれない。  
いや、多分ダメだろう。

昼間にも考えたけど、俺はいずれここからいなくなるんだから……。

でも、それでも……。

少しの間だけ、誰かが現れるまでの代わりをしてあげてもいいよね

…？

そう思うと、俺の身体が光出した。  
本当に何ともまあ、いいタイミングである。

「華琳は間違ってなんていない…」

俺は華琳を優しく抱きしめると、そう言った。  
少し力を入れれば壊れてしまいそうなくらい小さい身体は少し震えているみたいだ。

「少なくとも俺はそう思ってるよ…」

「えっ…？」

その眩きは声を掛けられたからか。  
それとも俺が人になっているからか。  
多分、両方なんだろう。  
でも、俺はそれを無視して言葉を続けた。

「確かに今もたくさんの人が苦しんでいる、それが現実だ。だけど、  
華琳は華琳にできることを精一杯やってるんだろう？ それならき  
つと間違ってなんてない。だって誰かを救いたいって気持ちに間違  
いなんてないんだから……」

「……………」

華琳は自分で割り切ってるつもりでも、完全にはそうじゃなかったのかもしれないね。

頭と心は違うものなんだし…。

だって本当に割り切っているのなら、そんな顔はしないし、あんなことは言わないはずだ。

「でも、華琳がそれでもって思ってしまうのなら……」

〈SIDE 華琳〉

私は今の状況が理解できなかった。

気が付いたら蓮の部屋に来ていて、蓮を撫でながら愚痴を言っていて、そして何故か泣いていた。

そうしていたら、何時の間にか目の前には男がいて、今度は何故か抱きしめられていて…。

これは一体、どうなっているの？

ただ、私は間違ってたなんていない。

その言葉がすごく嬉しいと感じた。

「確かに今もたくさんの人が苦しんでいる、それが現実だ。だけど、華琳は華琳にできることを精一杯やってるんだろう？ それならきつと間違ってたなんてない。だって誰かを救いたいって気持ちに間違

いなんてないんだから……」

「……………」

私は何も言わない。

いや、言えなかった…。

確かに全力でやってきた。でもそれだけだ。

私は多くの人を救うために多くの願いを踏み躪ってきた人間なのだから…。

「でも、華琳がそれでもって思うのなら……」

私はその言葉に顔を上げると、私の方を優しい目で見つめている男がいた。

白い髪に、赤い目。首には鈴も付いている。

その男…蓮は私に優しい口調でそう言った。

「今は泣こう？ 華琳が思っている、助けてあげられない悔しさも…辛さも…。助けてあげられなかった人達のこと…全部…そう全部を絶対に忘れないために……今は思いっきり泣こう？」

「……………」

私は泣くわけにはいかない…。

弱さを誰かに見せるわけにはいかない…。

そう決めた…。そう決めたはずなのに…。

「いいの…？」

気がついたら、そう言っていた。  
自分でも不思議だった。

でも、蓮といるときはいつもそうなのかもしれない。  
思えば、蓮といるときはいつも霸王の曹 孟徳じゃなくてただ  
の華琳だった。

私がどんなに堅い鎧を身に纏っていても、蓮の前だとそれを脱いで  
しまっている。

……だから、少しくらい素直になってもいいわよね。

「いいよ……。だってここには、華琳と……ただの猫が一匹いるだけ  
なんだからさ……」

私は蓮のその言葉を聞くと、その胸に頭を預けて泣いた。  
それはもう久しぶりに思いつきり泣いた。

蓮はただ、優しく私の頭を撫でているだけだった。  
後から聞いた話だと、涙には人の体温が効くらしい。  
……悔しいけれど、まさにその通りだった。

私は泣き止んだ後も蓮の腕の中にいた。  
ゆっくりとした蓮の心臓の鼓動と温かい体温を感じていると、私の  
瞼が重くなってきた。

「ん？ 眠くなったのか？ ……お休み、華琳」

「…ええ。お休みなさい」

蓮にそう返すと私は静かに瞼を閉じた。

起きたら、蓮に色々と聞き出してやると心に誓いながら……。

## 第二十五話。 気持ち。（後書き）

第二十五話。 終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では。

第二十六話。 一難去つてまた一難…ぶっちゃけありえない！ (前書き)

今回、少し長めです。

うまく長さが調整出来なかった…。

あつ、あと感想返しに更新したって書きちゃったんですが…。

予約連載にしてました。本当にすみません。

第二十六話　一難去つてまた一難…ぶつちやけありえない！

「……………すう……………すう……………」

「……………はあ……………」

俺は眠っている華琳の頭を撫でながら、小さくため息を吐いた。

やつちまった…。

うん、まさにこの一言に尽きた。

孫家の人間以外に初めてあの姿を見せてしまった。

まだ祭達にも見せたことなかったのに…。

後悔は別にしていないけど、なんか悪いなーなんて思った。

よし、帰ったら、みんなにも見せるか…。

あつ、でも水蓮が文句言いそうだなー。

まっ、いいか。なんとかなるでしょ。

さてと、流石にこのままじゃあ華琳も寝辛いだろうし、寝台に運ぶか…。

俺はそう思ったので、眠っている華琳をひょいと抱き上げた。

まさにその時…。

「華琳様、ここに……」

華琳を探しに来た様子の春蘭が扉を開けた。

そして、華琳を抱えている俺を見て、硬直する。

俺はというと、尋常じゃないくらいの冷や汗が出てくるのを感じていた。

今、一言だけ残すとしたら……俺、この場をうまく凌いだら沢山お魚を食べるんだ、である。

はい。死亡フラグですね、わかります。

「……………」

「……………」

「ん、姉者？ 蓮の部屋にもいらっしやったのか？」

そのまま少しお互い見つめ合っていると、春蘭の横から秋蘭が声をかけて来る。

ああ。フラグの強化ですね、わかります、

さらに秋蘭が声をかけたものだから、春蘭が再起動。

俺を指差して、口を開く。

「く、く、く、……………」

「くりまんじゅう？」

もしくは栗金団？

いや、クレー射撃かもしれん。

俺は首を傾けながら、そんなことを考えた。  
どうやら俺もこの状況に少しテンパっているみたいだ。

「く、曲者だ!! 華琳様を攫おうとする曲者が現れたぞ!!」

ああ、曲者だったのね…。

全然、惜しくなかったわ。

ん、待てよ。

まさか曲者って俺、ですか？

ち、違うよね？ 嘘だよね？ 冗談だよね!?

「何だって!？ き、貴様!!」

春蘭の言葉を聞いて、慌てて部屋を覗く秋蘭。

そして俺の状況を見ると、すぐに顔を怒りに染めた。

「「華琳様を放せ!!」」

二人揃ってそう言ってくる夏候姉妹。

うん、タイミングもばっちりだ。

さすがに華琳を抱えているからすぐに攻撃してくる様子はないけど、  
これは正直やばい。

「ま、まあ、落ち着いて、落ち着いて」

俺は二人を落ち着かせようと声をかける。

しかし、効果はいまひとつのようだ。

今こそ急所に当たってくれよ、と思った俺を誰が攻められようか、

いや攻められない！ 反語！！

「落ち着いてなどいられるか！！ 貴様！ 一体、どこから入ってきた！？ ここは蓮の部屋だぞ！！」

「そういえば…蓮は…。…っ！ その首輪…。まさか貴様っ！ 蓮をつ！」

あれ？

なんかさらに勘違いしてないかな…。  
秋蘭の怒りが増して来たんだけど…。

首輪を見たら気付くかなと思ったんだけどな。  
寧ろ完全に逆効果みたいだ。

そうこうしているうちに、続々と人の気配がしてくる。  
そう言えば…さっき曲者…って春蘭が叫んだよーな…。

かなり大事になっちまったよね、これって。

ああんもう。マジでどうするよ…。

俺がこの場を何とかする方法を必死に考え込んでいると…。

「はあっ！」

俺の顔面目がけて一本の矢が飛んできた。

それを首を横にずらして、口でナイスキャッチ！！

これが犬でフリスピーだったなら、喜んでくれるんだろうけど…。  
今はそんなことはないようで…。

さらに追加で三本の矢が飛んできた。  
今度は横に飛んでなんとかかわす。

「ちよつ！？ マジですか！？」

矢じりも尖ってるし、当たったら死んでしまいますよ！？

あゝ、殺す気ですか。そうですか…。

てか、下手したら華琳に当たるからね！ いや、割とマジで…。

俺は抱えていた華琳を背中に背負い直す。

よし！ これで少しは動きやすくなったはずだ。

「くつ！ 姉者！！」

「応っ！！」

秋蘭に気を取られている間に、接近してきた春蘭が持っていた大剣を一閃。

見事、俺の髪が数本お亡くなりになりました…。

しかも、間髪入れずに矢も飛んでくるし…。

もう死ねる…。

うん、これはもうあれだ…。

逃げよう！ もうそれしかないっすよね！

「あゝ、うん。あばよ、とつつああん！」

俺はそう言い残すと、窓を破って外に出た。  
とにかく人のいない所にダッシュです！

走って！ 銀河の果てまで！

逃げるのに集中していた俺はすっかり忘れていた。

俺が華琳を背負ったままだということを…。

本当にすっかり忘れていたんだ…。

走って中庭まで来ると、俺は嫌な予感を感じて木陰に退避した。  
そして呼吸を止めて、辺りを深く観察する。

すると…。

「チッ！ 落とし穴には引つ掛つてないわね！ 親衛隊は五人一組で辺りを搜索しなさい！ もう城門は固めたから、外には出ていないわ。各員死ぬ気で探しなさい！！」

「……………はいつ！！……………」

桂花が兵達を引き連れてやってきた。

そして、兵達にテキパキと指示を飛ばしていく。

流石、軍師殿。でも今は全然うれしくないな…。

てか落とし穴とか何時の間に掘ったんでしょうか？

兵達がいなくなったので、桂花に接触を試みようとしたが…。

どうも様子がおかしい。

小声で何か呟いているし…。

「男のくせに華琳様に触るなんて……見つけたら殺す！ 絶対に殺す！！」

うわーお。気になったので聞こえる位置に移動したらこの結果ですよ。

声をかけて、なんとかして貰おうと思ったんだけど…。これは無理そうだ…。

「見〜つ〜け〜た〜ぞ〜！！」

俺がこそこそと退散しようとした時、後ろから声をかけられた…。悪鬼や悪鬼がおる！！

「げえっ！ 春蘭！！」

「ほう。華琳様を攫っただけでなく、私の真名をも言うか…。すぐさま死ねっ！！」

「……もう嫌…！！」

俺は剣を振りまわしてくる春蘭から脱兎のごとく逃げ出した。この時の逃げっぷりは我ながら天晴れだったと思う。

その後も秋蘭の怒りの矢とか、必死の形相をした親衛隊の奴らとか、桂花の姑息な罾とか色々なものから俺は逃げた。

逃走中なんか目じゃねえよ。金とかじゃなくて命が掛かってるから…。

てか、どっちゃかっていうとリアル鬼ごっこだからね、これっ！！そんなわけで全力で走ったりした俺は、世界新記録とかギネスとかそんなちやちなもんを全部ぶち破った…。

「はあ、はあ、はあ。……撒いたか？」

俺は何とか城壁の上で一息ついた。

動いている灯りが見えることからまだまだ搜索は続いているようだ。もう勘弁してくれよ、俺の怪我ってまだ治ってないんだよ？

「蓮、それは失敗するときの言葉よ？」

「ああ。確かにそうかも……って、華琳さん！？なんで……」

突然声をかけられて驚いた俺は、驚いて後ろを振り向く。そこには……というかなんで俺の背中には華琳の姿が……？

「……貴方が連れてきたのでしょうか？」

少し、不服そうにそう言って来る華琳。俺が連れてきた……？

「……あつ！そうだった……。だからみんなあんなに必死なのか……」

自分の馬鹿さ加減に少し、頭が痛くなった。そりゃ、必死になるわな。

自分達の主を攫われてんだもんない。

「んで、いつから起きていたんだ？」

「んー、春蘭が真名を呼ばれて、怒っていたところ辺りかしら」

この野郎…いや女郎…。

起きてるのならすぐに誤解を解いてくれよ…。

俺、結構死にかけてただけ…。

「殆ど、初めからじゃないか…。さては楽しんでたな？」

「まあね。それで誘拐犯さん？ 私をどこに連れ去るつもりなのかしら？」

俺の睨みを軽くかわして、まあねと普通に言ってしまう華琳さん。やっぱり大物でした。色んな意味で…。

今もニヤニヤと笑いながら、変なこと言ってくるし…。

「そうだね、誰も追って来ない所までかな？ 一緒に一緒に来てくれますか、お嬢さん？」

ちょっと悔しかったので、俺は少し茶化したように手を差出しながら、そう言ってみる。

しかし、華琳は平然と俺の手を取った。

むむむ。ここは少し照れるとかしてくれてもいいんじゃないかな。

「それは嬉しいお誘いだけど、そんな場所はないわよ？ あの子たちは地の果てまでも追って来るから」

華琳がそう言いながら、目線を外に向けると、春蘭の怒声が聞こえてくる。

うわー。まだ探してるし…。

怒られてる兵のみなさん。大変ご愁傷様です！

「…みたいだね。なら愛の逃避行はこの辺でおしまい、かな」

まあ、俺はもう走るの懲り懲りだけどね。  
身体中がまた痛くなってきたし…。

「そうしましょう。じゃあ蓮、次は楽しい楽しい貴方の尋問のお時間よ」

「え、っ!？」

「当然でしょ？ 乙女の肌に触れたのだから、このくらいで済んでありがたいと思いなさい」

それはそうですけど…。

なんか納得がいきません！

俺ばかり損している気がするのです！

「…そういえば、華琳はあんまし驚いていないのな。結構、みんな初めは驚くの…」

雪蓮とかも初めは半信半疑だったのに…。

ああでも、蓮華と小蓮はすごいねえ…だったっけ？

その時の事を思い出すと何か少し笑えてきた。

「…何をニヤニヤしているのよ、気持ち悪いわね…」

「少し思い出し笑いしてただけなのに…ひでえ言われようだ」

「まあいいわ。私も驚いたわよ？ でも貴方は普通の猫ではないと思っていたし、それに蓮の事でしょう？ 深く考えてもどうせわからないもの。それなら直接、聞き出せばいいってね」

そう言いながら黒く笑う華琳。

これはあれだ…。

鳴かぬなら鳴かせてみせようって奴だ。

まあ、殺してしまえじゃないだけマシなのかな…。

「…わかりましたよ。こうなったら出血大サービスだ。じゃんじゃん質問していいよ」

「さーびす、というのは良くわからないけど…まあいいわ。それじゃ、まずは貴方は何者なのかしら？」

こうして俺は華琳の質問に一つ一つ答えていくことになった。

俺が『天』から来たこと。

もう何百年も生きていること。

満月の夜だけ人間になること。

俺が言える範囲のことは全て話した。

「んで、水蓮を攻撃から庇って谷底に真っ逆さまに落ちて……」

「…私に拾われた、というわけね。なんというか波乱万丈ね」

俺の話全部聞いた、華琳の感想はそれだった。

それはそうかもしれない。

『天』に居る時はこんな風になるなんて考えてもいなかったし…。

「まあね、でも楽しいよ。確かに沢山の別れもあったし、悲しいこともあったけれど…それ以上に沢山の良い出会いがあったし、嬉しいことや楽しいことがあった。…だから俺はすごく幸せだって思ってる」

これは俺の本音だ。

俺はこの世界に堕ちてきて良かったって心からそう思っている。だって毎日がすごく楽しいから…。あっちにいた頃よりもずっと…。

「……じゃあ私との出会いも良かったと思っっているの?」

華琳は少し顔を伏せると、小さな声で俺にそう聞いてきた。何を言ってるんだろうかね、この子は…。そんなの……。

「当然だろ? 少し意地っぱりで、意地悪だけど…。こんなに優しく、可愛い女の子に会えたんだ。すごく嬉しいし、良かったって思ってるよ」

「そう…。ま、まあ当然ね。私に深く感謝すればいいわ」

華琳は少しだけ顔を赤くすると、そっぽを向きながらそう言ってきた。

何か照れている華琳は初めて見たかも…。

うん。これは中々いいものだ。

秋蘭が見たらまた情熱が吹き出してしまふな、これは…。

「ははは。感謝してるよ…。心の底から、ね」

その後も、他愛もないことを話していると、夜が明けた。  
俺は勿論、猫の姿に戻ったので、部屋に帰ることになったのだけど……。

「にゃあ」

「ふふふ。ダメよ、怪我が悪化したのだから我慢しなさい」

何故か華琳に抱っこされながら移動することに……。  
まあ、確かに怪我はひどくなっちゃったけどさ。

「あつ、どうせだから今日は一緒に寝ましようか？」

「にゃー！」

誰が寝るかっ！

というか俺は一応、人間ですよ！？

「でも、今はただの可愛い猫じゃない」

何でみんな、人の姿を見ても反応がこうなの？

お兄さん、泣いちゃうよー。

こうして俺は華琳に連行されましたとさ。

ちゃんちゃん

一方、その頃。

「華琳様ー！！」

「くそっ！ まだ見つからないのか！？」

「殺す殺す殺す殺す………」

城内では結構、大変なことになっていたり…。それは華琳が起きてくるまで続いたとか続かなかったとか…。

第二十六話。 一難去つてまた一難…ぶつちやけありえない！ (後書き)

第二十六話。 終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

第二十七話 流星が降る時に…。(前書き)

いかん。

最近…一話が長くなってる。

最初の頃の二倍になってる…。

第二十七話 流星が降る時に…。

ども。蓮君です！

あれから数か月、経ちました……。

時間を飛ばすなって？ いや、そんなこと言われても……。

えっ……？

みんな探してたけど、大丈夫だったのかって？

そこはほら、あれだよ、あれ。

全部、華琳がなんとかしてくれました……。

うん、凄いよね。

あの騒ぎを治めるなんて……。

誘拐犯（笑）は警備の厳しさから途中で諦めて、逃亡したというかなり無茶な話だったけど……。

華琳が言えばみんな一発で信じてくれました。

流石、華琳様。黒いものでも白いものになるとは……。恐るべしです。すね。

まあ、秋蘭とかは俺の事もすごく心配してくれていたみたいで、俺の姿を見た時にはほっと息を吐いていました。本当に色々ごめんね……。

でも、桂花？

俺のヒゲを引っ張りながら、愚痴を言うのは止めて……。

今度見つけたら、絶対に死なすとか言わないで。

俺がその張本人だからね……。

さてさて、時間も経てば怪我もやっと治るわけで……。  
なんとか完治した俺はそろそろ呉に帰ろっかな　って思っているところだ。

ちなみに方法はというと、なんと華琳が雪蓮に手紙を書いてくれるそうです。

まあ、書く内容はまったく知らないんだけどね……。

その代わりの条件として、迎えに来るまでの間はずっと傍にいなさいって言われたんだけど……。  
そんなことでいいのかな……。

まあ、俺に出来ることなんて殆どないわけなんだけどさ……。

猫の手も借りたいって言うけど、実際問題、猫の手は何もできないわけで……。

でも華琳には恩義があるわけで……正直、困っています。

「……というわけで、華琳。俺に何かして欲しいことはないか？」

「何がというわけなのよ……。でも、そうね……」

こう言う時は直接、聞くのが一番ということで、俺は人に戻っている時に聞いてみることにしました。

あつ、ちなみに今は華琳の部屋に匿って貰っています。

……また騒ぎになるのは勘弁だからね。

華琳は少しの間考え込んでいたが、すぐに顔を上げた。

「別にないわね……。まあ、貴方は猫なのだから愛玩動物らしく、私達に愛でられていなさい」

「……いや、まあ。それでいいのならそうするけどさ……」

ないんかいっ！ 俺は心の中で突っ込みを入れた。  
ううう。俺に出来ることはないのね……。

……これは水蓮達になんか頼むしかないのかな。  
自分のケツも自分で拭けないとは……。何とも情けない。

「まあ、その話は置いておきましょう。ところで蓮。貴方は最近、都で囁かれている噂を聞いているかしら？」

「噂、ね……。いや、知らないけど……」

華琳が話を変えて来たので、俺もそれに乗っかる。

噂、噂、噂……。

一応、自分でも考えてみるが、特に思いつくものはなかった。

そんな俺の反応を見た華琳は、にやりとした笑みを向けると口を開く。

「管轄っていう占い師が言ったそうよ。もうすぐ『天の御遣い』というものが現れると。何でも、この国に平和をもたらしてくれるとか……」

「『天の御遣い』ねえ……」

それはまた何というか。凄い噂が出て来たもんだ……。でも仕方がないのかもしれないと思った。

そんな噂が広まってしまふほど、世が乱れているのだから……。

「まあ、正直眉唾ものだけれど……。それで同じ『天』から来たという運はこの噂についてどう思うのかしら？」

華琳が楽しそうに、そう聞いてくる。

俺がいなければ、気にも留めなただの噂だったのだろう。

でも俺が『天』から来たと話したから、少しは興味を持ったという訳だ。

「さあてね。詳しくはわからないけど……。俺と同じ所から来るとは考えにくいかな……」

俺と同じ所から来る場合なら、それはある意味、島流しみたいなものなはずだし……。

この国を平和に導くなんてできるとは思えない。となると、別の所から来るはずなんだけど……。

「そうなの？」

「ああ、多分だけど……」

うーん。どこから来るのかね……。

なんか超能力とか魔法とか使えるのかな……。

それなら久しぶりに見てみたいかも……。

「あら、それじゃあ猫が現れるわけではないのね……」

「……お前、俺の母国を猫の国か何かと勘違いしているだろう」

少しおどけたように言ってくる華琳にじとっとした目を向ける。  
しかし、効果は余りないようだ。

「ふふふ、冗談よ。それはともかくとして……。最近、賊が活発化して来ているわ。……規模もより大きなものになって来ているし……」

華琳は笑みを浮かべていた顔を真面目なものに切り替えると、賊達のことについて話し始めた。  
城内で話にもなっていたけれど、どうも賊達が増えてきているみたいだ。

一つ一つの人数も前より、多くなって来ているらしいし……。

「……そっか。なら一度、大反乱が起こるかもな……」

「……そうね。……起こってしまうんでしょうね」

俺の意見に同意すると華琳は少し暗い顔をした。  
反乱が起これば華琳の霸道への大きな足掛かりにはなるだろう。  
今までのような一歩ではなく、多分、飛躍の時になる。  
でもそれは……。

「華琳……」

「大丈夫よ。わかっているわ……」

俺が声をかけると、そう返してくる華琳。  
はぁ、全然大丈夫そうには見ないんだけどな……。  
……本当に困った奴だ。

「……華琳は華琳の目指す道を進めばいい、脇目も振らずにただ真っ直ぐにさ。……きっとそれがみんなのためになるのだから……ね？」

「……………うん」

華琳は一度頷くと、そっと俺の手を握ってきた。

俺は一瞬だけ驚いたが、少し苦笑すると、その小さな手を握り返してやるのだった。

物語は動きだす……。

時計の針は元に戻すことは誰にも出来ない。

遂に本格的な乱世が幕を開ける……。  
切っ掛けは、一筋の流星からだった。

荊州、南陽……。

「策殿っ！ 空に流星が降っていますぞ！」

賊の討伐の帰り道。

考え事していると、隣にいた祭が声をかけてくる。

「流星……？ あら本当ね……」

祭の言葉に従ってそれを見てみると……。

昼間なのにはつきりと輝く流星が見えた。

そう言えば、管輅とかいう占い師が言っていたらしいわね。

天の御遣いが流星に乗ってやって来るって……。

いつもだったら噂の流星を見て、気分も高揚したのかもしれないけれど……。

今の私はそうはならなかった。

「雪蓮……。いつものお前らしくないな。まだあの手紙のことを気にしているのか？」

「……少しね。でも曹操の言うことは間違っていないわ……。今の私は力不足なもの」

祭とは逆の位置にいた冥琳が私を気遣うように声をかけてくる。そして、冥琳の指摘は大当たりだった。

先日、私達の下に届いた一通の手紙。  
差出人は陳留の刺史、曹操。

内容は蓮のことだった。

蓮は曹操が保護したらしく、今は怪我也治つて来て、元気らしい。  
それを聞いた時、私はすごく喜んだ。すぐに迎えに行こうとも思った。

でも……。次の文章で私の喜びは消えた。

私は蓮を貴方達の所に返すつもりはない。

その一文を見た時、私は怒りを覚えた。  
何を言っているんだ、と。

でもそれも続きを見るまでのことだった。

蓮は英雄の隣にいることこそが相応しい。

唯の英雄の娘には過ぎた存在だ。

でも、蓮は貴方達の所に帰りたいと言っている。だから私に証明してほしい。

孫 伯符は唯の孫 文台の娘ではなく、一人の英雄であるということとを……。

それを証明して貰えるのなら、私は曹 孟徳の名において蓮を必ず貴方達にお返しすることを誓う。

私の曹操への怒りはすぐに収まった。

そして、今度は自分への不甲斐なさや怒りが湧き上がってきた。  
今の私に堂々と蓮を迎えに行ける資格がないことがすごく悔しかった。

「はあ」

私は大きくため息をついた。  
あれから何日も経っているけれど、そのことが未だに頭から離れない。

「策殿……」

「雪蓮……」

祭と冥琳が心配そうな顔を私に向けてくる。  
それを見て、私は思った。

そうだ、私は一人じゃないのよね……。  
傍には頼りになる仲間……家族がいるじゃない。  
そう思ったら、何だか心が軽くなったような気がした。

前に気合いを入れたはずなのに……また、私は何をやっているんだか……。

今はクヨクヨしている場合じゃないのにね。  
だから、まずは……。

「二人とも、もう大丈夫よ」

私は二人に笑顔を向ける。

言われっぱなしじゃあ、孫家の女の名が廃るわ。

上等よ！ お望み通り英雄になってあげようじゃない！

「私は曹操に証明するわ！ 私が蓮に相応しい者だってことをっ！

「この身の全力をもつてね！」

「ふっ、そうか。ならば私も全力でそれに応えんとするか……。蓮を取り戻したいしな」

「ありがと冥琳。祭もよろしくね」

「策殿……。勿論じゃっ!!」

始めよう。

蓮を……。呉を……。私達の全部を取り戻すための私達の戦いを……。始めていこう……。

？州、陳留……。

「華琳様っ!!」

「どうしたの、春蘭？」

「にやうん？」

春蘭の大声を聞いて、私は蓮の毛繕いをしていたその手を止めた。蓮も不思議そうな顔を春蘭に向けている。

「空ですっ！ 空を見てください！！」

「空………？」

「にゃお？」

春蘭が指を差す方を蓮と一緒に私も見てみる。  
真っ青な空に一筋の流星がゆっくりと落ちていた。

「……昼間に流れ星……。不吉ね………」

私はその流れ星を見て、そう呟いた。  
でも蓮はそうは思わなかったのか。

じつとただ流星を見つめているだけだった。  
蓮の様子だと不吉なものではないのかしら……。

「……あっちの方角だと……幽州、ですかね」

「ええ。確か五台山の方角ね………」

流星が落ちた方角を見て春蘭がそう言ってくる。

私の予想でも幽州に落ちたと思った。それはおそらく正しいだろう。  
しかし何故、流星が……。

私が考え込んでいると、蓮が小さくため息を吐いた。

「蓮？ どうしたの………？」

「にゃん」

それが気になった私は蓮に聞いてみるが……。蓮は何でもないと返して来る。しかし、私は見逃さなかった。蓮がその後にもう一度ため息を吐いたのを……。

まあ、少し気になったけれど、今は良しとしましょう。さて、孫策はどうしているかしら……。

あの手紙には私の本心を書いた。ただ袁術の下で燻っているような人物ならば……少しの間でも蓮を渡したくはない。

しかし、孫策が真の英雄ならば……蓮を預けて置いてもいい。そういう意味で書いたのだけれど……伝わったかしら……。

できれば、孫策が英雄であってほしいわね。そして英雄同士、それに相応しい場で雌雄を決して、私は堂々と蓮を勝ち取る。

ふふふ。こんなに血の滾ることはないわ。

だから始めましょう。私の霸道のための戦いを……。始めていきましょう……。

幽州、五台山……。

「お待ち下さい、桃香様。お一人で先行されるのは危険です」

「そうなのだ。こんなお日様一杯のお昼に、流星が落ちてくるなんて、どう考えてもおかしいのだ」

「大丈夫だよー！」

私は愛紗ちゃんと鈴々ちゃんにそう返した。

二人ともごめんね……。

心配してくれているのはわかっているんだけど……。  
今は急ぎたいんだ。

私達は三人で各地で人助けをしながら旅をして来た。

勿論、初めから三人だったわけじゃない。

初めは私一人だった。

今のこの国はすごく乱れていて、そのせいで悲しい思いをしている人が沢山いる。

だから、私は旅に出たんだ。

私にも何か出来ることがあるかもしれないから……。

でも、現実はやっぱ厳しくて、助けてあげられない人も沢山いた。私に力が足らなかったから……。

でもそんな時に出会ったのが愛紗ちゃんと鈴々ちゃん。

二人ともすごく強くて、村の人達を苦しめていた賊の人達を追い払ってくれた。

村の人達がお礼を言っている時も、二人は当然の事だよって言って笑っていた。

だからなのかな……。私は二人に私の夢を話したんだ。

みんなが笑って暮らせる国にしたい。

多分、普通の人なら笑っちゃうような夢だけど……二人は笑わなかった。

それどころか、力を貸すとも言ってくれたんだ。

それがすごく嬉しくて、少し泣いてしまったのは……今思うと少し恥ずかしいかな。

私は、その時に思ったんだ。

一人じゃ無理でもみんなで力を合わせれば、私の夢も叶うかもしれないって……。

だからそれからは三人で一緒に頑張ってきた。

でも、やっぱり三人でも無理な時があった。

一人の時よりは沢山の人を助けられたけど……それでも限界があった。

そんな時に噂を聞いたんだ。

『天の御遣い』の噂を……。

御遣い様がどんな人なのかはわからないけど……。

話をすれば、私達に力を貸してくれるかもしれない。

勿論、断られるかもしれないけど……。

それでも……。

そんな思いで、私は流星が落ちた所に走って向かっていた。  
早く、早く、早く。

私がそう思っていると……。

一人の男の人が辺りを倒れていた。

光が反射してキラキラと光っている服を着ている男の人……。

あの人が御遣い様だ。

私はそう思っ、走る速度を上げた……。

まずは声をかけることから……。  
話を聞いて貰うことから……。

始めるんだ。

ここから、私達の夢のためへの戦いを……。  
始めていくんだ。

魏、呉、蜀。

ここ以後の三国の主役は揃った……。

鍵になるのは二つの『天』。

物語はどのように動き、巡っていくのか……。  
それは誰にもわからない……。

そう……誰にも……。

「にゃん？」

多分……。

第二十七話　流星が降る時に…。（後書き）

オープニング、スタート！！

みたいな感じにしたかったのに…。

うわゝ、微妙かも……。

ま、まあとりあえず、第二十七話。終了です！

いかがだったでしょうか？

一刀君は蜀に堕ちたんだぜ？

あんなに前振りあったのに…堕ちちまったんだぜ？

でも、一応最初から決めていたので……みなさん、許して下さい！

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

## 第二十八話 夢の実現へ…。 (前書き)

みなさん、お久しぶりです！

やっと… やっと書く時間が出来たよ、パトラッシュ…。

まあ、風邪引いて熱があるんですけどね！

変な時間に起きてしまったので、こんな時間に投稿します！  
では本編です、どうぞ。

## 第二十八話　夢の実現へ…。

～SIDE桃香～

天の御遣い様と私達は軽い自己紹介をした後に、一度街に行くことになった。

理由は鈴々ちゃんがお腹が減ったと言い出したからなんだけど…。  
まあ、私もお腹が減ってたから丁度良かったのかな。

そんなわけで今、四人でご飯を食べて一息ついた所だ。  
んー、ここの炒飯はすごくおいしかったな。

お米はパラパラだし、焼豚もいい感じだったし、メンマも歯ごたえが良かった。

うん！　私は大満足ですっ！

「えっと、それで劉備さん。俺に大事な話っていうのは一体何なのかな？」

私あのほほんとそんなことを考えていると、一刀様がそう聞いてきた。

んー、話…？

あっ…いけない！

のんびりお茶を飲んでる場合じゃなかった！

うつ……。

愛紗ちゃん、お願いだからそんな目でこっちを見ないでよぉ。

ここの炒飯がおいしかったから仕方ないんだよ。

悪いのは私じゃなくて炒飯なの！

「あの〜」

「ふえっ！」

私がそんな言い訳を頭の中で考えていると、一刀様がまた話しかけてきた。

それに驚いて変な声をあげてしまって、思わず顔が赤くなる。

ううう、ダメダメだよお私…。

って、そんな場合じゃなかった。

今は話をしなくちゃだよね！

すーはーすーはー。良しっ！

私は気合いを入れ直して口を開く。

「一刀様…。私達に力を貸して欲しいんですっ！」

私は話した。

今のこの国のことを…。

王朝が腐敗してて、沢山の賊が溢れかえってるこの国の有り様を…。

力のない人達が沢山苦しめられているこの国の現状を…。  
全て話した。

そして私の…ううん、私達の夢を話した。  
みんなが笑っていられるような国にしたいっていう私達が描いたす  
ごく大きな夢を…。

「…だからお願いします！ 御遣い様である一刀様の力を私達に貸  
して下さい！！」

「お願いします！ 無力な民達を…悪しき者の手から守りたいので  
す！」

「鈴々達に力を貸してほしいのだ！」

私達は三人で頭を下げた。

一刀様はその様子を見て、少し慌てているようだった。

うまく伝えられたかな…。

私は頭を下げながらそう思った。

もっと私が話上手だったなら、もっとうまく言えたかもしれないの  
に…。

こんな時、自分の力の無さが少し恨めしい。

でも、今の私の全力の思いはぶつけられたと思う。

あとは一刀様の返事だけ…。

私は不安な気持ちを抱えながら一刀様の言葉を待った。

「えっと、まずは三人とも頭を上げてくれるかな？」

周りの人が見てるから…。

そう続く一刀様の言葉を聞いて私達は頭を上げる。

それを見て、一刀様はほっと息を吐いた。

どうやら一刀様は周りの注目を浴びて、少し居づらかったみたいだ。その様子を見て、一刀様も人間なんだな〜と頭の隅で思った。

「…三人の気持ちはよくわかったよ。この街を見ただけじゃあ良くわからなかったけど…。この国が大変な状態だっていうことは三人の話を聞いて、俺なりにだけど理解したつもりだよ…」

一刀様は一言一言噛みしめるようにそう話す。

私は内心でほっと息をつく。

良かった。なんとか私達の気持ちは伝えられたみたいだ。

「俺のいた国では賊なんて出ないし、戦争もない。勿論、昔はあったし、今も他の国では起こっているんだけど…。だから俺は話だけで、直接見たことはないんだ」

その言葉を聞いて驚いた。

天の国ってやっぱりすごいらしい。

詳しく聞いてみると、賊とかでもないし、食べ物に困る人もほとんどいないらしい。

それはなんていい国なんだろう。

この国もそんな風になれば、きっとみんな笑顔で過ごせるんじゃないかな。

私は一刀様の話を聞いてそう思った。

この人に力を貸して貰えたら本当に私達の夢が叶うんじゃないかなって…。

そう期待してしまった…。

でも次の言葉を聞いてそれも消し飛んでしまったんだ。

「…話を戻すね。俺は国のこととか戦争の事とかを話でしか知らない。だから力を貸してって言われても、正直俺にそんな力あるとは思えないんだ」

「それじゃあ……」

それはつまり、私達に力を貸してくれないってこと…だよな。

私はすごく申し訳なさそうな顔でそう話す一刀様を見てそう思った。

自分でも心が落ち込んで行くのがよくわかる。

何をやっているんだか。勝手に期待して勝手に落ち込んで…。

もうなんか涙も出そうだ…。

隣の愛紗ちゃんが私を心配げな顔で見てる。

でもその愛紗ちゃんも落ち込んでるのがよくわかった。

「でも…。そんな俺だけ…。劉備さん達の夢がすごく尊いものだ  
って思ってたんだ」

「「えっ？」」

一刀様は私達に優しい笑顔を向けてそう言った。  
それを聞いた私と愛紗ちゃんは同時に声を上げる。  
それってもしかして…。

「俺に何が出来るのはわからないんだけど…。でもこんな俺で良かったら三人の夢に協力させてくれないかな？」

一刀様が照れくさそうな顔をして、手を差し出してくる。  
私は慌てて、その手を掴んだ。

……手汗は大丈夫だね？

後になってからそんな心配をしたけど、その時の私はそんなことは考えずにただ喜んだ。

良かった…。

本当に良かったよ…。

「はい…。はい、はいっ！　ありがとうございますっ！」

私は何度も何度も頭を下げて、一刀様にお礼を言った。  
少し目が潤んでいたのは、ご愛敬だ。

「ありがとうございます！　一刀様っ！！」

「お兄ちゃん、ありがとうなのだ！」

愛紗ちゃんも鈴々ちゃんも頭を下げながらお礼を言っている。  
その顔は心底安心したような笑顔だった。

それから私達は真名を交換した。

一刀様に真名が無くて、一刀がそれかな〜と言われた時は心臓が飛び出そうだったけど…。

それは気にしてないって言って貰えたから良かった。

やっぱり一刀様は器が大きい人なんだな〜。

あ、あとご主人様は止めてくれって懇願されて、名前で呼んでって言われた。

でもご主人様はご主人様だよね？

そんなこんなで天の道具とかを見せても貰ったり、みんなで雑談をしていると…。

思い出したかのように一刀様…一刀さんが口を開いた。

「あつ、あと天の御遣いについて何だけど…」

「？ 天の御遣いがどうかしたのですか？」

愛紗ちゃんが不思議そうな顔をしてそう尋ねた。

天の御遣いに何にか問題があるのかな？

「それってまずくないのかな？ この国のことはよくわからないけど…『天』って名乗るのは大丈夫なの？」

「…それは…」

「多分、良くない…かな」

一刀さんの疑問は間違っていなかった。

この国で『天』と名乗っていいのは帝だけだ。

噂が『天の御遣い』が来るといふものだったから気にもしていなかったけど…。

あんまり良くないかもしれない…というか絶対にまずいよね、これって…。

「????」

私達が冷や汗を掻いている横で鈴々ちゃんが不思議そうに頭を傾けていた。

この桃まん食べてていいよと言って桃まんを差し出すと笑顔でそれを頬張る鈴々ちゃん。

ああ。なんて無垢なんだろう…。

私も何も考えたくないな…。

私が軽く現実逃避している中、一刀さんと愛紗ちゃんは話を続けていく。

「…でも三人が俺を探してたのって…その風評とかが欲しかったんだよね？」

「…はい」

「っ、愛紗ちゃんっ！」

一刀さんの言葉に愛紗ちゃんはゆっくりと頷く。

それに反応して私は反射的に声を上げてしまった。

…確かにそんな考えが全くなかったと言ったら、嘘になるけど…。でもでも、そんなにはつきりと言わなくても…。

「桃香様…。ですが、事実ですし…」

少し暗い顔をして愛紗ちゃんはその言う。

愛紗ちゃんも一刀さんに申し訳ないって思ってるみたいだ。

愛紗ちゃんは私の代わりに悪役をしてくれている。

それなのに私は…。

少し自己嫌悪になっちゃった。

そんな状態で少し気まずい空気が流れていると、一刀さんがまた口を開いた。

「まあ、それは当然だと思っし、別に気にしてもいないからいいんだけど。…結局の所、天の御遣いって名乗ったらやっぱり色々まずいと思うんだ。少なくともまだこの国は帝の…『天子』様の物なわけだし…」

「はい。そうですね…」

しかし、一刀さんはそんなのは気にしていないといった様子で話を続ける。

その素振りを見る限り本当に気にしていないみたいだ。

うん、やっぱりこの人は本当の天の御遣い様だよ。

だってすごく優しいもん。

でも、まだってどういう意味なのかな？

私が少し考えていると…。

「だから、今は『天の御遣い』とは名乗らない。桃香…。天の御遣



今はまだ小さな一歩だけど…。

これから私達の夢に向かって頑張っていこう。  
きつとみんな一緒なら実現できる。

私は同じ席に居る三人の仲間を見ながらそう思い、  
気合いを入れるのであった。

ただね、鈴々ちゃん…？

まだ桃まん食べてるの？

それってもう十五個目だよね？

私達ってそんなにお金持ってないんだけど…。

でも、まあ一刀さんが持つてるよね？

なんだって天の御遣い様だもん。お金持ちに決まってるよ！

私のそんな考えはあっけなく崩れて、  
みんなで皿洗いをするこ  
なったのはまた別のお話…。

お金って大事だよね…。



## 第二十八話　夢の実現へ…。　（後書き）

第二十八話。終了です！

いかがだったでしょうか？

一刀君の言動がおかしくなかったか、少し不安だったり…。あと、文章も少し粗いかも…。

大変遅れましたが、感想の方も返させて頂きました。本当にすみません！

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では～。。

第二十九話 風邪×看病…。それってなんて罰ゲーム？

「くしゅっ！」

どうも、開幕からくしゃみですみません。

みなさん、本当にお久しぶりです。

現在、鼻水も出てて非常に苦しい状態の蓮です。

目とかも充血して真っ赤に……。

あつ、俺は元から真っ赤でしたね。

あゝ、風邪とか久々で何もおもしろいことがいえねーです。

こんな駄猫ですみません……。

なんていうか生まれてきてすみません……。

「くちゅっ！」

「……完全に風邪ね」

俺の横でそんなことを言う華琳さん。

その目は心配しながらもどこか呆れているように見えた。

しかし、まあそれもしようがないと思う。

昨日の俺の行動はアホとしか言いようがなかった……。

「また勝手に外に出たと思えば、雨で濡れて帰ってきて……」

「風呂に入れようと思えば、逃走して……」

「その拳句にため池に飛び込んで……」

「そして、風邪を引いた、と。……完全に自業自得ね」

コンボが決まったっ！

俺が少し反省しているのにみんなで連携してトドメを刺してくる三人。

言わずとも知れた、華琳と夏侯姉妹である。

兵法三連鎖にクリティカル、さらにスナイプとはフルコースですか、そうですか……。

余裕で五桁削られましたよ……！

やめて……！ もう蓮のライフはゼロよっ！

何を言っているんだろうか、俺は……。

ごめんなさいね。どうせ、俺はダメな猫ですよ。

必死に逃げてたら何時の間にか池の中だったバカ猫ですよ。だ。

いいんだいいんだ。

そうやってみんなで俺を攻めればいいんだ、笑えばいいんだ。全部俺がバカだったのが悪いんだし……。

「か、華琳様……。蓮が壁に向かって何かぶつぶつと……」

「熱で頭をやられたのかしら……？」

「とりあえず桶の水、変えましょうか？」

なんていうか、秋蘭さん。

すごく……クール、です。

とにかく今日はゆっくり休みなさいという華琳のありがたい話を素直に聞いた俺は、とにかく大人しくしていることに……。

……なつたはずなんだけど……。

「ん？ どうした？」

何故にそこにいるんだい、春蘭さんや。

華琳も秋蘭も自分の仕事をしに戻ったのに何故か、ここにいる春蘭さん。

お仕事は大丈夫なのでしょう？

あつ、でも春蘭の書類って殆ど秋蘭に回されてるんだっけ……。何て言うか、いつもご苦労様です！

それにしても春蘭がここにいるのは何故？

正直、謎です。

ミステリーです。

なにこれ、怖い、です。

ま、まあとにかく本人に聞いてみるとしよう。

人はわかり合える生き物だと昔の偉い人も言ってたしね。  
こみゆにけーしょんいずいんぱーたんとっ！

「にゃ、にゃあ……？」

というわけで俺は春蘭に尋ねてみることに……。

結構、大きな声を出したつもりだったけど、その声はかなり弱々しく小さなものだった。

うむ、喉もやられているか……。

「何だ、蓮は腹が減ったのか。んーよし、少し待っている。すぐに何か持ってやるからな！」

そう言つて、春蘭は俺の頭を一撫ですると部屋を飛び出して行った。  
ダメだ、全然伝わってない……。

昔の偉い人へ……俺には無理だったよ。

てかよくよく考えてみれば俺って、猫だったね……。  
えへへ、やっちまったぜ。

それにしてもここに来て結構な時が経つんだけど、未だに春蘭は俺の言葉がわからないよな。

うーん、なんでだろう。

華琳や秋蘭は勿論のこと、最近仲間になった季衣や凧達にもなんとなくなら伝わるのに……。

何故、春蘭には伝わらないんだろうか。

あのアホ毛でビビツと受信とかできそうなのになー。  
アンテナ

あつ、そついえば桂花にもだったけ。

桂花も猫耳なのにイマイチ伝わらないんだよな。

やっぱりフードではダメなのか……。

ならばいっそのこと猫耳を付けてみるとか……。

いや、それじゃあ意味ないか。

……ダメだ、頭がうまく働いてないや。

でもあの二人に共通点とかないよな、寧ろ正反対っぱいし……。

どちらかというと他のみんなよりも動物っぽいんだけどな。

犬と猫的な意味で……。

俺が寝台の上でそんなことを考えていると、突然、部屋の扉が開かれた。

春蘭が帰って来たのかと思ってそちらを見ると、先ほど少し話に出た四人が立っていた。

でもその様子が少しおかしい。

何というか、みんな神妙な顔をしている。

どうしたのかと思った俺は声を掛けてみることにした。

「にゃ？」

しかし、四人は何も反応しない。

ただただ俺を悲しそうな顔で見つめている。

そして、四人でゆっくりと俺を撫で始めた。

んんん？ みんなどうしたのかな？

何か嫌なことでもあったのかな？

俺がそんな風に心配していると……。

四人は撫でていた手を止めた。  
そして徐にみんなは口を開く。

「蓮ちゃん……。頑張つてなの。」

「骨は拾つたるからな……。」

「……頑張つて下さいね？」

「蓮、元気になったらまた遊ぼうね……？」

これから死地に赴く兵士を見送るような眼で俺を見てくる四人。  
えっ！？ 何で俺が心配されてるの？  
まあ、風邪は引いてるけど……。それにしてもそんなに心配しなくて  
もいいような……。

混乱している俺を放置して、四人はそのまま部屋を出て行く。  
ただ最後にみんな揃って敬礼していたのがすごく印象に残ったのだ  
った。

うーむ。

これは何か嫌な予感がして来たぞ。  
具体的には俺のひげが死亡フラグの予感をビンビンと感じてるぞ。

……逃げるか？

いや、でも外に出るとまた怒られる。  
それに何より身体がダルイ。

さてどうするべきか……。

「蓮！ 待たせたな！」

俺がそんなことをぼーっと考えていると、春蘭が戻ってきた。

……扉を蹴破りながら。

いや、最早何も言うまい……。

しかし、何か春蘭のテンションが以上に高い。

さらに言えば、その手には少し小さめの土鍋が握られている。

俺は壊された扉よりもその土鍋に注目した。

そして理解する。

こ、これが俺の死亡フラグか……！

俺が少し怯えながら、土鍋を見ていると……。

「ふふふ。これが気になるのか？」

その視線に気が付いた春蘭が自慢げな笑みを浮かべて、その土鍋を机の上に寝台の上に置いた。

いや、確かに気にはなってるんだけどね。

その、なんて言うか、嫌な予感がひしひしと伝わって来るし……。

「感謝しろよ、この粥は私が自ら手を振るっただぞ」

「にやう……」

ね、猫にお粥を持ってくるかこの人はっ！  
かなり予想斜め上だったわ。

なんか果物とかかなーって思ってたのに……。

しかも春蘭の手作り……だと？

この弱った身体にトドメを刺そうというのですな、貴方は……。

「安心しろ。秋蘭が昔、熱を出した時にも作ってたんだ。……もう五、六年くらい前だが、あの時は赤くなっていた秋蘭の顔色がすぐに引いたからな。効果は抜群だぞ」

それって、非常に判断に苦しむんですが……。

なんか赤の代わりに青とか紫とかに変わってそうなんですけど……！

「しかし、それ以降は何故か華琳様に止められていたのだ」

ちよっ、華琳さん。

できれば今も止めて〜。

助けて〜。

「さつき風達にも味見して貰ったんだが、みんな一口食べただけで……元氣になって仕事に戻っていったぞ！」

「にゃん……」

う、うん。

それはすごく効き目がありそーだなー。

すごくうれしーなー、なーんて。

ああ、俺、軽く空とか飛べるようになるんじゃないかな。

てか、あいつらがあんな眼をしていたのはその所為か。  
すべてが繋がったよ……。このバーローめ。

「ほら、お前は猫舌だからな。私が冷ましてやったぞ」

そう言つて俺にレンゲを差し出してくる春蘭。

さてと、そろそろ覚悟を決めようか、俺。

こんなんだけど俺も一応は男の子ですよ？

女の子に作つて貰つたものは食べないかねっ！

俺はちらつと土鍋の湯気がもくもくと立っているお粥を見してみる。

たぶん卵粥だと、思う。

黄色つていうか、もう焦げ茶色だけど……その上に三つ葉が一つ乗つていた。

良かった、とりあえずネギではない！

食べられないことはない、と思いたいな。

それにお粥つてそんなにミスしようがないはずだし……。

「ほら、蓮。口を開ける」

こちらに催促してくる春蘭さん。

グイグイつとレンゲを向けてきます。

……よし！

蓮、いきまーす！！

俺は気合いを入れて大きく口を開き、そのレンゲに食らいついた。

.....。

.....。

ああ.....。  
世界はこんなにも.....。

「あら？」

「華琳様、どうしました？」

「突然、蓮の花が落ちたわ.....」

「そうですか.....」

「ええ……」

「蓮を見に行こうかしら（行きましようか）」

嫌な予感がした二人が蓮を見に行くと、何かをやり遂げたような顔をして死んだように眠っていた蓮がいた。

その横にあった空の土鍋を見て二人が胸で十字を切っていたとかいないとか……。

第二十九話 風邪×看病…。それってなんて罰ゲーム？（後書き）

第二十九話。終了です！

いかがだったでしょうか？

今回は蓮君ができました。

作者は風邪が治ったのに蓮は風邪っぴきという……。

あ、それと今回は三点リーダーを二つにしたんですけど、こっちの方がいいですかね？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

**第三十話　出撃！　おにゃんこ警備隊！（前書き）**

マヤエ……。

今日の八時まで何が起こるのか少し楽しみにしてたのに……。  
むしゃくしゃしたので、筆を走らせてみたり……。

では、本編です。どうぞ。

### 第三十話　　出撃！　おにゃんこ警備隊！

どうもみなさん、にゃーっす！

危うく天に召される所だった猫こと蓮です。

いやゝ、久しぶりに里帰りする所だったよ……。

割とマジで。

俺はもうあんな料理と書いてバイオ兵器と読むみたいな食べ物は何度と食べたありません！

しかし、春蘭の料理を食べた次の日に風邪が治るとは思わなかった……。

春蘭はどうだ！　と胸を張っていたけど、多分これはあれだよ。

風邪なんかには負けてる場合じゃないって身体が反応したんだと思うんだよ、うん。

風邪菌なんかより強敵が現れたんだし……。

お疲れ、俺の白血球よ……。

なんていうかあれは荒療治って言うてもいいのかな。

でも良い子のみんなは真似しちゃだめだよ？

帰って来れないかも知れないから。

ダメ！　絶対！！

まあ、俺の消したい記憶は置いておいて。

みなさん、やりましたよ！

遂に俺に仕事が舞い込んで来たんだよっ！

脱ニートなんですよ！　やっふうー！！

さてさて話は今日の朝に遡る。

俺は朝食である二匹のお魚に噛り付いていた。

「にゃん」

むむむ。

今日の焼き加減はまた絶妙だな……。

ふっ、料理長め、また腕を上げおったわ。

この冷めているのに皮のパリパリ感を損なわず……「蓮。必死な解説中に悪いのだけど、ちよつといいかしら？」……今からが良い所だったんだけどな。

俺の華麗な焼き魚の解説は一行にもなる前に終了した。

俺は少し頬を膨らませつつ、話しかけてきた華琳を見る。

「いや、そんなに露骨に残念そうな顔をしなくても……。まあいいわ、ちよつと貴方をお願いがあるのよ」

「にゃあ？」

はて？

華琳が俺にお願いとな！？

おお、これはちょっとしたでも借りを返すチャンスですねっ！

それで一体何でございましょうか。

不肖の身ながら全力でこなして見せますよ！！

俺はふん、と鼻息を吐きながら気合いを入れてみる。

多分、目もキラキラ光ってる。

あつ、食べこぼしが口についてた……。

「もう、そんなに気合いを入れる必要はないわよ。ただ街を案内して欲しいの、今度から風達に街の警備を担当して貰うことになったから」

華琳は軽くため息をつくと布で俺の口を拭って話を続ける。

ううう。これじゃあカツコが付かない……。

「貴方、街の構造に詳しいでしょ？ よく抜け出して遊びに出ているし……」

そう言つと華琳は俺をじとつとした目で見てくる。

むう、いいじゃないか、子供と猫は外で元気に遊ぶものなんだ！と少し言い訳を試みる。

「その所為でこの間、風邪を引いたのは誰だったかしらね？」

うわー、速攻で返されました、ありがとうございます。

俺の反撃終了のお知らせ……。

くっ、それにしても華琳め。中々痛い所をついてくるではないか。

「後、聞いているわよ。街で道案内したり、迷子の相手をしている

そうね？」

「に、にゃん？」

あれれー？

それっていいことだよな？

なのに、なんでそんな怖い顔をしているのかな、かな？

「それは別にいいのよ、良いことだもの……。例え、私が必死に仕事をしている間に食べ物を買って遊んでいても私は何も言わないわ」

こ、言葉になんか棘を感じるなー。

あつ、もしかしたら華琳もおの菓子を食べたかったのかな？

うん、あれはおいしかった……。

俺はあの時に貰ったお菓子の味を思いだして現実逃避を試みる。

「でもね、ひつたくりを捕まえるのはどうなのかしら？」

しかし、それは続く華琳さんの低い声で失敗に終わった。

俺の頭にある文字が浮かんでくる。

霸王からは逃げられない……。

てか、なんでそんなに知ってるのさ？

まさか俺の行動って全部把握されてるの！？

俺が雷に打たれたような衝撃を受けている中、華琳はさらに続けた。

「いい、蓮。貴方は普通とは違いかもしれないけど、猫なの。力も人よりは弱いし、身体も小さい、猫なの。もし相手が攻撃してきたらどうする気だったの？ また怪我するのよ？ だいたい貴方は……」

……」

おお。何故かお説教タイムに入ってる。  
あれか、ストレスが溜まってるのか？  
……もしかして女の子の日なのか？

「蓮、聞いているの！？」

「にゃい」

うわーん。

誰か助けて。

そんなこんなで結局、秋蘭が助けてくれるまでお説教が続きました。  
でも、執務がありますから、蓮へのお話はまた後ほどにして……。  
秋蘭ちゃん……マジ秋蘭、だった……。

「……大丈夫ですか？」

そんなハートブレイクな俺に優しく声をかけてくるのは、警備隊に  
配属になった凧ちゃんです。

ありがと。ええ子やね、君。  
さっきまでは他にも沙和と真桜もいたんだけど、簡単に案内をした  
後に……。

「あつ、これ可愛いのー!」

「こんな所にこの部品が!？」

そんなことを言ってどこかに消えて行きました。

本当にね、こうなんて言うか、自然に消えてたんだよね。

凧ちゃんも注意しようとしたんだけど、あつという間に姿がなかったし……。

あれはある意味凄いのと思うよ、うん。

んで結局、俺は残った凧ちゃんに細かな所を案内することになった。  
ま、後から凧ちゃんが二人に教えて上げればいいしね。

そんなわけで色々、見て回っているんだけど……。

「不審者、不審者……」

いえ、貴方が不審者ですよ？

ほら周りのみんなも引いてるし……。

真面目な子だから仕方がないのかもだけど、これは、ね。

仕方ない、ここは一肌脱ぎますか。  
というわけで、よっと。

（SIDE風）

私達は華琳様の命令でこの街の警備を担当することになった。  
しかし、私達はまだこの街に来て日が浅い。

このままでは警備をするのも困難というわけで、案内をして貰うことになった。

まあ、それは問題ないんだが、何故に案内役が蓮なのだろう？  
蓮というのは華琳様が大変可愛がっている猫だ。

非常に人懐っこく、私が触っても嬉しそうに喉を鳴らしてくる、すごく可愛い猫だ。

頭も良いみたいで、私達の話を理解していて、華琳様達とは話もしている。

何でも時間が立てば話せるようになることだったけど……。

……私ももう少ししたら話せるようになるのだろうか。

それは、少し楽しみだ。

そんなわけで、その猫の蓮に街を案内して貰っている。

正直、猫だからな……. . . . . と思っていたが、意外にもすごくわかりやすい。

人気のある店や珍しいものがある店などを本当に色々していて、し

かも早く行ける道を教えてくれた。

その途中で、真桜達が姿を消してしまったが……制裁は後にして置こう。

今は仕事をしなければ……。

蓮と二人きり？ になった私は尚も案内をして貰っていた。

先ほどとは違って今度は警備の目が通りずらい裏道などに重点を置いている。

本当に色々知っているなと感心しつつ、私は不審者を捜していた。

「……ここも異常なし、か」

異常なしだったので私は一度息をついた。  
すると……。

「うわっ！ いきなりどうしたんですか？」

「にゃん」

蓮が突然、肩に飛び乗って来た。

私はなんとか落とさないように身体の釣り合いを取ると、声を掛ける。

しかし、蓮はこちらを見て鳴き声を上げるだけだった。

「もう……。落ちたりしたら危ないですよ？」

私は文句を言いつつ、蓮を撫でてやる。

うん、良い手触りだ。

これはぬいぐるみとかでは絶対に出世ない気持ち良さがある。そうやっていて気が付いた。

もしかして……。

「もつと力を抜けと言っているのですか？」

「にゃん！」

私が思ったことを口にとすると、蓮は頷きながら鳴いた。そして、ぺろりと頬を舐めてくる。

「……そうか」

力が入り過ぎていたのかもしれないな。

そう言って、先ほどまでの自分の姿を思い出してみる。不審者を探しながら、歩き回る自分……。

……完全に私の方が不審者だった。

「にゃう」

私がかくりと肩を落としていると、蓮が頬を擦り付けながら慰めてくれた。

お礼に首の下を撫でてやると、蓮はコロコロと気持ちよさそうに喉を鳴らす。

なんていうか、すごく和む……。

どのくらいそうしていただろうか。

しばらくすると気分もなんだか持ち直してきた。

よし、また頑張ろう！

……今度は少し、力を抜いて。

私はそう心に誓いながらまた蓮に案内を頼むのだった。

それからも色々と案内して貰うと、もうお昼になっていた。

私達は昼食を取ることに……。

私が辛いものが好きだと言ったら、蓮は隠れた迷店？ を教えてくれるとのことだった。

店の名前は紅州宴歳館、泰山、というらしい。

なんでもその麻婆豆腐がすごく辛いとか何とか。

激辛と評判の麻婆豆腐……すごく楽しみだ。

私がまだ見ぬ激辛麻婆豆腐に心を躍らせていると……。

「食い逃げだー！！」

そんな大きな声が聞こえた。

声の方を見てみれば、少し小柄な男が走っているのが見える。

こんな時に食い逃げなんて……！  
すぐに捕まえてやるっ！

そう思つて私は右手に氣を溜めて……。

「にゃ！」

「なっ！」

……放とうとした時に、蓮が左の肩から目の前に飛び降りて来た。私は慌てて、それを止めると蓮を睨む。

「何をしているんですか！？ もう少し遅かったら……」

「にゃん！」

私が文句を言おうとすると、蓮は私の右手を見て首を横に振った。

右手？ 氣彈？

そうか……。

蓮の意図を考えると、少し頭が冷えて来た。

街中で氣彈なんか撃つたら、他の被害が出てしまう。

この場合は直接捕まえないといけないんだ。

さつきも力を抜こうって決めただけなのに、少し冷静さを欠いてしまった。

……これは要、反省だな。

「蓮、ありがとう」

私は蓮にお礼を言うと、逃げている男を追いかける。

しかし、小柄な上に素早い男はささっと人の波をすり抜けていく。私との距離はどんどん離れて行くばかりだった。

このままじゃ逃げられる。

そんなことが頭に過ぎった、まさにその時。

「おわっ！」

店の屋根の上から、白い物体が男の顔に飛来した。

男はそれに驚いて、その場に横転。

今もその白い物体を取ろうとして……。

って！

「蓮っ！？」

良く見てみれば、白い物体は蓮だった。

どうやら、屋根を渡って追いかけて来たみたいだ。

今も男と揉み合いをしている。

状況はどう見ても劣勢で、男が蓮を強引に引き剥がした。

でも、もう遅いっ！

私はその大きな隙に距離を詰めると、強く拳を握りしめる。  
そして……。

「はあああー！」

氣弾は使わずに男を力いっぱい殴り飛ばした。

倒れた男を捕まえると、街の人々から多くの賛辞を受けた。

新しく警備隊に入ると言ったら、頑張つてねと言われて食べ物まで貰ってしまった。

一応は断ろうとしたが、一緒にいた蓮が普通に貰っていたので私も受け取った。

これだと今日は麻婆豆腐はお預けか……。

私は内心で少しがっかりしていると、肉まんをくれた女将さんが話しかけて来た。

「あの猫の名前は何て言うんだい？」

「名前ですか？ 蓮ですよ」

「そうかい、そうかい蓮ちゃんって言っただね」

うんうん、と頷きながら蓮の方を見ている女将さんに話を聞いてみると、蓮は今までも何人が捕まえているらしい。

何でも猫の獲り物として、最近是有名とかなんとか。

私は蓮を試してみる。

蓮は頭を撫でられながら、貰った肉まんを食べていた。

どうやら街の人達にも大人気みたいだな。

でも、猫の獲り物が有名って……。

警備隊は一体何をしていたんだろうか。

はあ。沙和と真桜を含めて、気合いを入れ直した方がいいな、これは。

私は貰った肉まんを頬張りつつ、そう強く心に誓うのだった。  
あつ、この肉まん、すごくおいしい。

しかし、その後も何度か蓮に犯人逮捕に協力して貰った所為で私達、  
警備隊が『おにゃんこ警備隊』と呼ばれるようになったことはまた  
別のお話だ。

さらに余談だがあの日、蓮は華琳様に……。  
ああ、口に出すのも恐ろしい……。

**第三十話　出撃！　おにゃんこ警備隊！（後書き）**

第三十話。終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

ではでは。

### 第三十一話　みつめるもの。

人は何故戦うのだろうか。

自分のため？　他人のため？  
その理由は様々だろう。

いけないことだとわかっていても……。  
間違っているのだとしても……。

人は剣を取る。

たとえ、その身が他人の血で汚されたとしても何かのために戦う。  
正しいとか正しくないとか関係ない。  
皆、何かを求めて戦い続けるんだ。

捨てればいいってわけじゃない。  
逃げればいいってわけじゃ、もつとない。

前を向こう。

下を見ているも何も始まらないのだから。  
歩き出そう。

立ち止まっても何も出来ないのだから。

戦おう……。

自分の思うがままに、自分の力で……。

俺には戦う力はない。

この身体では剣も握れない。

ならば、しかとこの目で見つめよう。

この戦いを……。

その終末を……。

しかとこの目に焼きつけよう。

数多の者達の生き様を。

そして、その死に様を。

所詮、この身に出来るのは……。

唯、それだけなのだから……。

「蓮ー？ 難しい顔をしてどうしたの？」

少し考え事をしていると俺を心配そうな目で見つめてくる者がいた。  
その子……季衣は声をかけると、俺の頭を優しく撫で始める。

「にゃ〜」

心配させるのも悪いと思った俺は大丈夫だよ、と鳴いてみせた。

それだけで季衣は笑顔に戻る。

いけない、いけない。

どうやら顔に出ていたみたいだ。

こんな子に心配をかけるとは俺もまだまだだと、少し心の中で反省する。

「華琳様達、遅いね」

「にゃあ」

呟くように季衣が出した言葉に俺は一応、同意する。

まだ集合の時間にはかなり余裕あるしね。

もう少し、待ちましようや。

さて今、俺たちが何をしているかというと、広場で華琳達の到着を待っているところだったりする。

これからどこに行くのかと言われれば、その答えはすごく簡単なもので今から黄巾党討伐に出かけるのだ。

先日の事。

華琳の下に朝廷からの使者がやって来た。

そして、告げたのは黄巾党討伐令。

そう、彼らはこの国にとって本物の敵となったのだ。

黄巾党。

最早、大規模となつてしまった賊達の総称。

何でも全員がその身に黄色の布を巻いていたことからそう呼ばれるようになったとか。

その頂点は三人いて、張角、張宝、張染というらしい。

ただ、名前の他に情報は一切なく、どんな姿をしているのか不明とのこと。

さてさて、前置きはこのくらいにして。

なんで俺が季衣と共にこんな所で待っているかというと、俺も今回の討伐についていくことになったからだ。

勿論、俺が華琳についていきたいと言ったら大反対された。

曰く、何を考えているの！

曰く、流れ矢でも飛んできたらどうするの！

いや、まあね。

何か最近の華琳は俺にすぐ過保護だから当然と言えば当然なのだけど……。

そこをなんとか説得……もといお願いして何とかお許しを貰ったのでこうして俺もついていくことになった。

まあ、その代償に俺は着せ替え人形みたいに服とかリボンとか付けられて遊ばれたんだけど……。

それは俺の消したい記憶なのでひとまず置いておこう。

俺と一緒に رفتても邪魔なのはすぐわかっていた。

俺は戦えるわけでもないし、指揮ができるわけでもない。

呉にいた頃なら、士気の向上にもなってただけど……ここではそれもないだろう。

でも……。

それでも俺は見たかったんだ。

この戦いの後に輝くであろう大きな光達を。

そして、この戦いで散っていくであろう小さな光達を。

この目で……この心で……在りのままを見てみたかったんだから……。

「えいつ！」

「にやつ！」

また深く思考に陥っていると、突然ヒゲを引っ張られた。

そのあまりの痛みに少し涙目で季衣を見ると、季衣は俺に笑顔で口を開いた。

「心配しなくても大丈夫だよ！ 黄巾党なんかボク達がすぐにやつつけてあげるから！」

いや、みんなのことを心配していないわけではないんだけど、今は別の事を考えて……。  
つて、痛い、痛い。

「だ〜から、そんな顔しちゃダメなんだよ〜！ 春蘭様も言ってたよ、将は戦う前に暗い顔しちゃダメだって！」

「にゃう〜」

いや、俺は将じゃないんだけど……。

つて、わかった！ わかりました！

もうわかったから、お願い！ ヒゲを放して下さい〜。

ヒゲは猫にとって大事な部位なんだよ！

そんなこんなで季衣と遊び？　ながら暇を潰していると。

「あー、季衣ちゃんに蓮隊長なの！　やつほー！」

「たーいちょう！　何、遊んでんのや？」

もう準備は済んだのであろうか。

沙和達がこちらに声をかけながらやって来た。  
ちなみに風はまだ準備中とのことだ。

「あつ、沙和に真桜も来たんだ。やつほー」

「にゃあ」

とりあえず、俺も季衣に続いてあいさつしておく。

ただね、二人とも。

俺は隊長ではないからねっ！

……たしかにおにゃんこ警備隊と街で言われているらしいけれども

……！

その所為で、警備隊を示すマークに白猫がついてしまったけれども

……！

それでも俺は隊長なんかじゃないんだからね！

俺、猫だからね！

「って言ってもな。特に反対意見は出えへんかったし……」

「街のみんなも喜んでたのー」

「うんうん。あと、華琳様もいって言ってたよねー？」

うぐっ。

それはそうらしいんだけど……。

基本、俺は何も良くて、マスコットみたいなものらしいけどさ。でも猫が隊長つてどうよ？

大体、兵のみんなもノリが良すぎるのではないかね？

反対するでしょうよ、普通はさ。

あの凧も結局は反対しなかったしな。

あと、華琳の奴は絶対に悪乗りだ！

あの時の悪そうな笑顔といったら……。

いかん、忘れよう……。

そんな感じで、三人と一匹に途中で凧が加わり、四人と一匹になった俺たちは軽く雑談したり、遊んだりして時間を潰すことになった。

最近、季衣の猫じゃらしテクがかなり上がっていて、俺はかなり夢中だったところに追記しておこう。

あつ、あと凧の撫でテクもかなりうまくなってたかな。

ただし沙和と真桜、ためーらはダメだね。

おもしろがって毛を逆立たせるのはやめなさいとあれほど……。それ、直すの本当に大変なんだからねっ！

「あんた達、楽しそうね……」

「ん？」

「にゃあ？」

そんな俺達を見て、何時の間にか近くに来ていた桂花が話しかけて来た。

ここ最近はずごく忙しそうで疲れていたが、今日は元気みたいだな。

「桂花ももういいの？」

「ええ、準備はすべて終わったわ。後は出陣してからね」

季衣の言葉に桂花はそう返した。

その顔を見るにもう準備完了のようだ。

兵糧とか軍備の管理とかがつてすごく大事だもんな。

本当に軍師は大変だね。

俺はお疲れの意味を込めて、桂花に擦り寄る。

べ、別に沙和達から逃げたわけじゃないよ？ 本当だよ！？

「もう、あんたのご飯とかも準備しないといけなかったんだからね。感謝しなさいよ」

「にゃ！」

ため息を吐きながら、俺の頬を引っ張る桂花に俺はお礼を言った。  
桂花は本当にわかってるのかしら？ と言いながらも俺を撫で始め

る。

わかってますとも！

桂花、本当にありがとね！

マジで感謝してますよ！

そんな風にみんなで少し騒がしくしていると、集合の時刻となる。

そして、奥から華琳が春蘭と秋蘭を引き連れてやって来た。

これで一応、全員集合だ。

春蘭と秋蘭が所定の位置につくと、俺と遊んでいたみんなも身仕舞いを整える。

場が静かになると華琳はこの場にいる全員をゆっくりと見渡して徐々に口を開いた。

「……全員、揃っているようね。前にも話した通り、私達はこれから黄巾党の討伐に出る。彼らは最早、完全に漢王朝の敵となった」

華琳は淡々と話を進める。

それにはどんな感情も含まれていない。

唯、今の現状を話すだけだった。

「勿論、彼らにも言い分はあるでしょう。彼らだって元を辿れば守るべきこの国の民達。……しかし討伐令が出た以上、討つより他に道はない」

みんなが、その言葉に小さく頷く。

その顔にはそれぞれ決意が浮かんでいた。

「……私は、今更貴方達に覚悟を問う気はない。そんなものはとっくに出来ているでしょうし、そんなものは自分で決めること……私は何も言わないわ」

そう言うのと華琳は一度、目を瞑った。

そして、一呼吸置いてから静かに目を開くと溢れんばかりの覇氣と共に言葉を口にする。

「私が貴方達に言うことは唯一つ。そう、たった一つだけよ。……私について来なさい！」

気が付けばこの場にいる全員が華琳に引き込まれていた。

春蘭も秋蘭も桂花も季衣も。

凧も沙和も真桜も。

みんなが華琳の言葉に引き込まれてた。

俺はそれを傍で見ながら内心で苦笑いを浮かべる。

いや、マジですごい。

本当にこの娘は……。

「私の往く道について来なさい！ 私の覇道を共に歩みなさい！ この戦いは到達点ではない、ただの通過点に過ぎないの。私達の目指す到達点はまだ遠く先にある！」

人を引き付ける魅力がある。

その言葉には力がある。

うん、純粹にすごいと思う。

あれを持ってないものは喉から手が出るほどに欲しいと願うだろう。  
まあ、持っている本人が幸せかはわからないけど……。

「春蘭！ 秋蘭！」

「はっ！」

「桂花！ 季衣！」

「はい！」

「風！ 沙和！ 真桜！」

「はいつ！」

「これより我らは黄巾党を討つ！ 皆、己が力を存分に振るいなさい！」

「御意！」

みんなは華琳の言葉に揃って大きな返事をする、出陣のために自分の部隊へと戻っていった。

俺は華琳の傍にトコトコと歩いていく。

すると、俺に気づいた華琳は俺をそっと抱きかかえた。

「にやう」

みんなすごく気合いが入ってたな。  
頼もしいだろ？

「そうね。私の自慢の部下たちよ」

俺がそう聞くと、華琳は頷きながらそう言った。

それから俺は聞いてみたいことを聞いてみることにする。

何で俺の名前は呼ばなかったんだ？

返事しようと気合い入れてたのに……。

「蓮は私の部下ではないでしょう？　この場で呼ぶ必要はどこにもないじゃない」

それはそうかもだけど……。

なんか仲間外れにされた気分だ。

少し、不貞腐れた俺はぷいっと華琳から顔を逸らす。

それがおかしかったのか、華琳は少し笑うと俺を撫でた。

「ふふふ。さて、そろそろ行かなくてはね。蓮、私達も行くわよ」

そう言うと、華琳は俺を肩に乗せた。

あれ？　こっつて俺の定位置なの？と少しだけ疑問に思ったが、まあ気にしないことにする。

そして、おそらく俺の返事待ちをしている華琳に俺は……。

「にゃん！」

元氣よく返事をするのだった……。

これから行く戦場<sup>さくば</sup>には一体何があるんだろう。  
沢山の別れもあるだろうか。

多くの人が死んでいき、その光を失っていく。  
そこには本当の笑顔はなく、あるのはただ多くの屍<sup>しかばね</sup>だけだ。  
それが戦場。

それこそが戦場という場所なのだから……。

それでも、俺は何かを感じていた。

一つの出会いと……。

一つの再会があると……。

何故か俺はその時、それを強く感じてたんだ。

第三十一話。 みつめるもの。（後書き）

第三十一話。 終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では。

### 第三十二話。 共闘へ（前書き）

デジアドの最終回を十年以上ぶりに見ました。  
最後の曲への入り方とかもうね……。  
すごくいいな〜って思いました！

まあそんなわけで、本編、始まります！

## 第三十二話 共闘へ

対峙するのは大きな黒い影。

その場にいるのは、何故か小さい雪蓮と俺。

えっ!?

これってどんな状況!?

「蓮っ!」

混乱する俺を余所に事態は動く。

黒い影は俺に攻撃を加えて……。

って、マジか!

雪蓮の声を聞いて、俺はそれをなんとか紙一重でかわすことに成功する。

そして、影から大きく距離を取る。

マジでさっぱり状況がわからないんだけど……。

とりあえずはあれが敵だってことはわかった。

さて、どうするか……。

そんな悩んでいる俺に雪蓮が大声を出してくる。

「蓮、超進化よ!」

「はあっ!?!」

え、超進化って何さ?

しかも猫モードなのに言葉を話してるし……。

あと雪蓮、何でゴースト付けてんの？

どうしてデジヴァ ス持ってるの！？

俺ってすでに成熟期だったの！？

これはあれか、あれなのか。

俺は蓮モンってオチなのか？

マジで進化とかしちゃう感じなのか？

強敵相手に進化で逆転……。

うおー！ 何かそれ熱い！

熱すぎるぞ！

無駄にテンションが上がって来た俺に再び影が攻撃……もとい腕を伸ばしてきた。

人の腕……？

その意外なほどに細く白い腕に驚きつつも、もう一度回避した。

「蓮！ そいつには完全体でないと勝てないわ！」

「OK！」

俺は雪蓮の声に大きく頷く。

了解だ！ 任せとけ！

超進化、やってやろうじゃないか！

「蓮、超進化あゝー！！ メタル……」「起きなさい！！」……あれ？

.....。

.....。

「起きなさい、蓮！」

「にゃ？」

そんな大きな声と揺さぶられる感覚を感じると、俺は目を覚ます。  
目の前には少し御立腹の華琳が……。

つて、えええええ！？

夢、夢なの！？

うわゝ、あと少しで完全体になれたのに……！

あれだよ、ギョインギョイン言ってたじゃん。

俺、くるくる回ってたじゃん。

挿入歌とかも流れてたし、右手とかも少しメタル化してたのに……。

ううう。無念だ……。

「いや、何でそんなに落ち込んでいるのよ。私、起こしただけよね？」

「にゃあ……」

朝一番でもものすごく落ち込んでいる俺を見て、華琳は困惑のご様子だ。

わかってるよ、華琳は悪くない。

悪くないんだけど……正直、あと五分待って欲しかった。

そんな朝の一幕を終えて、今日も俺たちは行軍している。  
勿論、あてなく彷徨っているわけではなくて……。

「桂花、あとどのくらいで着くんだ？」

「そうね……。あと半日といった所かしら」

「そうか、今度は少し大きい軍勢なのだろう。ふふふ、腕が鳴るな！」

「はいはい、あんまり張り切りすぎないで。暑苦しいから」

「ん？ 何か言ったか？」

「いいえ、何も」

そんな春蘭と桂花のやり取りでもわかるように、只今、敵の重要拠点を叩きに進軍中です。

敵は一万くらいらしいけど、こっちはそれ以上いるし、それに何より質が違う。

倒せない相手ではないだろう。

そんな風に俺達が先に進んでいると、伝令が走って来た。  
何でもこの先の谷で戦闘が起こっているらしい。

おそらく相手は俺達が狙っていた奴らだ……。

「そう。あそこに目を付けたとなると、官軍ではないでしょうね……。興味があるわ」

報告を聞いた華琳はそう言うと、楽しそうに笑った。

こうして、俺達は戦闘を見に行くことになる。

もし、負けていたら救出できるように準備を整えてから……。

「ほう……」

「これは中々……」

「……………」

谷の下で行われている戦闘を見て、春蘭と秋蘭はそう声を漏らす。  
桂花は唯、無言で戦場を見つめていた。  
おそらく、戦力の分析でもしているんだろう。

「うわー。あの人達、強いのー！」

「せやな。敵が二倍はおるのに優勢や」

「おそらく義勇軍だな、兵の錬度がまだまだ低い。……でも皆、良  
く纏まっている」

「あー、ボクくらいの子もいるねー！」

その他の四人も皆が感心したように戦場を見ていた。  
まあ、季衣は少し違うけれども……。

そして、華琳は……。

「蓮、貴方はどう思う？」

どこか面白そうに、目の前の戦いを見つめながら俺にそう聞いてきた。

俺の意見、ね……。

まだ人数も少ないし、風の言つとおり錬度も低い。  
でも、敢えて言つとしたら……。

面白い、かな。

うん、すごく面白い。

まだまだ小さな光かもしれないけれど、彼らの光はどこか力強い。  
多分、すぐに大きく、そして綺麗に輝くんだろうな。

ああ、できるなら成長する所を近くで見たいくらいだ。

「……随分と買っているのね？　まだ直接会ったわけでもないのに」

それはそうなんだけどね。

でも、きつと……ううん、絶対にそうなるよ。

まあ、あくまでも俺の勘なんだけど……。

俺はそう言つと、もう一度戦場に目を移す。

どうやら戦闘は終了したようで、義勇軍の方で勝ち鬨が上がってい

た。

「まあいいわ。なら、会いに行きましょうか。……私も気になっていたしね」

華琳はそう言うと、使者を向かわせるために秋蘭に指示を出し始めた。

唯、少し機嫌が悪そうだったのは気の所為かな？

ま、気の所為だよね。さっきまであんなに楽しそうだったんだし。

＼SIDE 一刀＼

「みんな、お疲れ様」

「うん、本当にお疲れ様。朱里ちゃんも雛里ちゃんも凄かったね」  
「！ 私なんて何も……」

「と、桃香様は勇敢に戦ってましたよ！ だからこそ、兵のみなさんもついてきたんです！」

「そつだよ、桃香も頑張つてたよ」

俺は雛里と一緒に落ち込んでしまった桃香を慰める。

確かに直接、戦ったわけではないけど、桃香も指示を出したりしていたし。

本当に何もしてないのは俺だよな。

でも、俺に出来る事つて殆どないんだよ……。

武もないし、智もない。

かといって、今は『天の御遣い』つて名乗れもしないし……。本当に役に立ってないよな……。

あつ、でも朱里と雛里には仲間になった時に桃香が話してたっけ。流石に自分の口からは名乗り辛かったからすごく助かった。

もしかしたら、義勇兵のみんなも俺がここにいることに不満があるかもしれないから、色々話をしたりしたんだけど……。

今の所、殆どの人が不満を持っていなかったようで正直、安心した。寧ろ、女の集団の中で一人は大変だなんて言つて笑われた……。

まあ、結構仲良くなることができたし、結果としては良かったかな。やっぱり、男友達も欲しいし……。

そんなわけで、今の所、全然役に立ってない俺だけど……。

このままじゃいけないと思つて、愛紗に鍛えて貰っている。

愛紗は初め、自分達を守るからなくていいつて言つてたけど、そういうわけにはいかない。

俺だって桃香の夢に賛同した仲間だ。

少しでも、みんなの役に立つようになりたい。

今度、時間があつたら朱里達に勉強も教えても貰おう。

一応、文字は白蓮の所で覚えたから大丈夫なはずだし……。

そんな風に俺が考え事をしていると、伝令の人が入って来た。

あの人もこの間、少し仲良くなった人だ。

よく嬉しそうに奥さんの自慢をする。

……何で義勇軍になんかとも思ったけど、そういえば結局、聞いてなかったな。

うん。今度、聞いてみよう。

伝令の人は軽く俺に会釈すると桃香達に伝令を伝える。

何でも官軍らしき人達が俺達に会いに来たとのこと。

その人達は、『曹』の旗を掲げていて……。

つて、曹！？

それ、絶対に曹操だよな！？

治世の能臣、乱世の奸雄だったけ？

うわゝ、有名人の登場だよ。

「ご主人様、どうする？」

「えっ！？」

怖い人なのかなとかやっぱり女の子なのかなとか色々と考えていたら、何時の間にかみんなの視線が俺に集中していた。

ああ、俺の意見を待ってるのね……。

結構、こういうこと多いからもう慣れた。

「うん、会ってみよう。何か用事があるのかもしれないし、協力し合えるかもしれない」

俺のその一言で、曹操さん達と会うことが決まった。

一体、どんな人たちなんだろうな。

少し楽しみだ。

〈SIDE 蓮〉

結局、俺と華琳、春蘭と秋蘭で会いに行くことに。

案内の人に天幕に通されると、そこには数人の人がいた。

桃色の髪の子、黒い髪の子。

赤い髪の子に、帽子を被った二人の子。

そして……白い服を来た男。

その男を見た瞬間に気づいた。

ああ、彼が噂の『天の御遣い』なんだなって。

他の者とは違う独特の雰囲気。

華琳や春蘭達の名を聞いた時の小さな驚きと納得の表情。

まあ、それだけと言ったらそれだけだけど……。  
でも彼がそうなんだなと俺は思った。

俺はさらに目を細めて彼を観察し、そして深く安堵する。

……良かった。

こいつは俺と同じ『天』から来た訳ではないようだ。

……多分、異世界の者。

いや、服装から見て未来から来た者、なのかな。

どちらにせよ、異常な力を持っているわけではないようだ。

「なんだと!!」

そんな大声で俺の意識は現実に戻される。

声のする方を覗いてみると、何時の間にか春蘭と黒髪の女の子が喧嘩していた。

……いや、なんでさ。

もう、すぐにでも自分の得物を抜きそうな二人。

華琳が止めるかなーと思ったけど、どうやら止める気はさらさらないようだ……。

向こうの人達もおろおろしているし……。

はあ、華琳さんや。どうせ力量を測る気なんだろうけどさ、もう少し穏便に行こうよ。

仕方がないので、俺は秋蘭の肩の上から飛び降りる。

あっ、俺、今まで秋蘭の肩に居たんだよね。

そつえば、思考に夢中で自己紹介もしてなかったな。

そんなことを思いながら、俺はトコトコと二人の間に歩いていく。そして……。

「にゃん！」

とりあえず、春蘭の頭に乗ってみる。

おお、高い高い。

見晴らしもいいし、何よりこのアホ毛で遊べる。

うん、ここは俺のベストプレイスと言っても、過言ではないな……。

「れ、蓮。いきなり何を……」

「ね、猫？」

俺の襲来に驚く春蘭と黒髪の子……関羽さん。

とりあえずもう喧嘩をするような雰囲気では無くなったかな……。

そう思っただけが内心、ほっと息を吐いていると。

「わあー！　すごくモフモフなのだー！」

そう言っただけ、何時の間にか俺を抱っこして撫でている赤い髪の子……

…張飛ちゃん。

いや、マジで何時の間にこうなってるのさ。

ザ・ワールドですか？……そうですか。

「いいな。鈴々ちゃん、私にも触らせて！」

そう言っただけさらに劉備ちゃんも追加です。

ええい！　こうなったら何人でも来るが良いわ！

俺は逃げも隠れもしないっ！

「桃香様！　私も……！」

「私もお願いしましゅ！」

そう思っていた頃が俺にもありました……。

さすがに同時に四人はきついです！

ちよ、おま、そこはやめて〜！

つて、関羽さんもすぐく触りたげな表情をしてるー！？

これ以上はご勘弁を……。

「……もう満足したかしら？」

「はい、すみません……」

「まあ、いいわ。蓮の毛並みの良さは私も認める所だから……」

詫びを入れる劉備ちゃんに華琳は仕方がないといった顔をして許す。

いや、被害を受けたのは俺だからね！

しかもそんな俺が悪いみたいない目で俺を見なくても……。

「それで劉備。貴方の目指すものは何なの？」

そんな俺の気持ちを軽く流して、華琳は話を進めて行く。

もう不貞寝してもいいかな……。

「……私は、この大陸を、誰しもが笑顔で過ごせる平和な国にした  
い」

「それが貴女の理想なのね」

「はい。……そのためには誰にも負けない。負けたくないって。そう思ってます」

「……そう。わかったわ」

劉備ちゃんの思いを聞くと、華琳は頷いた。

一応は、合格なのかな。

少し楽しそうな顔をしてるし、多分気に入ったんだな……。

「ならば劉備よ。平和を乱す元凶である黄巾党を殲滅するため、私に力を貸しなさい」

華琳はそう力強く言った。

その威厳に劉備ちゃん達は少し気圧されているみたいだ。

「今の貴女では、独力でこの乱を鎮める力はないでしょう。だけど、今は一刻を争う時のはず……違うかしら？」

「それは……。その通りだと思います」

「それがわかっていいるのなら、私に協力しなさい。……そう言うて  
いるの」

華琳の言葉に劉備ちゃんは困惑したような顔をした。

そして、ちらりと御遣い君へと視線を向ける。

ふむ。やっぱり彼は彼女らの主柱となっているみたいだな。

「……桃香、その申し出を受けよう。協力すればその分、早くこの乱を治めることが出来るはずだ」

「ごしゅ……一刀さん……。はい、わかりました。曹操さんの申し出を受けます」

こうして、その御遣い君の鶴の一声で共闘することが決まった。さてさて、これからどうなることやら……。

華琳ではないけれど、少し楽しみになって来たな。

俺は話をしている華琳達を見ながらそう思っただった……。

まあ、それはいいとして。

これ、関羽さんに張飛ちゃんや。

君たちはいつまで俺を触ってるのかな、かな。

ちゃんと話、聞いてた？

「うむ。これはいい……」

「すごく癖になるのだー！」

ダメだ。こいつ等、早くなんとかしないと……。もうなんだか、猫グツタリ、です。



## 第三十二話　共闘へ（後書き）

第三十二話。終了です！

いかがだったでしょうか？

蓮と一刀君との絡みは次になる……なればいいなーって思ってます。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

ではです。

第三十三話。 願い込めて。（前書き）

少しだけシリアスが続きます。

多分、次くらいまでかな。

ほのぼのが好きな人はごめんなさい。

### 第三十三話　願い込めて。

太陽と太陽が共にある。

それは本来ならあり得ない光景だ。

本当なら太陽は共存できない。

だって二つも太陽はいらないのだから……。

でも、そのあり得ないことが現実には起こる。

だからこそ、面白い。

だからこそ、楽しいのだ。

考えが違う。

思想が違う。

でも、根本にあるものは同じで……。

だからこそ、相容れない。

そんな二人が手を組んだ。

確かに、これは一時的なものでしかない。

でも、それでも、思ってしまう。

彼女達が共に歩めれば、もっと大きなことだって成し遂げられるの  
に、と。

劉備ちゃん達との共闘によって、俺達は次々に黄巾党を討伐していった。

両軍ともに将、兵共に士気が高く、軍師も力も凄まじいものがある。これで勝てない相手は黄巾党にはいるはずもなく、連戦連勝。一度として、俺の下に流れ矢が飛んでくることはなかった。

そんな中、俺はというと……。

「じゃあ……」

「あれれ？ 蓮、どうかしたのだー？」

なんでもないよ、張飛ちゃん。

唯、少し疲れたただけだから……。

こんな風にみんなに撫でられたり、遊んだりしていました。

うん。はつきり言って何もしてないよね、俺。

でも、猫に戦場で出来ることは何もないのです！

所詮は小さな愛玩動物なのですから……。

華琳達に愛でられ、劉備ちゃん達の所で愛でられ、あっちにふらふら、こっちにふらふら。

いやゝ、人気者は辛いなゝ。なんつって。

あっははは！ めっちゃしんどいわ！

とまあ、それは置いておいて。

今日は劳いの意味を込めて、兵達にお酒を振る舞うことになりました。

あつ、勿論、見張りの人とか残念ながら今日飲めない人には明日あげるんだってさ。

まあ、士気の維持とかも大事だしね。

息抜きも少しはしないと、人間ってダメになるっていうし。うんうん、必要必要。

でもさ、何でわざわざ満月の日を選ぶのかな。

これはあれか！？ 飲める状態の俺にお預けをさせるつもりための策略か！？

どんな孔明の罠なんですか……。

あつ、でも諸葛亮ちゃんが悪いわけではないよ。

悪いのはあのドSな華琳さんだもん。

ああやってたまに俺に意地悪をしてくるんだぜ。

本当に泣けてくるよ、チキショー！

そんなわけで、俺は只今、こっそり陣営から抜け出して一人お散歩中。

みんなの騒いでいる声が聞こえない所まで歩いて来ました。

べ、別に悔しくなんてないんだからね！

はい、嘘です……。俺にもお酒を飲ませてください……。

とはいえ、何もしていない俺に吞ませるお酒はないだろうし、仕方がないので散歩をして暇つぶし中なわけです。

何かないかなーと思って周りを見ても何もなく、俺は内心で軽くしよんぼり。

ま、でもそれもたまにはいいかな。

うん、今はこの静かな時間を楽しむとしよう。

そつ心を切り替えて耳を澄ませば、虫達の大合唱と近くの川のせせらぎが聞こえてきた。

上を見れば、夜空に浮かぶどこにも欠ける所のない満月と綺麗な星達が輝いている。

「いい夜だ……」

俺は誰に言うでもなく、そう呟いた。

夜とか闇とかは本当なら恐怖の象徴なのかもしれない。けれど、そんな時には上を見上げて欲しい。

こんなにも綺麗な夜空を見れば、そんな考えはきつと吹き飛ばはすだから……。

自分の悩みとかそんなものも全部、吹き飛ばしてくれるはずだから……。

そんな風に静かな夜を一人楽しんでみると、俺はあるものを見つける。

それは一本の剣だった。

すぐく刃零れはしているし、柄の部分には血がこびり付いている。

決して良い状態のものではないし、元からの質もいいものではない。

でも、俺にはその剣がすごく大切なものに思えた。

俺たちは今日、ここで戦ったわけではない。

つまりは随分前からここに落ちていたのだろう。

辺りに死体がある様子もない。

この持ち手は生きているのか死んでいるのかわからない。

でも、この剣がそのままここで朽ちていくのは何か可哀想に思えた。俺はこの剣に誰かの思いが詰まっているような気がしたからだ。

賊なのか、兵士なのかはわからない。

けれど、誰かがこの剣を取り、誰かと戦った。

それだけはきつと確かなことだ。

善悪とかは言い出したらキリがないけど、それでも戦うことには勇気がいることだと思う。

俺は剣を拾い、手に取ってみる。

ほらこんなにボロボロだけど、まだ折れていない。

もう使えないものだけど、まだこんなにも光ってる。

それがたとえ月の光の反射に過ぎないとしても、こんなに輝けるんだ。

弔おう。

俺はその剣を見て、そう決めた。

勇気ある者達に俺の最大の敬意を表し、戦って今日を生きなれなかったすべての者達を。

みんな弔ってあげよう。

きっとそれが俺にも出来る、生きている者の役目だろうから……。

俺はボロボロの剣を地に突き刺すと、近くに生えていた花をその前に添えた。

酒とかもあれば良かったんだろうけど、生憎と今は何も持っていない。

線香もなく、蠟燭もない。

あるのボロボロの剣と花だけだ。

少し、殺風景だけど許してね。

俺はそう心の中で謝ると、静かに目を閉じ、手を合わせて祈りを捧げた。

すると、どうしたのだろうか。

何時の間にか、虫達の鳴き声が消えた。

川のせせらぎも消え、途端に辺りが静まり返る。

不思議に思つて目を開くと、そこには何とも幻想的な光景があつた。  
俺の目に映るのは一面に浮かぶ光の玉たち。  
俺がそれに驚きつつ、よくその光の玉を見ると、その正体は蛍だつた。

近くの川からやって来たのだろうか。

その蛍達は、俺と墓の周囲を飛び回る。

ゆっくりとした速さで、俺に何かを伝えるように……。

俺はそれを見て、くすりと笑つた。

そつ、君達は喜んでくれているんだね。

「お疲れ様……。良く頑張つたね」

辛かった？ 痛かった？ 苦しかった？

楽しかった？ 嬉しかった？

君達がどんな思いをしたかは俺にはわからない。  
けれど、俺は君達に言いたい。

頑張ったね、と。

俺がそう蚩達に呟くと蚩達が一つ一つ、天へと昇り始めた。

本当にゆっくりとした速さで、でも確実に彼らは天へと昇っていく。

俺はその光景を見つめると、もう一度目を閉じた。

そして、先ほどよりも強く祈りを捧げる。

死した者への安寧と安息を深く願って。

来世で幸せになれますようにと、心を込めて。

＼SIDE 一刀＼

曹操さんとの共闘で俺達は敵の主要拠点を撃破し、その後も次々と勝利を重ねて行った。

曹操軍は流石と言わざる負えないほどに錬度が高く、見習う点が沢山あった。

俺達はそれを少しずつ吸収しながら、戦って、そして強くなっていた。

その日、兵のみんなに英気を養って貰おうということで、本当に少ない量だけお酒を振る舞うことになった。

俺は嬉しそうにお酒を飲んでる人達を見ながら、仲良くなった人達を探していた。

あの人達も喜んでくれているかな。

そんな思いを持ちながら、俺は彼らを探した。

でも、見当たらない。

首を横に振って探してみるが、どこにもいない。

あの伝令の人も……。

あの熊みたいな顔をしている人も……。

いつも苦笑いを浮かべている人も……。

不思議に思った俺は近くにいた兵の人に聞いてみた。  
彼らはどこにいるのか、と。

でも、その答えは……。

俺は意気消沈した顔をしながら、ふらふらと外を歩く。  
耳を澄ませば、兵達の楽しそうな声が聞こえた。

天幕に戻っても良かったけど、桃香達に心配をかけるのも悪いので  
しばらく散歩することにした。

いや違うかな。多分、俺は一人になりたかったんだ。

俺達がもっと良い作戦を立てていれば、彼らは……。

俺達ももっとうまくやれていれば、彼らは……。

頭の中で、色んな考えが浮かぶ。

でもその答えが出ることは結局、一度もなかった。

気が付くと、少し開けた場所に出ていた。

もう兵達の声も聞こえない。

……どうやら、結構遠い所まで来てしまったみたいだ。

こんな所に一人でいるのはマズイなと思った俺は、踵を返して戻ろうとした。

そして、目にする。

月明かりに照らされた誰もいない場所。

虫の鳴き声と川の音しか聞こえない、そんな静かな場所で一人。  
一人、何かを祈っている人がいた。

その人の前には一本の剣が土に突き立ててあって、花も置かれてい  
る。

多分、お墓だろうか。

そんな簡素で、拙い墓にその人は静かに祈りを捧げていた。

キラキラと光る長い白髪。

月夜に照らされたその光景は、すごく綺麗で……。まるで絵画か何かを見ているようだった。

どのくらい、その光景を眺めていただろうか。

気が付くとその人は振り返り、俺に話しかけて来ていた。その真っ赤な瞳で俺を見つめながら……。

こんばんわ、と。

第三十三話。 願い込めて。 (後書き)

第三十三話。 終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では！

第三十四話 天が重なる時（前書き）

前回に続いて一刀君視点です。  
少し長くなってしまいました……。

### 第三十四話 天が重なる時

犠牲。

それは目的のために払われる大きな代償。

確かにそれは仕方がないのかもしれない。

必要なことなのかもしれない。

でも、俺は受け入れたくない。

認めたくないって、ない。

そんな悩んでいる時、俺はあの人に出会ったんだ。

月が夜を照らすそんな夜に……。

「こんばんわ」

「え？ あつ、こ、こんばんわです」

俺は衝撃を受けた。

綺麗な髪で、綺麗な赤い目をしていたその人は……。  
声でわかったけど、男の人だった。

うわー。

男の人に見惚れてたなんて……。  
なんかすごくショック……。。

俺がそんな風に内心で落ち込んでいると。

「月が綺麗な夜だね……。うん、とても綺麗だ」

その人は俺の様子を気にした素振りも見せずにそんなことを言ってきた。

俺も釣られて、空を見上げる。

月明かりがいつもより明るいなと思っていただけ、どうやら今日は満月だったみたいだ。

大きな丸い月が空には浮かんでいた。

まるで、手を伸ばせば掴めてしまいそうな気になるほど、その距離は近く感じる。

「それで？　こんな綺麗な夜に君は何故、そんな顔をしているのかな？」

二人で少しの間、月を眺めているとその人は話しかけてきた。そして、思い出す。

俺が何でここまで来たのかを……。

それを考えると、また自分の顔が曇ったのがわかった。

でも、その人の独特の雰囲気の所為だろうか。

気が付くと、俺はまだ会ったばかりの人なのに話し始めていた。

「……死んだんです。俺が知らない間に、仲良くなった人達が……みんな死んでいたんです」

「……そう」

その人は唯、一言そう言つと、悲しそうな顔をして黙り込んだ。辺りが途端に静かになる。

俺はそんな沈黙に耐えきれなかったように言葉を続けた。考えれば、考えるだけわからない。

「俺は……俺たちは、みんなが笑つて暮らせる国にするために立ち上がったんです。そのはずだった……。そのはずなのに……！」

思い出す。

彼らの居場所を聞いた時の兵達のあの顔を……。

俺が辛そうな顔をした時に言われた、貴方が悪いわけではないというあの言葉を……。

「……何でなんですかね。何であんなにいい人達が死んだんだろう。何で……」

あの自慢げに奥さんのことを話していた人が……。

あの笑顔が似合う人が……。

あの歌がうまかった人が……。

なんで……。

なんで死ななきゃいけなかったんだ！

俺は手を力一杯握り締めていた。

本当に痛いくらいに、握り締めていた。

そんな俺を見て、その人は言った。

「君は本当に誰も死なないって思っていたの？」

俺は何も言えなかった。

わかってた。いや、わかってたつもりだった。  
でも、心のどこかで多分、俺は……。

「だとしたら、それは甘すぎる考えだ。戦えば死ぬ人が出るのは当然。そして、その所為で悲しむ人が出るのもまた当然だ」

「……………」

「それに人は簡単に死ぬ。食事をしなければ死んでしまうし、病気に掛かっても死んでしまう。剣で斬られても、槍で貫かれても……。本当に簡単に、本当にあっさりと……人は死ぬ」

そんな俺にその人は容赦なく言葉を重ねる。

決して大きな声ではないけど、俺の耳にはその人の言葉が重く響いた。

「ここは戦場……人が誰かを殺し、殺される、そんな場所だ。それなら身近な人が死ぬことだって珍しいことじゃない」

「でも……。でも！」

納得できない。

あの人達だって、もつといい未来があつたはずなんだ！

みんなで笑えるような、そんな未来があつたはずなんだ！

それなのに、それなのに……！

「……納得なんてしなくてもいいよ。でも理解はしないとね。もう君は傍観者では居られない。もうお客さんをしていられる立場ではないんだよ」

「俺は別に……！」

そんなつもりは……。

……本当になかったと言えるのか？

突然、知らない世界に飛ばされて、『天の御遣い』とか言われて……。

どこかゲーム感覚ではなかったか？

否定したい。

そんなことはないって全力で否定したい。

でも、その考えを俺は完全には否定出来なかった。

「君はもつと自覚すべきだ。君の行動、君の言葉、その一つ一つで人の命は消える。敵のも味方のも簡単に消してしまう立場に君はいるんだ」

「……………」

「辛い？ 苦しい？ でも、それが夢を見せた者の……人の上に立つ者の責任だ。それは君が自分で背負うしかない」

夢を見せた者の責任……。

俺の責任……。

でも、彼らは俺達に、いや、俺にどんな夢を見たんだろうか。それがわからなかった俺は知らずに言葉を口にしていた。

「俺が見せた夢……………」

「そうだよ。君は何故、彼らが戦ったと思う？ 死ぬかも知れないのに何故、彼らは戦ったと思う？」

「それは……。食べ物が欲しいからとか？」

「勿論、それもあるかもね。でもきつと大半の人は違う」

俺の答えにその人は一度笑うと、俺に優しく話し出した。

まるで、どこか出来の悪い生徒に教えを与える先生のように……。

「食事が欲しいだけならば、義勇軍に入る必要はない。それこそ、どこかの正規軍にでも入った方が全然いいはずだ」

「……それじゃあ」

「……彼らはきつと君達の夢に自分の夢を重ねたんだよ。君達のみんなが笑って暮らせる国にするっていうすごく大きくて優しい夢に……」

「俺達の夢に……」

そうだったのだろうか。

だからあの人達は戦ったのだろうか。

故郷に大切な人がいるのに、それでも戦ってくれたのだろうか。

その為なら死んでも惜しくないと思ってくれたのだろうか。

そう思うと、少し涙が出て来た。

「だから、決して彼らの死を無駄なものだなんて思ってはダメだ。その考えは彼らへの……君達に協力してくれるすべての者への侮辱にしかないのだから」

その人はそう言うと、俺に手拭いを差し出してくれた。

俺はそれを受け取り、目元を拭くとそう言った。

「……はい。でも重いですね……」

重い。

すごく重い。

期待をしてくれるのは嬉しいし、同じ夢を見てくれるのも嬉しいけど……。

今の俺には重すぎるくらいだ。

「そうだね。本当に俺達には重すぎるくらいだよ……。死した者の願いを引き継ぐのは……」

その人はそう言うのと、重く息を吐いた。

もしかしたら、この人も何か背負っているのかもしれない。

「でも、それは俺達にしかできないことだから……。だから俺達は、それを抱えて生きていかなくてもいいけない。願いを叶えるまでか、死ぬまでかはわからないけれど……。それから一生逃げられない…… 逃げるつもりなんてない」

最後の方はどこか自分に言い聞かせるように、その人は言った。

その目はどこか遠くを見ているように感じた。

でも、それはほんの一瞬のことだ。

その人はゆっくりと俺を見つめると、静かに口を開く。

「君には戦ってでも、叶えたい夢や願いはある？」

俺はその問いに答えられなかった。

確かに桃香達の夢に賛同したけれど、それは本当に俺の願いなのか

な。

正直、良くわからない。

……いや、多分違う。

多分、俺は流されただけだ。

何もわからないで、何も知らないで……。

そんな状況に流されたままで、彼女達の願いを聞いた。

そこで俺は憶れたんだと思う。

彼女達の夢が綺麗だったから……。

人を助けたっていう願いが綺麗だったから……。

あの夢を語る時の、あの目がとても澄んでて綺麗だったから……憶れた。

俺にも何かできるかもしれないってそう思ったから……。

「……わかりません。ううん、きっと俺にはそんな夢はないんだと思います」

だから、俺はそう言った。

多分、俺の夢は借り物なんだと思う。

俺が心の底から願った夢ではないのだから……。

「そつか。じゃあ何で君はここにいるの？」

「それは……」

他に行く場所がないから……。

いや、それは違うのかな。

この国の事は少しはわかったし、言葉も話せる。字も読めるようになった。

今の俺なら、ここから逃げ出して働き口を探すことはできるだろう。苦しいかもしれないけど、多分生きていくことは出来ると思う。

ならば何故、俺はここにいるんだろう？

ここに居たいって思うんだろう？

そう自分に問いかけてみると、頭に浮かんできたのは桃香達の顔だった。

以前、村を助けた時に浮かべたあの嬉しそうな顔だった。

そうか、多分俺は……。

俺は真っ直ぐにその人を見ると、言葉を紡ぐ。

「俺は多分、桃香達が夢を叶える所が見たいんだと思います。あの子達が夢を叶えて嬉しそうに笑ってる所が見たいんだと思います」

言葉にすると、それがずとんと胸に落ち付いたのがわかった。

そうだ。俺はあの子達の嬉しそうな顔を見たいんだ。

甘いつて言われてもおかしくないような夢を抱えて、そのために一生懸命頑張っている彼女たちの笑顔が見たいんだ。

そのためだったら……。

きつと俺も戦えると、そう思う。

「顔付きが変わったね。うん、とてもいい顔だ」

その人はそう言うと、どこか嬉しそうに笑った。

一瞬だけ、その顔を見て心臓が跳ねた。

心臓がドクンドクンと激しく音を立てるのも感じる。

もしかしたら、顔も赤くなっているかもしれない。

な、何を考えているんだ、俺は……。  
この人は男なんだぞ！

俺が必死に心を落ち着かせていると。

「じゃあ最後に一つだけ聞こうかな。彼女たちに君は何をする？  
何をしてあげる？」

その人はそう聞いてきた。

俺がみんなにしてあげられること……。

武もない、智もない。

あるのは未来の知識だけだけど……。

それも確かではないし、何か違うような気がする。

結局、答えの出なかった俺は素直にこう言った。

「……それもわかりません。きっと俺に出来ることなんて何も無い……」

悔しそうにそう言った俺にその人は一度、苦笑した後。  
その顔を真剣なものに変えて言葉を放った。

「ははは、そんなに悩まなくていいよ。すごく簡単さ、傍に居てあげればいいんだよ」

「傍に、ですか……？」

「そう。唯、傍に居てあげればいいんだ。傍に居て、一緒に悩んで泣いて、一緒に苦しんであげればいいんだ」

「一緒に……」

それなら確かに俺にも出来ると思う。  
けど、本当にそれだけでいいのかな。  
もっと、こう……。

「ううん、初めはそれだけでいいんだよ。……それだけでもきつと  
彼女達は頑張れるから」

彼女達は強いからね、俺達なんかより全然。

そう続いたその人のその言葉にはすごく賛同できた。  
みんなすごく強い。

その力も……その心も……。

「……本当にそれだけでいいんですか？」

「うん、それだけでいいよ。それはきつと君にしかできないことで、  
それが支えになるはずだから……」

俺にしかできないこと、か。

正直、まだよくわからない。

けど頑張ってみよう。みんなを支えられるように。

勿論、他のことも出来るように頑張るつもりだけど……。

「さてと、随分と遅くなっちゃったね。俺はそろそろ帰るかな。ま  
た心配かけるとマズイし、何より後が怖い……」

「あつ、はい。あの！ 本当にありがとうございました！」

そう言つて、その場を去ろうとするその人に俺はお礼を言う。  
何か状況が変わったわけではないけど、自分の心は決まった。  
本当にこの人と話が出来て良かったと思う……。

頭を下げる俺にその人は一度振り返ると。

「悩める男児よ。貴方の往く先に幸多からんことを……」

そう呟いた後に、ひらひらと手を振って去っていった。  
俺はその姿が見えなくなるまで見送った後に気が付く。

「あつ、名前……。聞いておけば良かったな……」

はあ……。何で聞かなかつたんだろう。

俺は少し、その後悔した。

できればもう一度会つて、もっと色々話したい。  
あつ、でもこの場に居たつてことは曹操軍の人なのかな。  
うん。それならまた会えるかも……。今度、聞いてみよう。  
俺はそんな風に軽く考えると、自分の天幕へと戻っていく。

先程までとは違うどこか晴れ晴れとした気分だった。

勿論、死んでしまったあの人達のこととは忘れない。

……これからも死ぬ人が出るのかもしれない。

でも、俺はもう決めたから……。

あの人達に恥じないように、前に進むつて決めたから……。  
だから、ありがとう。

そして、さよなら……。

後日、桃香達にあの人のことを話すと、なんかすごく睨まれた。

愛紗曰く、非生産的だとか何とか。

朱里達は、はわわーとかあわわーとか言っただけでなんか楽しそうにしてたけど、どうしたんだろう？

あと、曹操軍の兵士に聞いてみるとそんな人は居ないと言われた。将にも聞くと、詳しく特徴を聞かれたので答えた。

するとまたあの曲者が！　と言っただけでどこかに行ってしまった。

それから曹操軍は少しの間、騒ぎになっていたみたいだったけど……。

本当にどうしたんだろうか？

～SIDE蓮～

「お勤め、御苦労さま」

「なんだ見てたのか？」

御遣い君の下を去ると、ひょいっと華琳が出て来た。

……どうやら全部見ていたらしい。

「ええ、しっかりとね。中々良かったわよ。まるで先生のようにだったわ」

「茶化すなよ、唯の年寄りのお節介だ」

何処か意地悪そうに笑う華琳に俺は少し憮然とした表情でそう返す。別に後悔はしてないけど、人に聞かれていたのは少し恥ずかしい。そんな照れを隠すように俺は華琳に言った。

「盗み見なんかしてないで、華琳も男でも作ったらどうだ？」

そうすれば、俺も少しは安心できるんだけどな。

あつ、あの子はどうだろうか。

……いや、ダメだな。

あの子は劉備ちゃんの所に居るし、それにそもそも……。

「嫌よ、私は男が嫌いなもの」

「あらら、それは残念……」

この様だしな。

桂花をほど毛嫌いしているわけじゃないけど、華琳も男があんまり好きじゃないからな。

優秀な奴ならいいんだろうけど、華琳のお眼鏡に適う奴はそうは居ないし……。

うむ。本当に困ったものです。

「それに私は……」

「ん、何か言った？」

そんな風に考え事をしていたら華琳の言葉を聞きそびれてしまった。まあ、小声だったし、独り言なのかな。

「何でもないわ。それより、付き合ってくれるんでしょう？」

華琳は首を振りながらそう答えると、その手に持つお酒を見せて来た。

うん。何でもないのなら別にいいのかな。

それより今はお酒だよね！

だから俺はそう言った。

「ああ、喜んで……」

### 第三十四話　天が重なる時（後書き）

第三十四話。終了です！

いかがだったでしょうか？

お説教じゃなくて促すような感じにしたかったんですけど……。  
微妙かな……。

むう。力不足です……。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では！

第三十五話。ワルイユメ。(前書き)

華琳視点のお話です。

### 第三十五話　　ワルイユメ。

暗い……。

この場所はすごく暗い……。

暗くて、何も見えなくて……。

でも、後ろから何かに追われているような気がして……。

その所為で止まることも出来なくて……。

私は仕方なく、その暗闇の中を進んでいく。

この終わりがあるのかもわからない行路を唯、一人で歩いていく。

そこに寂しさがなかったと言えは嘘になる。

でも私はその時、そうすることしか出来ることがなかった。

どのくらい進んだのだろうか。

気が付けば、私は一人では無くなっていた。

私の後ろに、二つの小さな光が付いて来ていたのだ。

初めは自分だけじゃないと知って、すごく嬉しく思った。

でも、途中で気付いてしまう。

その光は私の後ろについてくるだけ……。

ついては来るけど、私の前や隣には居てくれない。

決して私の前や足元は照らしてくれない。

そう思ってしまうと、私はまた少し寂しくなった。

また時間がしばらく経つ。

私の後ろの光はその数を増やしていた。  
最近はその光達をすごく愛おしく感じる。  
私が頑張らなくてはと、思ってしまう。  
だから、気が付かなかった……。  
いや、気づいて知らぬ振りをした。  
私の身体はもう傷だらけだったということに……。

そんなある日、私は一匹の猫を助ける。  
死にかけの猫を拾ったのだ……。  
本当に唯の気紛れだった。  
別にしなくてはいけないことでもなかった。  
でも、私はあの子を助けたと思った。  
その選択は今でも間違っていないかったと心からそう思っている。  
だってその子は……彼は……。

「華琳は間違ってなんていない……」

そう言っつて、私を抱きしめてくれた……。  
この傷だらけの私の傍に居て、私を肯定してくれた……。  
後ろじゃない、ついてくるだけじゃない。  
そんな暖かな光を私は手に入れた。  
たとえ、それが仮初めのものだとしても……。  
私はもう手放したくない。  
そう、強く思った。

なのに、何故？

何故、こうなったの？

ねえ、どうして……！？

どうして貴方は私をそんな目で見つめるの……！？

私は目の前に立っている男にそう尋ねる。

いつもは笑顔で傍に居てくれた白い人。

でも今は笑顔を浮かべておらず、その服も白い髪も全部、真っ赤な何かで染まっていた。

その人は私に怒りの目を……それと同じくらい悲しそうな目を向けると、よくわからない言葉を返して来る。

「華琳。私は君が………とは思っていないよ。でもね、私は………なんかじゃない。……を傷つけられて許せるほど、私は優しくはない！」

そう言うと、その男は私に剣を向ける。

それと同時に、私に向けて殺気が放たれた。

今まで感じたことのないようなすごく強烈なものが私を襲う。

言葉の大事な部分は聞こえなかった。

一体、何があったの？

何が彼をそこまで怒らせたの？

……私は彼に何をしたの？

そう問いかけてみるが、その答えを私は持っていなかった。いや、持っていたとしても……。

……彼は止められない。  
そう感じた。

「華琳……いや、曹 孟徳！ 報いはその身で受けて貰うぞ！」

彼はそう言うと、剣を振り抜く。

迅速ともいえるその速さに私は為す術がなく斬られ、その場に倒れ伏した。

激痛が私を襲う。

痛い……。

斬られた傷が……。

そして心が、痛い……。

どうしてこんなことになったんだろう……。

私は彼と一緒に居たいだけなのに、どうして……？

私がそんなことを思っていると、彼は私を見下ろしながら呟いた。

「……出会わなければ良かった。出会わなければ、こんなに辛い思いをしなくても良かったのに……。君を斬らなくても良かったのかもしれないのに……」

彼は泣いていた。

私を斬ったことを後悔しているのだろうか。

そうだとしたら、少し嬉しい。

でも、その前の言葉は頂けなかった。

出会わなければ良かった、ですって……？

何を言っているの？

私はそんなことを微塵も思っていない！

貴方と会えて、貴方と話して、貴方と触れ合って、私は本当に良かったと思うてる！

だからそんなバカなことを言わないで！  
私達の出会いを否定しないで！

そう言っただけでよかった。  
全力でそう言いたかった。

でも私の口は何も言葉を発しない。  
私がそれを心底悔しく思っていると、視界がどんどん霞んで行くのを感じた。

待つて！

せめて一言だけでも！

そんな私の願いが通じることはなく、私の視界は暗転する。  
そして結局、私は最後まで泣いている彼に何も言うことは出来なかった。

「んっ、うん？」

眩しい。

私が天幕で目覚めた最初の感想は、それだった。  
しかし、今日はいつともよりも頭が重い。  
何か大事な夢を見ていたような気もするのだけれど、何も思い出せない。

私は何度か頭を横に振ると、隣で寝ている白い猫が目映った。

「にい……う」

そう寝言を言うと、その猫は身体をさらに丸める。

そんな猫の……蓮の姿を見て、私は頬を緩めた。

何というか、ものすごく幸せそうだ。

口を少し動かしているから、どうせ食べ物の夢でも見ているのだろう。

私はそう思いながら、蓮の身体を優しく撫でた。

すると、理由はわからないけれど、苦痛だった頭の重さがすつと軽くなっていく。

でもその代わりに……。

「あれ？」

蓮を撫でていると、自然と涙が溢れて来た。

どうして涙が出てくるのだろうか。

別に泣くようなことは何もないはずなのに……何故？

理由がわからない。

でも涙は止まらない。

拭っても拭っても、際限なく溢れてくる。

私はどうしたのだろうか。

何で？ 蓮をいつものように撫でただけなのに……。

いつもと変わらないはずなのに……。

そのはずなのに……。

その時、私の頭にズキンとした痛みが走った。

そして、一瞬だけ泣いている男の姿が脳裏に映し出される。

「今のは……蓮？」

私は思わず、そう呟いた。

今の男は間違いなく蓮だったと思う。

でも蓮は何であんな顔をしていたんだろうか。

あんな血塗れの姿で、どうしたのだろうか。

この止まらない涙と何か関係があるのだろうか。

いくら考えてもその答えが出ることはなかった。

……いけない。

優しいあの子達の事だ。

目を赤くしている所などを見せたら、心配してしまう。

急いで涙を止めないと……。

止まらない涙を私が必死に止めていると、りと綺麗な鈴の音が聞こえた。

そして、暖かい何かが私に触れてくる。

私が泣きながらそちらに視線を向けると、そこには蓮がいた。

「にゃ〜？」

そう鳴いて、心配そうな顔をする蓮。

泣いている私を元気づけるように、頭を擦りつけて来る。

「大丈夫よ。少し、目に何か入ったみたい……」

私は蓮にそう言うが無理矢理、笑って見せた。

蓮に変な心配をかけたわけではない。

そんな気持ちで笑ったのだけど……蓮にそんな嘘は全く効果がなか

ったみたいだ。

蓮は少しの間、私を見つめると、何も言わずに私の膝の上に乗ってくる。

そして私に背を向けると、何もせずに唯、座っていた。

……蓮はいつもそうだ。

いつも、私がして欲しいと思うことを平然とやってくれる。

何でもないような顔をして、いつも私の隣に居てくれる。

だから、私はいつも……。

私は静かに蓮を後ろから抱きしめた。

暖かい……。

本当に暖かい。

猫は人より体温が高いと言うけれど、それだけではないように感じる。

きつと蓮だから、こんなにも暖かいのだ。

蓮が傍に居てくれるから、こうして安心できるのだ。

気づけば、私の涙はもう止まっていた。

あんなにどうしようもなかったのにいとも簡単に止まってしまった。

そんな自分に思わず、笑いが込み上げてくる。

…… 本当に現金なものだ。

少し蓮とこうしてただけで、もう曇っていた心が晴れている。

きつと私は弱くなってしまった。

蓮と出会ってからの私は……。

本当に弱くなってしまったと思う。  
多分、以前の私が見たら、嗤ってこう言っただろう。  
貴方は誰、と。

でも、私は今の自分が嫌いではない。

いや、寧ろ好ましいとさえ思っている。

感情を曝け出せる相手がいる今の私が好きだ。

その人の前では、何も隠さなくていい……。

曹 孟徳ではなく、華琳でいれる……。

だから、私は以前の私に笑顔でこう言いたい。  
羨ましいでしょう、と。

「にゃー」

そんな考え事していたら、何時の間にか蓮が私の方を見ていた。

その目も言葉も泣き止んだ私を見て、どことなく嬉しそうだ。

そんな蓮を見ると、私もなんだか嬉しく感じてしまう。

私にこんな風に思わせる蓮がすごいのか、私が変わなのかはわからない。

いや、もう嘘をつくのは止めよう。

多分、私はこの子が……蓮の事が好きなんだ。

ううん、多分なんかじゃない。

きっとそうなんだ。

私はそうはつきりと自覚出来る。

蓮の笑顔も……。

蓮の声も……。

蓮の温もりも……。

そう、全部が好きだ。

蓮のすべてが大好きだ。

私はそこまで考えて、自分の顔がかあつと赤くなるのを感じた。心臓もドクドクと煩い位に音を立ててくる。

「にゃん？」

どうしたの？ と蓮が聞いてくる。

さすがに貴方の所為よ！ と文句を言うことは出来なかった。でも、その代わりにもう一度、蓮を抱きしめてみる。

蓮のこの暖かさも。

この匂いも。

この感触も。

全部が私を包み込んでくれる。

私が抱きしめているのに、包み込んでくれる。

蓮とのこんな時間が堪らなく、嬉しい。

幸せだと感じれるこの時間が堪らなく、愛おしい。

私は弱くなった。

そう、蓮の所為でこんなにも弱くなってしまった。もう蓮が居ないとダメだと思えるくらいには……。

だから責任は取って貰わないと……。

ねえ、蓮。

私は貴方を手放したくはないの。

どれだけ貴方があつちを求めているとしても、私は少しの時間も手放したくないの。

心からそう思ってしまったの。

だから、私は決めたわ。

本当は一度返して、後から取り戻しにいく予定だった。

だけど予定を変更して、勝負をする事にしましょう。

名を上げると同時に蓮を賭けた、大勝負を……。

だから、孫策。

覚悟して置きなさい。

貴女に蓮は返さない。

私は絶対に負けない……。

### 第三十五話。　ワルイユメ。（後書き）

第三十五話。　終了です！

いかがだったでしょうか？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では！

### 第三十六話　暴走もーど？　（前書き）

今日はマンキンの読切りが出しましたね。

まだ読んでいませんが……すごく懐かしいです。

単行本とか実家にあるな。

あつ、あと、ニコニコの方でアンナが歌っていたのは御本人でしたね。投稿日にマイリスにしていた作者は勝ち組です（笑）

まあ、何が言いたいのかというとですね。

マンキン、復活おめでとう！　ってことです。

あゝ、五目ずしが食べたい。

でもマグロの目は勘弁な。

さてと無駄話はこのくらいにして、本編の始まりです。

今回は愛紗視点のお話。

若干のキャラ崩壊があるかも……。

### 第三十六話 暴走もーど？

本当に唐突で突然ではあるが、私には最近悩みがある。  
それはもうすごく大きな悩みがある。

私達が曹操軍と共闘を始めて早数ヶ月。

初対面でいきなり曹操に勧誘されたり、夏侯惇と刃を交えそうにもなった。

でも、それはもういい。

それからしばらくした後、ご主人様が嬉しそうな顔をして満月の夜に出会ったという人の話も、まあいい。

いや、本当は良くはないのだが……まあそれもいい。

今、私が悩んでいるのは……。

「ほら、蓮ちゃん。これもおいしいよ」

「桃香様。それはまだ熱いです！ 蓮ちゃんにはこちらを！」

「ええっ！？ そうだったの！？ ごめんね、熱かった？」

「にゃん」

「そっか まだ食べてなかったんだね。よかった」

「猫は熱いものが苦手といえますから……。おそらくは自分で判断したのでしょ」

「へえ。蓮ちゃんは本当に賢いんだね」

「蓮は本当に頭がいいのだ！ この間、鈴々が……………」

ああ、すごく楽しそうだ。

桃香様も、鈴々も、朱里も雛里も……。本当に楽しそうだ。

ほら、あんな風に皆で蓮を愛でて……。

私は自分の手を見つめる。

あのモフモフとした感触。

あのくせになる毛並み。

あの絶妙な柔らかさの肉球。

ああ、私も触りたい。

私がそんなことを考えていると、何時の間にか隣に居た（注：元から居ます）ご主人様が突然、話しかけて来た。

「愛紗、どうしたんだ？」

「ひゃっ！ い、いえ、別にまた蓮を触りたいなどと私は思っていないですよ！？」

「いや、俺は何も言っていないんだけど……」

私はご主人様に何とか言葉を返し、うまくごまかすともう一度、蓮を見してみる。

蓮はまた桃香様に撫でられていた。

目を細めて、喉をならしてすごく気持ちよさそうな顔をしている。

それを私はいいなと唯、眺めることしかできない。

そう。

私の悩みというのは他でもない蓮のことなのだ。

蓮との初対面の時。

私は不覚にも、皆にらしくない態度を見せてしまった。

初対面の相手が目の前に居るのにも関わらず、蓮を撫でることに意識がいつてしまい、護衛の任を放棄してしまった。

それは武人として大変に恥じることだ。

なので、私はそれから蓮を愛でることを止めた。

止めたのだが……。

「あははは！ もう蓮ちゃん！ くすぐりたいよ」

「にゃあん！」

羨ましい……。

桃香様と蓮との触れ合いを見て、私は心底そう思った。

ご主人様達は、こんな私に別に撫でてあげればいいのにと仰るが、それは出来ない。

私は武人なのだ。

武人はもつと毅然たる態度であらねばならない。

鈴々は……まあ置いておこう。

「少し出てきます」

私は一言、皆に声をかけると天幕の外に出て行った。別に、居づらかったというわけではないが……。唯、なんとなくあの場に居たくなかった。

頭を下げてくる兵達に軽く返事しながら私は一人、離れた場所に行った。

そして、その場にあつた石に腰を落とすと深いため息を吐く。

「何故、私は皆のように出来ないのだろうか……」

よくご主人様にも言われる。

もう少し、肩の力を抜けばいいのにと。

でも、私は簡単にそうはできない。

これが性分というものののだろうか。

仕方のないものだとしても、そんな自分の性が少し恨めしかった。

「……いいなあ」

できることなら私も全力で蓮を愛でたい！

あの毛並みを……。

あの肉球を……。

モフモフしたい！

でも私は……。

「はあ」

「あれ？ あんなとこに関羽さんがいるのー！」

「ほんまやな。ため息なんてついて、どないしたんやろか？」

「何か悩みでもあるのではないか？ そっとして置いてあげよう」

自分を見ていた人が居たことなど私が知る由もなく、私はまた深いため息を吐いた。

ため息は幸せが逃げると言うが、それは違う。

幸せではないからため息が出るのだ。

そんなわけのわからない思考をしながら、少しの間、ぼーっとしている。

「あら？ 関羽じゃない。こんな所でどうしたのかしら？」

何時の間にか隣に居た（今回は正しい）曹操殿が話しかけてきていた。

いかんいかん。

周囲への意識が疎かになっていたようだ。

「曹操殿……。いえ、別に何でもありませんよ」

「……貴女は嘘をつくのが下手ね。とてもそんな風には見えないわよ？」

私は曹操殿に何でもないと言ってみたが、どうやら曹操殿には通じなかったようだ。

ご主人様や桃香様には通じるのに、やはり曹操殿は只者ではないらしい。

ばれているのでは仕方ないので、私は思い切って曹操殿に自分の悩

みを話してみた。

曹操殿は頭もいらしいから、良い解決策が出るかと思っていたのだが、その答えは……。

「ぷつ、くく……。あははは……！」

大爆笑だった。

目には涙も浮かべ、お腹を抱えているその様子は普段の凜とした曹操殿とは別人のようにも思える。

その様子には少し驚いたが、自分の悩みを笑われては私も面白くない。

「曹操殿！ 人が真剣に……！」

「だってあの関羽が……。いえ、ごめんなさい。でも貴女がそんなことで悩んでいるとは思わなかったから……。ふふふ……」

私がそう言うと、曹操殿は謝って来た。

しかし、その表情は悪いとは思っていない顔だった。まるで私をからかう時の星みたいだ。

「でも、そうね。貴女の悩みがわからないでもないわ。貴女は普段から武人として毅然たる態度や振る舞いを心掛けているものね」

一頻り笑った後、曹操殿はその顔を普段のものに切り替えてそう言った。

まだ少し優しいような感じはするが、もしかしたら本当の曹操殿はこちらの方なのだろうか。

私が頭の中でそう考えている間にも曹操殿は話を続ける。

「でもね。蓮の前ではそれは無意味なものよ。あの子には人の仮面を剥がしてしまう不思議な力があるから……」

「……もしかして曹操殿も？」

「……さあね。唯、私に言えることは、自分のやりたいことをすればいいということだけよ」

どこか体験したことがあるようなその言葉に私はそう尋ねたが、それは上手くはぐらかされてしまった。

しかし、蓮の力が……。

賊を討つたびに、仲間の兵達が死ぬたびに、心を痛めていらっしやるであろう我が主。

白蓮殿の所から出てからどこか暗い表情をしていた桃香様は今では嘘のように明るい笑顔をを見せている。

あれは最近、どこか変わられた印象のあるご主人様が何かをしたのかと思っていたのだが……。

もしかして、蓮によるものだったのだろうか。

だとしたら、蓮には感謝しなければならぬな。

「それにね。あの子は猫だもの、猫なら可愛がられるのが仕事のはずでしょ？」

だから貴女も可愛がりなさい、と曹操殿は私に言つと、自分の陣営へと戻っていった。

そうか。蓮は可愛がられるのが仕事なのか……。

ならば私も可愛がってやらねば、蓮に対して失礼だな！

決して私の欲望のためではない。

これは蓮のためなのだ！

「よし！」

私はそう気合いを入れると、自分たちの天幕へと戻っていった。どのように蓮を愛でようかと考えながら……。

〈SIDE 蓮〉

にゃーす！

どうも毎度お馴染み猫の蓮君ですよ。

今日は劉備ちゃんの所でご飯を御馳走になっています。

これはあれですね、突撃！ 隣の晩御飯！ ってやつですね！

えっ？ 今はまだ昼だって？

……こまけえことはいんですよ。

気にしすぎると禿げますよ？

それで、なんで俺がここでご飯を頂いているかと言うとですね。

何か今、ウチの天幕は居づらいのです。

だってみんなが例の曲者を探しているんですよ？

この姿ではれることはないと思うけど、やっぱり居づらいです。

桂花とかすごく殺気立ってるし……。

そんなわけで華琳に許可を貰ってここにいるわけなんですけど、只今俺の目の前には何やら真剣な目を向けてくる人がいるわけで……。

まあ、言わずともしれた、あの関羽さんなんですけどね。

どうもあの初対面以来、俺のことを避けていた様子だったんだけど、どうかしたんだろうか？

猫が嫌いってわけではないと思うんだけど……。

その関羽さんは俺を真剣な目で見つめるだけで何もしてこない。

これってどうしたらいいのと思い、周りに助けを求める視線を送るが……。

誰も助けてくれる様子は無い。

というか、劉備ちゃんとか御遣い君はなんか笑ってるし……。

どうすればいいのか良くわからなかったので、俺はとりあえず声をかけてみることにした。

「にゃあ？」

すると、どうだろうか。

関羽さんは俺の予想を超えた反応をしてくる。

「にゃ、にゃあ。にゃうん？」

ちょ、おまつ！

ここでまさかの猫の鳴き真似……だ、と。

さすが、関羽さん！

皆に出来ない事を平然とやってのけるッ

そこにシビれる！あこがれるウ！

……いかん。予想外すぎて、少し頭がいかれたみたいだ。

そんな困惑状態の俺を余所に、何も反応がなかったのが悲しかった

のか、関羽さんは顔を暗くすると……。

「やはり私には無理だったか……。星には出来ると言つのに……」

そう言つて落ち込んだ。

つて、ええ〜！ どうすんのこれ！？

というか俺に一体、何を望んでいるのさ！？

俺は再度、周りに助けを求める視線を送ろうとした。  
しかし……。

「あ、あの愛紗ちゃんが……」

「と、桃香、笑っちゃダメだよ。……………でも、たまにはああいう愛紗も……」

「はわわ〜。ど、どうする雛里ちゃん？」

「あわわ〜。しゅ、朱里ちゃん、どうするって言われても流石に猫と人の絡みは……」

「なんか愛紗が変なのだー！」

ダメだ。こいつ等……。

ちつとも頼りにならない。

ええい！ こうなったら！

「にゃあ、にゃあ、にゃ？ にゃう？」

秘技！ 話を合わせよう大作戦だ！  
これでどうですか、関羽さん。

何か反応してくださいまし、後生ですから……………。

俺は心の中でそう願いつつ、関羽さんに頭を擦りつけて甘えてみる。すると、関羽さんは反応があったのが嬉しかったのか、その表情を明るくすると。

「ふふふ、星め。私にもこのくらいはできるのだぞ！」

笑いながらそう言うと、俺をゆっくりと撫で始めた。  
いや、星って誰さ。

あと自慢げな所申し訳ないけど、何を言っているのかはさっぱりわからないからね！

そんな俺の気持ちを余所に、どんどんほわわ〜んとした顔になっていく関羽さん。

「あゝ、やっぱりこれはいいな〜」

何かキャラが変わりすぎではないですかね。

大丈夫なのかな、その威厳とかそういうのは……………。

「うわ〜。モフモフ〜」

……………うん、これはダメだね。

もうなんか天元突破してるもん。

さらば、かつこいい関羽さん……………。フォーエバー！。

俺は仕方がないので、そのまま愛でられ続けることにした。

まあ、そんなに長くはならないだろうと高を括って……………。

しかし、それはケーキにシロップと練乳をかけたくらいに甘い幻想

だった。

今の俺がその時の俺に会えるなら、間違いなくこの右手で猫パンチを食らわせていただろう。

その幻想をぶち壊す！　って感じで……。

止まることのない関羽さんの手。

それが動くたびに俺の体力はなくなっていく。

気が付けば、もう太陽は沈みかけていた。

流石にきつくなって来た俺は関羽さんに話しかける。

「にや、にやあ？」

「にやゝ、にやゝん」

何時まで撫でるの？

そう聞いた俺に帰って来たのは、良くわからない鳴き真似だった。ダメだ、こりや。

俺は助けを求めて、周りを見渡し、そして絶望する。その場には俺達以外、もう誰も居なかった……。

「にや、にやゝ？」

あれ？　これはもしかして終わりが無いの？

嘘だよね？　嘘って誰か言ってる！

俺のその叫びに帰って来るのは……。

「にやゝ、にやゝん」

関羽さんの鳴き真似だけだった。

その後に何度か話しかけてみても返って来るのはその言葉だけだった。

そして、俺は思う。

……無限ループって怖くね？

結局、俺の願いは誰にも届くことはなく、そのまま関羽さんに愛でられ続けた。

劉備ちゃん達が助けにやって来てくれた夜遅くまで……。

もう誰か助けて……。

ループはもう嫌……。

嫌なの……。

その日、今までの分を取り戻すかのように愛紗が蓮を愛でた後、その場にはぐつたりとした蓮が発見された。

その姿は最早、満身創痕というのに相応しく、それを重く見た桃香の手によって『蓮、触りすぎ禁止法』が出されることになった。こうして誰もが蓮の平穏は保たれたと思った。

だが、それも儚い幻想であった。

後日、その法案に愛紗を含め数人が大反発。

これが後の世に名高い、第一次蓮大戦への幕開けとなったのだ。

(天の御遣いの日記より抜粋)

続く？

### 第三十六話　暴走もーど？（後書き）

第三十六話。終了です！

いかがだったでしょうか？

シリアスをそんなに続かせてなるものか！ なーんて。前回の話からこんな話に飛んでしまいました。でも、次は雪蓮達の話になるかな。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。あと感想などもお待ちしています！  
では！

第三十七話 再会は突然に（前書き）

雪蓮視点で始まります。

### 第三十七話 再会は突然に

袁術からの要請で、私達は黄巾党の主力部隊を叩くために遠く冀州の地までやってきた。

途中で蓮華達も合流し、久々にみんなで戦うこととなった。

この地に流星が降って、数ヶ月。

私達、孫呉の軍は着実に勝利を重ねた。

私は、時には前線で敵を倒し、時には本陣で指揮を取った。

まあ、後者のは冥琳に半ば無理矢理させられたんだけど……。

そんなわけで、気が付けば私達の名は少しずつ上がっていった。

聞くところによると、荊州の限られた範囲では英雄とも呼ばれているらしい。

英雄……。

その言葉を聞くと、私はあの手紙を思い出す。

曹操から私に送られてきたあの手紙を……。

自分への不甲斐なさと思いだけが湧き上がってきたあの時の事を……。

どうしても思い出してしまふ。

「まだ足りない……」

私はそう呟いた。

そう。まだ、足りない。

まだ私は蓮を堂々と連れて帰れる資格を得てはいない。

きつと、次の戦いがその決め手になる。

諸侯も集まって来ているあの場こそが、最も名を上げる好機のはずだから……。

そう思うと自然と握る手にも力が入った。

「姉様？　どうかされたのですか？」

「蓮華……。ううん、何でもないわ。少し武者震いが、ね？」

「……姉様は大将なのでから、もう先陣を切ったりはしないで下さいよ？」

「はいはい。わかってるわよ」

話しかけて来た蓮華に、私はそう言って誤魔化した。少し気負っている所を可愛い妹には見せたくはない。

あと、蓮華？

初めからは行かないけど、途中からはどうなるかわからないわよ？　まあ、そう言ったら何を言われるかわからないから絶対に言わないけど……。

私は馬を前に進ませながら、目的地に視線を移した。

あの城の中に二十万を超える黄巾党が居る。

あそこを陥せば、この乱は終わるのだ、すべては次の一戦に懸かっていると言ってもいい。

それにこれからの一戦には多くの願いが掛かっている。

それらをすべて叶えるためにも絶対に負けられない。

そう、私達に負けは許されないのだ。

「……いよいよね」

「雪蓮……。そうだな」

私の呟きに冥琳がそう返して来た。

決戦の前はやはり、こう血が昂って来る。

今回の戦いで私の大きな目的は二つ。

一つ目はさつきも言ったけど、名を上げること。

いつか来るであろう、独立のためには更なる名声が必要だ。

母様の娘じゃない、私の……孫 伯符の名声がもっと必要なんだ。

だからこの戦いで出来るだけ兵の損失を少なくし、敵大将の首を揚げなければならない。

そして、何より大事な二つ目は……。

「冥琳、あの軍はもう来ているの？」

私はそう隣に居る冥琳に聞いてみる。

各地から集まって来た諸侯の軍勢。

皆が黄巾党を叩くためにここに集結してきた。

でも、気になるのはその中で唯一つ。

「ああ。物見の報告によれば、すでに来ているらしいぞ」

「そう。なら一度、顔を拝みに行こうかしら。きちんと挨拶はしないと、ね？」

どうやら、彼女はもう来ているみたいだ。

ならば顔を見に行くのも一興かと考えてみる。

別に諸侯は連合を組んでいるわけではない。

だが、二十万を超える数の黄巾党を叩くのは自軍だけでは皆、厳しい。

ならば、一応は味方ということになるはずだ。

「私個人としてはあまり行つて欲しくはないんだが……。雪蓮、喧嘩だけはするなよ。それに今、会いに行つても蓮は連れていないと思っただが……？」

どうやら、冥琳は会いに行くことに反対みたいだ。

でも、その言葉にはどこか諦めている感じも出ている。

いつもごめんね、心配かけて……。

私はそう心の中で冥琳に謝った。

本当なら行かない方がいいのだと私もそう思う。

でもね……。

「居るわよ。蓮は絶対に居る。それは断言してもいいわ」

そう。蓮がここに来てるなら話は変わって来る。

蓮が来ているのなら会いに行かないといけないもの。

うん、それは絶対。

「またお得意の勘か……」

「そつ　でも間違いないわよ？」

「わかったわかった。お前がそう言うのなら、多分そうなのだろう

な……。はあゝ、蓮。早く帰って来て……」

「そのため息は何よあゝ。もう失礼ね。私、泣いちゃうわよ?」

私はため息を吐いた冥琳に、頬を膨らませてそう言った。

人の顔を見て、ため息なんて吐いちゃいけないのよ。  
吐かれた方は結構、傷つくんだから!

「お前がそんなタマか」

「確かにのう。そんなのはいつもの事じゃ」

「ひ、ひどい。祭までそんなことを言うの? 蓮華、二人が私を  
いじめる」

私のそんな思いは冷たい冥琳の言葉と、祭の追い打ちに遭い、粉々に砕けた。

でも、いいもん。今の私には自慢の可愛い妹が……。

「姉様。いつもの事です」

「うわゝん、蓮華まで」

もうみんな嫌いだ。

うん、やっぱり蓮が必要だわ。

こんな時、私の味方が誰も居ないもの。

それに……。

私をからかって笑っているみんなに視線を向けてみる。  
この場所に蓮が居れば、きつともっと楽しくなる。

もつとみんなで笑い合える。

だから、蓮は絶対に取り戻すの。

曹操がどんな人物かはまだよくわからない。

でも、私は取り戻す。

またみんなで笑い合うために……。

私達には蓮が必要なから……。

あと、何か嫌な予感がするのよねえ。

こう何て言うの？ 乙女の勘がびんびん反応しているというか。  
とにかく、蓮には早く会いに行く必要があるみたいだ。

黄巾党の主力部隊が籠っている城を囲むように布陣している諸侯の  
軍の傍に私達も陣を敷いた。

周りを見渡せば、色々な旗が掲げてある。

私はその中で、一つの旗を見つけた。

『曹』の名が書いてあるその旗を……。

それを見つけた私は、一人で乗り込もうと早速動き出した。

だが、それはすぐに冥琳に止められることとなる。

どうやらこの唯一無二の相棒には、私の行動はお見通しのようだった。

存分に説教の混じった冥琳の話を聞いてみると、自分も行くのと  
とだ。

決して自分も行きたかっただけじゃない、とは言わない。

そんなことを言えば、後が怖すぎるから……。

そんなわけで、陣を構築した後。

私と冥琳は後の事を蓮華たちに頼むと、曹操の陣へと足を運ぶことになった。

曹操はどんな人物だろうと頭で考えながら、歩みを進めて行く。しかし、その歩みは途中にあった義勇軍の陣の前で、止まることになる。

「桃香様！ それは横暴です！ 蓮は皆で愛でるものですよ！」

「そうよ、劉備。猫とは本来そうあるべきだわ」

「愛紗ちゃんも曹操さんも間違ってます！ 蓮ちゃんが可愛いのは私も認めます！ でも、触り過ぎはダメです！ 今だって、あんなに蓮ちゃんがグツタリしているじゃないですか！」

「うん。あれはやりすぎじゃないかな……。猫にもストレスって良くないと思うし……」

三人の女性の大きな声と一人の男性の小さな声。

何やら揉めているようで、その声は天幕の外まで聞こえてきた。

つて、蓮！？

今、蓮の話をしていた！？

「にゃー、鈴々はまだ今日のモフモフをしていないのー！」

「私も最近はあまり遊んでいないぞ！ だから秋蘭、蓮をこちらに

渡すのだ」

「鈴々ちゃん。毎日はズルイよ！ 私も雛里ちゃんも二日に一回にしているのに……」

「そうでしゅ！ 規則はみんなで守らないと……」

「姉者、少しは蓮を休ませないといけないからな。今はダメだ」

さらにそんなやり取りまでも、その一番大きな天幕から聞こえてくる。

やっぱり蓮って、あの蓮の話よね？

あれ？ ここって決戦の場じゃないの？

諸侯が集まって黄巾党を討つっていうそんな大事な場所のはずよね？  
もしかして、私が間違っているの？

「ねえ、冥琳。私の聞き間違いじゃないのなら、あそこに蓮が居るわよね？」

「……そうだな。加えて、曹操も居るようだな」

どうやら私の聞き間違いではないようだ。

しかし、よくもまあこんな大きな声で討論しているものだ。

内容も蓮の事みたいだし……。

見張りの兵達もいつもの事だとも言いたげに笑っている……。

……これじゃ、少し気張っていた私がバカみたいじゃない。

そう思うと、何か真面目にしているのがバカらしくなってきた。

よし、決めた！

そっちがその気なら、私もその気で行ってあげる！

「お、おい、雪蓮！ まさか……」

「冥琳！ 私達も行くわよ！」

私はそう胸で誓うと、冥琳を引っ張ってその天幕へと進んで行った。  
蓮に会える喜びを内心で噛み締めながら……。

（SIDE蓮）

ヘルプミー。ヘルプミー。

誰か、俺を助けてください！！

どうも、開幕から猫グツタリ状態の蓮です。

あの一件以来、関羽さんは俺をすごく撫でて来るんです。

まあ、それはいいんですよ？

いいんですけど……その時間がすごく長いんです。

その所為で、他の人にシワ寄せが行って……。

でも、猫な俺は体力も猫並みなもので、全部を捌けなくて……。

それで悪循環が起こったのです……。

蓮、触りすぎ禁止法？

何それ、おいしいの？ と平気な顔で言った金髪のクルクルがいます。

黒髪二人と、赤髪の少女がいます。

流石にグツタリした俺を見かねた、メシアな劉備様や秋蘭様達が擁護してくれているんですけど、敵にはあの霸王がいますから、実は少し劣勢だったり……。

あと、御遣い君はもう少し声を張ろうね？　じゃないとあの子達には届かないから……男一人は辛いと思うけど、頑張つて！

軍師'sの二人もありがとう。あんまり効果なくても君達の良心はすごく嬉しいです。

「大体、あの至高とも言える毛並みを触らないで何処を触ると言うの？」

「肉球です！　あのぷにつとした肉球を触れば、みんなが笑顔になります！」

あれー？

何か話が変わってきてない？

マイメシアよ！　討論の内容がずらされてるよ！　早く気づいて！　ほら、その霸王つ子から悪魔の様な黒い尻尾が……。

おのれ、それが奴の策だったか。

このままではマズイな……。

そんな絶望の淵に立たされた俺に聞き覚えのある声が聞こえた。

……そう、本当に懐かしい声が聞こえた。

「二人とも違うわ！　蓮は、まず抱っこする所から始まるの！」

そう言うとその声の主は俺をひょいと抱きかかえた。

とても懐かしい匂いと暖かさが俺を包み込む。

その乱入者はさらに言葉を続けた。  
……すごくアホな言葉を。

「そして、この温もりを全身で味わった後に、モフモフしたり、撫でたり、肉球へと分岐するのよ！ あと貴女たちはもう一つ大事な所を忘れてるわ。それは最早、致命的と言っても過言ではないわ！」

「「そ、それは、一体！？」「」

二人ともなんかノリがいいな、おい。

こんな時ばかり息が合っても何もならないぞ！

「この長くて、ふりふりと動く尻尾よ！ これを手で遊ぶだけでのくらの至福の時間が待っていることか……」

「な、なるほど……」

「くっ。悔しいけれど、反論のしようがないわね……」

いや、何かドヤ顔してたり、納得してたり、悔しがってたりしてるけどさ。

多分、それ違うから。

ここは驚く所だからね、普通。

あとはもっとこう感動のシーンみたいな感じとかになる所だと、俺は思うんだけど……。

もしかして、俺の感性がおかしいのだろうか。

俺がその事実強い衝撃を与られていると、乱入者である雪蓮が

俺に顔を向けて来る。

その顔は、久しく見ない間にもっと大人らしくなつたみたいで、前より綺麗になっていた。

雪蓮は俺をじっと見た後に、その顔を緩ませると。

「ふふふ。蓮　　久しぶり～。元気だった？」

「にゃん！」

そう言つて、頬ずりをしてきた。

この感触も何だかすごく懐かしいなと思いつつ、俺は元気よく頷いたのだった。

### 第三十七話　再会は突然に（後書き）

第三十七話。終了です！

いかがだったでしょうか？

おかしいな。

どうしてこうなったのだろう。

もっとシリアスな感じになると思ったのに……。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。  
あと感想などもお待ちしています！  
では！

### 第三十八話　賭け（前書き）

お待たせしてしまつてすみませんでしたー！！  
もうね、休日とか私にはないの……。

家に帰って寝るだけとか……グスン。

前回の分の感想返しも多分、明日になつてしまいます……。  
本当にごめんなさい！

長くなりましたが、本編です！　どうぞ。

## 第三十八話 賭け

「SIDE 一刀」

「……………」

「……………」

あれ……？

何なの、この空気？

さっきまであんなに楽しそうに話してたよね！？

桃香と一緒に二人とも、蓮の話で盛り上がったよね！？

それが何でメンチ切ってる状態になるのさ？

正直、この空間に居たくないくらい空気が重い。

ここって俺達の天幕なのに……。

「ね、ねえ、ご主人様……あれ、どうする？」

「いや、どうするって言われても……」

小声で話しかけてきた桃香に、俺はそう言うことしか出来なかった。

……流石にあれに割って入る勇氣は俺にはない。

いや、もしそんな人がいるならば、それはもう勇氣と無謀を履き違

えている人だと俺は思う。

あとね、桃香。呼び方が普段通りになってるよ？

出来れば、人前でその呼び方は止めて貰いたいんだ。

白蓮の所で、そう呼ばれた時にみんなからすごく白い目で見られたし……。

……あれは正直、辛かった……。

そんな風に俺が、今の状況に軽く現実逃避をしている間にも状況が変わることはなく、寧ろ悪化しているようだった……。

「だから、貴女は何時までそうしているつもりなのかしら？」

「……無粋ねえ。家族の触れ合いは、他人が邪魔するものじゃないわよ……？」

「それでも、時と場所は選んだらどうなの？ 少なくともこの場ですることではないはずよ」

「ふつ、良く言うわね。元々、戦場に関係ないことを大声で討論していたのは誰だったかしら？ 貴女達の声、天幕の外まで聞こえていたわよ？」

「それじゃあ勝手にその討論に参加してきたのは、何処の誰だったかしらね？ ご丁寧に実演まで見せてくれてちゃって……」

御覧の通りに二人は今、言い合いをしていらっしやいます。

いや、本当にどうしてこうなったんだろう。

自己紹介をするまではこんな空気じゃなかったのにな……。

俺は今までの経緯を思い出してみる。

確か、孫策さんが俺達の話に途中から参加してきて、それからみん

なで蓮を撫でてたんだよな。

それで誰？　ってことになって、みんなで自己紹介をして、そして  
ら今の状況に、と。

うん。

やっぱり、これはあれかな？

桃香が蓮ちゃんの飼い主は曹操さんじゃないんですか？　って聞いたのが引き金だったのかな。

あれから途端に二人とも笑顔が怖くなったし……。

「ほう。蓮がそんなことを……」

「ああ。あの時の蓮には思わず、大声で笑ってしまったぞ！」

「そうだったな。あの華琳様も声を出して、笑っていたぐらいだからな」

そんな二人を止めてくれるだろうって思っていた周瑜さん達は、少し離れた場所で何だか楽しそうに蓮の話しているし……。

あれを止める気はないんだろうなあ。

自分達の主君なら何とかしてほしいんだけど……。

というかよくよく考えてみると、蓮って何かすごい猫だよね。

あの曹操と孫策が揉める原因で、桃香達もとても可愛がってる。

愛紗とかはもう暴走するくらいだし……。

うん。蓮は多分、傾国の猫って言っても過言ではないと思う。

確かに、俺も可愛いとは思っけどさ。でも、どちらかと言うと俺は犬派なんだよね。

まあ絶対にみんなには言わないけど……特にあの二人には……。俺はそう思いながら、二人を見てみる。少しでも良い方向に変わってないかなと淡い期待を試してみたけど、また二人とも睨み合ってた……。

「……………」

「……………」

あれ、本当にどうしょ……。

蓮も二人の間で何かおろおろしてるし。まあ、猫に解決を求めても仕方ないんだけどさ。

俺がそんな状況を内心、頭を抱えながら見ていると、くいくいつと袖を引かれた。

そちらに顔を向けると、桃香や朱里達がみんな懇願の目で俺を見つめて来ている……。

こ、これは、もしかしてあれですか？

俺にあれをなんとかしろと言うんですか、そうなんですか？

そんな俺の心の中を読んだように、一斉にみんなが頷く。

ま、マジで……。

俺はもう一度、あっちの方を眺めてみる。

今も二人は睨み合ったままで、しかも背後に何か虎と龍のオーラが見えた。

あんな地雷原に一人で行けと言うのですか……。

確かに俺は日本人だけど、神風精神は持ち合わせていないわけ……。

そんな気持ちを込めた視線をみんなに向けると、笑顔で敬礼された。

どこで覚えたとか色々言いたかったけど、そんな気力はもうない。  
はぁ。俺は一度、大きく深呼吸をしてからみんなにビツと敬礼を  
した。

……北郷 一刀、是より死地に赴きます！

みんなの往く先に幸多からんことを……！

うん。最後のはあの人の言葉を真似してみたけど、なんか力が出た  
ような気がする。

名も知らぬ人よ！ こんな俺を見守ってくれ！  
よし、やぁぁあつてやるぜ！！

～SIDE華琳～

私と孫策は言葉を交わしながら、見つめ合う。

いや最早、これは睨み合うと言った方が正しいかもしれない。

天幕の空気も少しの間で重く変わってしまったようで、誰もが口を  
開かない。

まあ、理由は確実に私達でしょうけど……。

蓮は蓮で、この状況に混乱しているみたいだ。

今も私と孫策の交互に視線を向けて首を傾げている。

どうやら自分が理由とはわかっていても、何でこうなっているのか  
は全くわかっていないようだ。

本当、変な所で察しが悪い。

私がそんなことを考えながらも、孫策から目を離さないでいると。

「あ、あの〜」

そう、弱々しい声が聞こえてきた。

私達が同時に声の方に視線を向けると、声の主の北郷がびくりと身体を震わす。

……失礼な奴ね。何をそんなに怖がっているのかしら？  
思わず、私の視線がきつくなる。

「「何？」」

「いえ、な、何でもないです……！」

何か用事があるのかと思い、声をかけてみるとこれも孫策と同時だった。

また一瞬だけ、私達の視線が交りあう。

互いに見つめ合うその目には、若干の嫌悪が浮かんでいた。

……真似するな。

多分、私達はどちらもそう思っている。

結局、北郷はそんな私達に何も言わずに、肩を落として劉備達の下に戻っていった。

これだから、男は……。

何も用もないのなら話しかけてくるなと声を大にして言いたい。

しかし、そう考えると同時に私は思い出した。

良く考えればここは劉備達の陣だったな、と。

……そうなると悪いのは私達か。

「……ここでのやり取りは不毛のようね」

そう、孫策が私に言って来る。

どうやら、同じ考えに至ったみたいだ。

私はそれに同意すると、場所替えを提案した。

「そうね、場所を変えましょう。……私の陣で良いかしら？」

「ええ、それでいいわ。元から貴女の陣に向かっていた訳だしね。蓮、移動するわよ？」

「にゃ」

孫策は私の提案に頷くと、蓮に話しかける。

……だから、貴女はいつまで蓮を抱いているのかしら……。蓮も何やら嬉しそうだし……。

私は蓮と孫策の方を見て、少しイライラしていた。

他の人が抱いていても、そんなに強くは思わないのだが、孫策が抱いていると何故かイライラする。

そして、蓮がすごく楽しそうなのがそれに拍車をかけた。

私が抱いてもそんな風な顔をしないのに……。

そう思うと、私の怒りは途端に静まり、少し暗くなる。

大体、私と孫策の何がそんなに違うのかしら。

私はじつと孫策を見て、考える。

そして、その違いを見つけてしまった。

あまりにも違いすぎる、その違いに。その決定的な戦闘力の差に。

私は気が付いてしまった……。  
私はがくつと内心で肩を落す。

ああ、そう……。

……ふふふ。あっはははは……。  
そうか、そうなのね……。

つまり蓮は……。む、胸が大きいのがいいのね？ そうなのね……？

だから、蓮はそんなに嬉しそうなのね？

だから最近、劉備の陣営によく行くのね？

そうだったの……。ふうん、そうだったの……。

ふふふふふふつふふふふ。

あはははははははははははは。

こ、このエロ猫が……！

大体、そんな脂肪の塊の何が良いというのっ！

「に、にゃあ〜？」

「ダメよ、蓮。今、目を合わせると危険だわ」

外野が何か言っているようだけど、私には何も聞こえなかった。

私は一人、思考と言う名の愚痴を始める。

確かに私はそんなに大きい方ではないけれど、極端にないというわけではないと思うのよね。

そりゃあ、もう少し大きくてもいいかなとは思っけれど……。

それでも、食べ物とかは色々と気を付けてるし、運動だっしてしてる。

睡眠だってきちんと取っている……。

でも、仕方ないじゃない！ 何でか大きくならないんだから……！

と言うか、何で孫策や周瑜はあんなに大きいのよ！

はっ！　もしかして、孫呉には何か大きくなる秘密がつ！  
だとしたら、それは何としても手に入れなければ……！

私がしばらくそんなことを考えていると。

「それで、移動するんじゃないの？」

そう孫策から声がかけられた。

私はそれではつと現実に引き戻される。

私の目の前には何やら心配そうな運と、こちらを怪訝そうな顔で見つめる孫策。

くっ、不覚だったわ。

この私が、敵の前で深く思考に陥るなんて……。

私はすぐさま頭を切り替えると孫策を見据え、口を開いた。

「……そうね。それじゃあ行きましょうか」

私はそう言つと劉備達に一声かけた後、周瑜と話していた二人を引き連れて、自分の陣へと足を進めた。

その足取りが少しだけ……ほんの少しだけ、早足だったことはここだけの秘密だ。

自分の陣に孫策達を招くと、私も少しは冷静になっていた。  
さっきは少し私らしくなかったが、もう大丈夫だ。

何にせよ、私が孫策達に言う事は唯一つなのだから……。

私は自分の言うべきことを頭の中で確認すると、蓮達の方に視線を移す。

蓮は今度は周瑜に抱かれて、何やら愚痴を聞かされているようだった。

それを孫策は何故か引きつった笑顔で聞いている。

……楽しそうね……。

私は三人の姿を見てそう思った。

久々に家族と再会したのだから当然と言えば当然なんでしょうけど……。

やっぱり、どこか気に入らない。

そう思った私は、さっさと話を始めることにした。

内心で嫌な女だと自覚しながら……。

「さてと、そろそろ話を始めましょうか」

「そうね。私も貴女に言いたい事は一つだけだから……」

私の言葉に孫策はそう返すと、こちらに視線を向けてくる。その顔は真剣なものへと変わっていた。

「では単刀直入に言うわね……。私は、蓮を貴女に返す気はないわ」

「……………」

「っ！ 何をっ！」

孫策は何も言わなかった。

隣の周瑜は大きく反応して、こちらを睨んで来たが、彼女は何も反応しない。

唯、静かに目で私に話の続きを促してくるだけだった。

「確かに少しは名が売れて来ているようだし、貴女が英雄の器を持つていることはわかったわ」

孫策達の情報は逐一、入手していた。

着々とはあるが、その名を上げて来ているのも知っている。

そして、対面してはつきりとわかった。

彼女が袁術の下に収まっているような器ではないことも……。

蓮を大切に想っていて、私から必ず取り戻す気であることも……。  
はつきりとわかった……。

でもね。それはもう関係ないの……。

もうそんな些細なことはどうでもいい。

「それでも、私は蓮を返す気はない。何故なら私は……」

蓮が好きだから……とは言わない。

それをまだ本人の前で言う勇氣は私にはまだないから……。

だから、今は別の言葉を使う。

「曹 孟徳だから……。いずれ、この国に覇を成す者だから……。だから私は欲しいものは必ず手に入れる。そして、一度手に入れたらそれを手放す気はない」

これが蓮の意思を無視しているのはわかっていた。

だから、私は蓮の方を見ずに孫策だけに視線を集中させる。

…… 多分、蓮は困った顔をしているに違いないから……。

「そう……。貴女の考えは良くわかったわ。じゃあ私も言わせて貰うわね」

私の言葉に軽く頷くと、孫策はそう言った。

その目には怒りは一切、浮かんでおらず、澄んだ瞳だけが私の姿を捉えている。

「蓮を助けてくれたことはすごく感謝している。貴女のおかげでこうしてまた蓮に会うことも出来たわけだしね……。そのことには本当に感謝しているわ。……ありがとう、蓮を助けてくれて。でもね……」

孫策はそう言うのと、一度、大きく呼吸をした。

そして、その空色の瞳を私に向けると口を開く。

「私も貴女に蓮を渡す気はない。蓮は私達の家族だし、孫呉にとって……。そして何より、私にとって必要な存在だもの。だから蓮を貴女には渡さない、絶対に」

自分に必要だから……。

そう言いきった孫策を見て、私は軽く笑みを浮かべた。

そう言わなかったら、大した敵ではなかったのだけだね……。

本当、私の性にも困ったものだわ。

孫策がそう言ってくれて、すごく嬉しく感じてしまうんだもの……。やはり敵は強敵である方が潰しがいるというもの。

いいわ、認めましょう。

孫策……。貴女は私の好敵手となる存在だと。

「……わかったわ。ならば、孫 伯符よ。私と一つ勝負をしてみな

い？」

「勝負……？」

「そう勝負よ。私達の誇りと名誉……。そして大事なものを賭けた真剣勝負……」

勝負と聞いて怪訝そうな表情を浮かべる孫策に私は内容を説明する。勝負をやるからには条件は平等でないといけないし、ね。

「……二日後の夜、私は夜襲をかけるわ」

「っ！ 華琳様！！」

私に秋蘭が声をかけてくる。

これはまだ私と秋蘭と桂花しか知らないことだ。現にその隣で春蘭は頭を捻っている。

「そして、その時に私は大将首を獲るつもりよ」

「……面白いじゃない。つまりは敵の大将を討ち獲ったものが……」

「全部を手に入れる」

そう。黄巾党討伐の名声も、手柄も。

そして……蓮も。

勝った方が手に入れる。

こんなに分かり易い方法は、他にないわ。

孫策は私の話を聞いて、にやりと獰猛そうな笑みを浮かべると、声を高々に宣言した。

「いいわ、望む所よ！ 曹操。その勝負……この孫 伯符の名において受けるわ！」

「っ、雪蓮っ！」

孫策の隣にいる周瑜が止めようとするが、もう遅い。

秋蘭も私の何か言いたげな顔を向けてくるが、もう遅い。

もう勝負することは決まった。

最早、これは決定事項なのだ。

「ふふふ。それじゃあ孫策……」

「ええ、曹操……」

「「また二日後に会いましょう」」

私達は二人とも深い笑みを浮かべると、声を合わせてそう言った。そこにはもう嫌悪はない。

あるのは大きな楽しみという感情と、ほんの少しの不安だけだった

……。

### 第三十八話　賭け（後書き）

第三十八話。終了です！

いかがだったでしょうか？

今日で、この小説を書き始めて三ヶ月です。

長かったような短かったようなそんなそんな三ヶ月でした！

これからも応援してくれると嬉しいです！！

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

### 第三十九話 一時帰還！

昔、ある人は言いました。

言葉にしないと伝わらないこともあるよ、と。

お話をしよう？ と。

その人ではないけど、俺も言葉って大事だとすごく思うんだ。

……だからね。

雪蓮と華琳の二人が話し合っているのは良いことだとは思うんだよ？  
うん。すごくそう思うんだけどさ……。

「蓮を貴女に返す気はないわ」

「私も貴女に蓮を渡す気はない」

俺の話をするのなら俺を参加させようよ……。

しかも、何やら話は勝負というか賭けをする流れになってるし……。

俺の発言権は何処に……ぐすん。

俺、当事者なのに涙目です。

ま、まあ、それは一旦置いておくとしよう。

深く考えると何か暗くなりそうだしね……。

只今、俺は話をしている二人を見て、内心ですごく頭を抱えている状態だ。

これは本当にどうしたものだろうか……。

確かに、俺も雪蓮達が来たからってはい、さよならってことをす

るつもりはなかったけど、さ。

それにしてもこの展開は予想していなかったわけで……。

はぁ。俺はみんなに聞こえないように、こっそりため息を吐く。

……全部、悪いのは俺なんだろうね、絶対に。

正直、あんなに華琳が俺に固執しているとは思ってもみなかった、  
と言えば嘘になるけど……。

何だかんだで、最後は笑顔で帰してくれると思っていたんだ。

でも、それは俺の甘えた考えでしかなかった。

どうやら俺が思っていた以上に、華琳の中での俺の存在は大きかったみたいだ。

やっぱりあの時に、ああすべきではなかったんだろうか。

思い出すのは、あの満月の日。

初めて人の姿で、華琳に会ったあの夜のこと。

自分の力のなさに嘆く、一人の女の子を慰めたこと。

やはり、俺の行動は間違っていたのかな……。

こうなるとわかっていたのなら、しない方が良かった……。

俺の頭にそんな考えが浮かんた。

でもあのまま泣いている女の子を、放ってなんて置けなかった……。  
そんな考えも同時に浮かんでくる。

そこまで考えて、俺は心の中で苦笑してしまった。  
本当に今更だ。

今更、後悔しても何も始まらないし、何も変わらない。

今でも、あの時の判断は間違っていなかったと思えるし、多分また  
同じような状況になったら俺は同じことをすると思う。

それなら、これ以上考えても時間の無駄でしかない。

大事なのは俺がこれからどうしたいのか、だ。

雪蓮達の所に戻るのか。

このまま華琳の所に居るのか。

二人の勝負は別にしても、それは自分で決めておく必要があると思う。

俺は視線を雪蓮に向ける。

雪蓮達は俺の大切な家族だ。

それだけは絶対に変わることのない不変のものだ。

今日、雪蓮と冥琳と久しぶりに接して、心配してくれていたのもすごく伝わって来た。

きつと、蓮華達も心配していると思うし、この場に来ていない水蓮のこともすごく気になる。

なら迷う必要はない。そう、そのはずなのに……。

今度は視線を華琳に移す。

華琳は雪蓮と一緒にあって笑っていた。

楽しそうに……でもどこか少し不安そうに……。

華琳……覇道を歩む者。

でも、陰で一人で泣いている女の子……。

この間も朝に泣いていた女の子。

また、あの子を一人にしているのか？

また、一人で泣かせていいのか？

……いいはずがないよな……。

うん。それがいいはずはないんだ。

あの子には隣に誰かが付いて方がいい。  
支えてくれる人が必要なんだ。

比べるわけではないけど、その必要度で言えば雪蓮よりもずっと上だとも思う。

そこまで考えて、俺はもう一度ため息をついた。

今度は、先程よりも大きかったので、俺の抱いていた冥琳には聞こえてしまったと思う。

現に今、俺を方を見て、同じ様にため息をついているし。

まあ、冥琳は違う意味でついたんだろうけどね……。

何というか、本当にお疲れ様です。

ストレスとかで病気になるんじゃないか少し心配だな。

そんなことを思いながら、俺はそつと目を閉じた。

雪蓮と華琳。

確かにどちらの傍にも居てあげたい。

どちらとも心配だし、大切だ。

でも、それは絶対に無理なことだから……。

俺はすつと目を開く。

よし、もう決めた！

俺は……………。

〈SIDE 蓮華〉

「姉様達、遅いわね……」

私は自分の天幕の中でそう呟いた。  
私は自分達の陣で曹操の下に向かった姉様達の帰りを待っている。  
曹操のことは姉様から話を聞いた。

何でも、瀕死の状態だった蓮を助けてくれて保護してくれているらしい。

その知らせを聞いた私達は、すごく喜んだ。

だって正直、蓮は死んでしまったと思っていたから……。  
あの戦い以来、母様は病に倒れ、今も床に伏せている。

袁術の客分となり、家族も離れ離れになってしまった中で、それは久しぶりの吉報だった。

だから、私はその知らせを聞いて、すごく喜んだ。

思わず、涙を流してしまいうくらいに……。

でも、その後がいけない。

曹操は姉様に手紙で、まだ蓮を返す気はないと言ったそうだ。

そのうえ、姉様に自分を英雄だと示せとも……。

それを聞いた私は何様のつもりだと、激怒した。

蓮は私達の家族だ。

私にとつては可愛い猫であり、初めての友達であり、誰にも言っていないが……父や兄だとも思っている。

そんな蓮を返さないなんて、いくら恩人といっても許せることじゃない。

だから、私は姉様に一緒に連れて行って欲しいと頼んだのだけど……。

「やっぱり、私も行けば良かった……」

深く息を吐き出すように、私はそう言葉を漏らす。

私の同行は姉様と冥琳の二人に止められた。

きちんと話をしてくれるから、待っていてねと言われた。

確かに私も行けば、思春も付いてくるだろうから人数も増えてしまう。

それはあちらにも迷惑になってしまつから、得策ではないのだろうけど……。

「はあ」

思わず、ため息が出た。

待っているだけなのは、正直、言ってもどかしい。

姉様の勘だと蓮も来ているというのに、待つことしか出来ないなんて……。

私がそんな風に思っていると、何やら天幕の外が騒がしくなってきた。

どうやら、外の兵士達が騒いでいるようだ。

戦前だというのにこれはあまり良くない。

私は天幕の外に出て、兵達に叱咤の声を出した。

「お前達っ！ 何をさ………」

「孫権様っ！ 蓮様がお戻りです！」

しかし、その声は途中で止められることになる。

近くにいた古参の兵は私に笑顔でそう告げると騒ぎの中心へと走っていった。

えっ……？

蓮が戻って来た？

私が視線を兵の走っていた先へと向けると……。

そこには冥琳と姉様に抱きかかえられていた蓮がいた。  
白い毛並みに、真つ赤な瞳。

首には名前の刻まれた鈴付きの首輪。

みんなに囲まれて、少し困惑しながらも笑顔を浮かべている蓮。  
見間違えなんかじゃない。あれは間違いなく蓮だっ！

そう気づくと、同時に私の足は動き出していた。

全力で走って、蓮の下に向かう。

囲んでいた兵士達も私に道を開けてくれた。

それに深く感謝しながら、私は蓮の所に急いだ。

「蓮っ……っ!!」

そしてそう声を出すと、蓮が私に気づいて顔を向けてくる。  
その顔を途端に嬉しそうなものへと変えた。

一緒にいる姉様と冥琳は私を見て、苦笑しているみたいだ。  
でも、今はそんな関係ない。

私は蓮達の傍に駆け寄ると、蓮を抱きしめようと腕を開いた。

「蓮っ!」

「にゃぁん!」

蓮はそれを見て、私の胸に飛び込んで来る……。  
はずだった……………。

「蓮様ぁぁぁ!」

そう言つて、私と蓮の間に横から飛び込んで来る黒い影。風のようにやって来たその影は、空中で蓮を抱き留めると、その場で蓮に頬ずりを始めた。

「ああっ、蓮様っ！　よくぞ御無事で！　良かった！　本当に良かったですうー！！！」

「にやう……………」

「ああ…………。このモフモフ感！　間違いようがありません！　蓮様ですー！」

そして、さらにモフモフを敢行。

蓮が少し苦しそうな声を出しているが、お構いなした。そう。もうわかつているとは思うが、黒い影の正体は明命だった。

「……………」

私は両手を広げたまま、その場で固まる。

周りの兵士達も突然の来襲者に啞然としていた。

唯、姉様だけはそんな私を見て、必死に笑いを堪えている。私の腕が少しずつ、震えてくる。

……この私の感情は一体、どこに向ければいいのだろうか。

「はうあ！　この毛並み、うゝん。やっぱり最高ですー！」

私はそう言つて喜んでゐる明命に視線を向けた。

確かに、明命が猫好きなのは知っている。

士官の理由も蓮に助けて貰ったからだと言っていたのも知っている。

でも、これはあんまりではないだろうか。

どう見ても感動の再会だし、私だって、久しぶりにモフモフしたい。それを横から攫わなくてもいいのではないと思う。

そして、何より……。

「あつははははっ！ もうダメ！ もう我慢できないわ！ ははははっははは！」

「こらっ、雪蓮。笑っては……。くっ……」

そこで大爆笑している我が愛する姉だ。

遂に我慢が限界を超えたようで、お腹を抱えて笑っていた。その横では一応、冥琳が止めようとしているが、その本人も笑っている。

これは怒ってもいいわよね？

うん、いいはずだ。でも明命を怒るのは少し可哀想だから、ここは姉様にしよう……。

私は綺麗に笑顔を作ると、それを姉様に向ける。額に青筋が浮かんでいるのは愛嬌の一つだ。

「姉様……」

「れ、蓮華？ も、もしかして、怒ってるの？」

私のその綺麗な笑顔を見ると、姉様は笑いを途端に止め、冷や汗を流し始めた。

あれ、どうしたのだろう。

私は笑っているのに、そんなに蒼い顔をして……。

不思議に思いながらも、少しずつ後ずさる姉様に言葉をかける。

「……姉様、私と少しお話をしましょうか？」

「れ、蓮！ 冥琳！ 私を助けて！！ 緊急事態よ！」

自分の危機を感じた姉様はそう言つて二人に助けを求めたが、もうすでに隣には冥琳の姿はなく、蓮はまだ明命によつて拘束されていた。

しかも、私達を囲んでいた兵達の姿もどこにもない。

そう。この場で姉様を助ける者は誰もいない。

私はゆつくりと近づきながら、優しく姉様に笑いかけた。

「ふふふ、姉様。残念でしたね。」

「い、いやあああああ！」

その隣では……。

「蓮様、蓮様、蓮様ー！！」

「にや、にやあああああ！」

一刻後。

その場には、満足そうな顔をした二人と、ぐったりした一人と一匹がいた。

その後に、また猫の方は激しい歓迎を受けて大変に疲労したことをここに追記して置こう。

こうして蓮の一時帰還は終了し、また彼は迎えに連れられて元の天幕へと戻った。

金髪の子は膝の上で爆睡する猫を見て、一言。

「蓮……。貴方、何しに戻ったの？」

そう呟いたそうな。

第三十九話　　一時帰還！（後書き）

第三十九話。終了です！

いかがだったでしょうか？

今回は蓮の葛藤がメインだったかな？

あとは久々に明命を出したかったんだ……。

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

**第四十話　真剣で私と勝負しなさい！（前書き）**

戦闘描写って難しいですね……。

三人称で書けば良かったかなと今更ながら少し後悔。

視点がコロコロ変わっています。

ちなみに初めのは雪蓮視点からです。

#### 第四十話 真剣で私と勝負しなさい！

「すうー、はー。すうー、はー。……良しっ！」

「もう準備は万端なのか？」

深呼吸をして気合を入れた私に、冥琳がそう聞いてきた。私はそれにゆつくりと頷きながら言葉を返す。

「ええ。気力も体力も何もかも最高の状態よ」

「ふっ、ならいい。この戦いだけは負けられないのだからな」

私の言葉に冥琳は軽く微笑むと、くいつと眼鏡を上げて顔を真剣なものに変えた。

言われずとも私にはわかっていて。

この戦いだけは……この勝負だけは負けるわけにはいかない、と。たとえ、敵大將が名前の他に情報なかったとしても……絶対に。これは曹操と私の真剣勝負なのだから……。

「勿論よ。私が大將首を獲るわ！」

自分に言い聞かせる意味も込めて、私は強くそう言い放つ。

冥琳はそんな私を見て、そうかと呟いた。

その顔には、この一戦に賭ける並々ならぬ気迫が見て取れる。

正直、今更ながら勝手に事を運んでしまった事を申し訳なく思った。

「冥琳……。ごめんね、勝手に決めちゃって……」

だから思わず、私は冥琳にそう謝る。

初めは冥琳を含め、蓮華達にも蓮を賭けの商品にするのはおかしいと、全力で反対された。

確かにそれも当然とも思える。

一体、どこに大事な家族を賭けの対象にする奴が居るものか。

そんなことは許されるはずがないと思うし、私も普段なら絶対にこんな賭けには乗らない。

でも、今回だけは……。

「別に気にするな……。私達のやるべきことは何も変わらない。唯、その理由に絶対という名が増えただけに過ぎない」

冥琳はそう言つて、勝手な私を許してくれる。

冷たそうな言葉の中にも私への気遣いが見えて、少し私は嬉しくなった。

……きつと曹操は蓮を唯の猫とは思っていない。

これは曹操と言葉を交わした私の率直な感想だった。

多分、本来の姿を見たのだろうかと、半ば勘ではあるが確信もしている。

覇道を往く者が何とか言っていたが、話はもつと単純明快。

つまりは曹操も蓮が好きで、大事なんだということ。

手放したくないから、こんな賭けの提案をして来たのだ……。

「ふふふ」

そう思えば、自然と笑みが浮かんでくる。

一度、そう思ってしまうえば、もう蓮華達が持っているような曹操へ

の怒りは湧き上がって来なくなった。

結局は自分も曹操も、蓮に傍に居て欲しくて喧嘩をしているだけだ。蓮に魅せられた莫迦達の、勝手な喧嘩に過ぎないのだ。

現に蓮の意思なんて、一言も聞いてないことからそれが良くわかる。

「…………だからこそ負けられない」

私はぎゅつと手に力を入れた。

そう。これで負けるといことは……。

私の想いが曹操に負けているということになる。

ならば、負けられるはずがない。

……負けていいはずがない。

それにこれが一番分かり易くて、はっきりと決着を付けることが出来る方法でもある。

……確かに負けた時の事を考えると、少し不安にもなるけど……。

でも、私にはみんなが居る。

みんなで力を合わせれば絶対に出来ないことじゃないと、そう私は確信している。

だから、私は言った。

「冥琳、出陣<sup>で</sup>るわよ」

「ああ、わかった」

その言葉に込められているのは絶大な信頼だけ。

そんな私の言葉に、冥琳は大きく頷いてくれるのだった……。

〈SIDE 華琳〉

「華琳様！ 孫策達が動き出しました！」

「……そう。春蘭達と特殊部隊の動きは？」

「はい！ 特殊部隊は城内で敵の攪乱に成功。春蘭達もその動きに合わせて、城門に進軍を始めています！」

私は自分の本陣で、桂花の報告を受ける。

少しばかり攪乱する部隊の動きが早いようだが、それは何も問題は無かった。

春蘭達も状況を見て、動いているようだし……。  
となると、あとは……。

「此処までは計画通りね。それで、孫策達はどんなの？」

「……どうやら、孫策達も城内に部隊を侵入させていたようで、他の部隊もその動きに合わせて動き出しているようです」

「成程、考えることは同じということね……。面白いわ」

「……はい」

私の言葉に桂花は、少し暗い言葉を返す。

軍師として、同じ策を取られたことに対して何か思うことがあるのかもしれない。

とはいえ、この状況ではこの手を取るのが最善。  
同じ策になっても仕方がないとも言えた。

「私達が先か、孫策達が先か。一体、どうなるのかしらね？」

「……………」

私は隣に居る蓮にそう問いかけるが、蓮は何も答えなかった。  
そして唯、静かに火の手が上がっている城を見つめている。

その顔には何を考えているのか全くわからない、無の表情が浮かんでいた。

蓮が何も返さないことに少し寂しさを感じたが、それも当然かと思う。

自分を賭けた戦いなど、蓮が好むはずがない。

勝手なことをしているとも思いつし、申し訳ないとも思った。

だって、これは蓮の意思を完全に無視しているのだから……。

それでも、私の気持ちは止められない。

この勝負に勝って、蓮を手に入れる。

名声なども重要ではあるが、この戦いにおいての最重要はそのことだった。

「華琳様！ 城門が開いたようです！」

私がそんなことを考えていると、桂花が再度、報告をして来た。

……考えるのも謝るのも後で出来ることだ。

これは甘えでしかないけれど、蓮はきつと謝れば許してくれると思う。

そして、勝ったら伝えよう。  
私の気持ちを全部、蓮に伝えよう。  
だから、今は……。

「風達に逃げ出した残党の処理をするように伝えなさい！　そして  
私達も、後詰として出陣するわよ！」

「御意っ！」

私は頭を目の前の戦へと切り替えると、指示を出す。  
城門が空いたのなら、あとは大将首を獲るだけ……。

どちらが先に張角の下に辿り着くかの勝負。

春蘭達なら、大丈夫。

きつとやってくれるはずだ。

私はそう思うと、自分の部隊を進軍させるために行動を開始する。

蓮はまだその場をじっと動かずに、城を眺めているだけだった。

（SIDE雪蓮）

「曹操達も動き出しているわね……」

「ああ、その他の軍も幾つか動いている」

冥琳の言うとおり、私達と曹操軍の動きを見て、動き出している軍勢があった。

代表として挙げれば、劉備達の軍がその例だ。

城門の攻めは祭が担当しているが、その数は少ない。

曹操や他の軍勢が来れば、数に押されて一足遅れてしまつかもしれない。

なら……。

「私も祭の部隊の所に行くわ！ そろそろ城門も開くはずだし、このままだと多分、道を塞がれる」

「……わかった。気をつけろよ」

「了解」

少し心配そうな冥琳に、いつも通りそう声をかけると、私は馬に乗って自分の部隊を引き連れて祭の下へと急いだ。

まだ、門は開いていない。今の内にっ！

しかし、そうして急ぐ私は向かっている途中で、曹操軍の夏侯惇達と鉢合わせになった。

そして、先頭で共に並びながら馬を走らせる。

「悪いけど、大将は私が貰うわよ！」

「ふん、華琳様の命なのだ。私も遅れを取るつもりはない！」

私の言葉に夏侯惇はそう返して来た。

曹操が直々に出て来るわけではないとすると、私の競争相手は彼女

だ。

直接、戦ったわけではないけど、かなりの武を持っていると見ていい。

そう思った私は、もう一度、自分に気合いを入れ直した……。

「祭っ！」

「っ、策殿！ もうすぐ、城門が開きますぞ！」

「わかったわ！ 祭はそのまま私に続いて突入した後、周囲の敵を潰して！」

「応っ！」

祭の下に辿り着いたのは、城門が開く寸前だった。

私は祭に指示を出すと、そのまま城の中に突入していく。

「孫策隊っ！ これからが本番よ！ 気を引き締めなさい！」

城門の周りの敵は祭達に任せて、目指すのは敵の牙門旗のある場所。唯、その一点のみだ。

私は自分の部隊に声をかけると、進軍の速度を上げた。

「くっ、やっぱり多いわね……」

目の前に続々と湧いてくる黄巾党を斬り伏せながら、私は大通りを直走る。

城内の大通りには、予想上に黄巾党が蠢いている状態だった。

これをまともに相手していても時間も兵数も足りない。

……ここは回り道をしてでも、別の道を進むべきだ。

そう思った私は、狭い小道へと進む方向を変える。

すぐ後ろに付いて来ていた夏侯惇達は、そのまま大通りを突っ切るみたいだった。

私達は、迫りくる黄巾党の連中を夏侯惇達に押しつけながら、小道へと足を進めた。

「はあっ！ 死にたくなかったら、ささつと道を開けなさい！」

小道にも勿論、黄巾党はいたが、その数はそんな多くない。

私が敵兵の首を落としながらそう言つと一瞬怯んだが、また声を出しながら向かってくる。

こっちは急いでるのに……！

そんな気持ちが生かびながらも、着実に敵を屠りながら進んで行く。

まだ、牙門旗は堕ちていない。

まだ、大丈夫。

私は、そう自分に言い聞かせた。

小道を抜けて、敵と味方が蠢く大通りに飛び出すと、私達は夏侯惇達の前方に出ていた。

「よしっ！」

「なっ！ 孫策っ！」

「くそっ！ 速いな！」

私の姿を見て、慌てだす夏侯惇達を尻目に私は前に進み、その距離を離して行く。

内心で、貰ったと私は思った。

これで蓮を正々堂々取り戻せる、そう思った。

でも、現実はそのな甘くない。

敵の本陣に後少しと言う所になって、私の前に多くの兵を連れた男が現れたのだ。

「我が名は、張宝。大賢良師、張角の弟だ！ 黄天に仇なす者どもよ！ 兄者には一歩も近づけさせんぞ！」

そう叫ぶと、張宝と名乗った男は私の行く道を塞ぐ。

私は内心で、盛大に舌打ちをした。

確かに、黄巾党の頂点には三人いたのは知っている。

この男の首を獲れば、手柄にもなる……。  
けどね……。

「私は孫策よ！ 悪いけど、私は急いでいるの。だから……」

私は血に濡れた南海霸王を、男に向けた。

今、欲しいのはこの男の首ではない。

そう、欲しいのはお前の首なんかじゃない！

「邪魔しないでっ！」

私はそう叫ぶと、剣を横に振った。  
この一撃で決めるつもりで、力一杯、振り抜いた。  
しかし……。

「うぐっ……」

その一撃は首ではなく、敵の肩を切り裂くに留まる。

苦しそうな声を出しつつも、張宝はまだ立って私の道を塞いだままだった。

仕留め損なったっ！？

私とその事実には驚愕していると、私の横を駆け抜けて行く者達がいる。  
た。

その者達の先頭にいる者と一瞬、目が合う。

その者……夏侯惇は私にやりと笑みを見せると、そのまま敵の本陣に乗り込んで行った。

マズイ。

私はそう思った。

マズイ。

これはマズイ。

早く、早くしないと蓮が……。

曹操に蓮が取られてしまう……。

そんなのはダメ！ 絶対にダメだ！

「くそっ！ 道を、道を開けるおお！！」

「……誰が行かせるか！！」

もう満足に剣も持てなくせに、張宝は私の前に立ち塞がる。

焦って少し大振りになった私の剣を、男はふらつきながらも紙一重で避けた。

いや、逆にふらついたからこそ避けられた。

でも私がそのことに気づくことはなく、唯、焦りが増しただけだった。

その間に張宝は少し、私と距離を取る。

もう時間が……。

時間がないのに……。

周りの兵達も張宝の親衛隊と戦闘中。

祭達もまだここには着いていない。

もう間に合わない……。

そんな嫌な考えが頭に過る。

……いや、まだ急げば、間に合うはずだ。

そう思え！ そう信じる！

私はそう自分に言い聞かせると、張宝を睨む。

もう、一撃を狙う必要はない。

あと一度、斬ればあの張宝は討ち獲れる。

私は少し気を静めて、再度、張宝に剣を振った。

もう逃しはしないっ！

「はあ、はあ、はあ」

私は張宝を討った後、急いで敵の本陣へと走った。

まだ、そんなに時間は経っていない。

張角達が粘ってくれていれば、まだ希望はあるはず……。

そう思いながら、まだ残っていた張角の親衛隊らしき者を斬り払い、本陣に入る。

そして、それと同時に敵の牙門旗が倒れた。

「えっ……」

私は呆然と、そう漏らす。

間に、合わなかった……？

思わず、全身の力が抜けた。

先に張角が討たれてしまった……。

曹操に、私は負けた……。

がくつと肩を落とした私の耳に、張角を討った者の勇ましい声が聞こえて来る。

最悪の気分だ……。

正直、聞きたくもない。

張角を討った夏侯惇の勝ち鬨なんて……。

「黄巾党の頭、張角っ！ 劉備が一の家臣、この関 雲長が討ち獲ったあ……！」

「えっ……？」

何それ？

どうなってるの？

それを聞いた私はもう一度、呆然となり、そう言葉を漏らしたのだ。  
った。

第四十話　真剣で私と勝負しなさい！（後書き）

第四十話。終了です！

いかがだったでしょうか？

記念すべき四十話です！

しかしながら、過去最高に出来に自信がない……。

戦闘描写とかこんなに難しかったっけ？

しかも勝ったのは愛紗って何さ？

誤字脱字がありましたらご報告をお願いします。

あと感想などもお待ちしています！

では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0746w/>

---

我が家のお猫様！

2011年11月27日11時49分発行